

## 第5章 農業分野

### 5.1. 農業分野の概要

農業分野における温室効果ガス排出量は、3A、3B、3C、3D、3F、3G、3Hの7つのカテゴリにおいて算定を行なう。「3A：消化管内発酵」では牛、水牛、めん羊、山羊、馬、豚の消化管内のメタン発酵により生成されたCH<sub>4</sub>の体内からの排出について報告を行う。「3B：家畜排せつ物の管理」では牛、水牛、めん羊、山羊、馬、豚、家禽類（採卵鶏とブロイラー）、うさぎ、ミンクが排せつする排せつ物の処理に伴うCH<sub>4</sub>及びN<sub>2</sub>Oの発生について報告を行う。「3C：稲作」では稲を栽培するために耕作された水田（常時湛水田、間断灌漑水田）からのCH<sub>4</sub>の排出について報告を行う。「3D：農用地の土壌」では農用地の土壌からのN<sub>2</sub>Oの直接排出及び間接排出について報告を行う。「3E：サバンナの野焼き」については、我が国には発生源が存在しないためNOとして報告する。「3F：農作物残さの野焼き」では農業活動に伴い穀物、豆類、根菜類、さとうきびを焼却した際のCH<sub>4</sub>及びN<sub>2</sub>Oの排出について報告を行う（CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O以外にもCO、NO<sub>x</sub>が発生する。CO、NO<sub>x</sub>は別添3参照）。「3G：石灰施用」および「3H：尿素施用」では、それぞれ土壌に石灰（炭酸カルシウム等）、尿素を施用した際に発生するCO<sub>2</sub>について報告を行う。

2018年度における当該分野からの温室効果ガス排出量は33,252 kt-CO<sub>2</sub>換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の2.7%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると11.1%の減少となっている。

農業分野で用いている方法論のTierは、表5-1に示すとおりである。

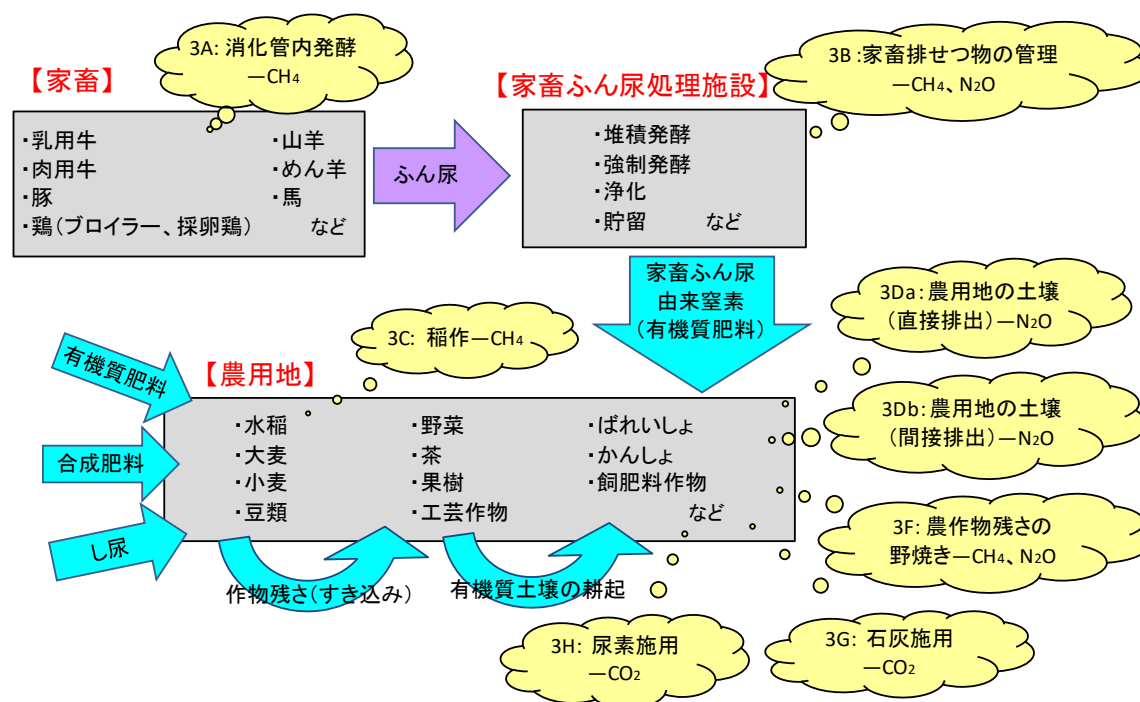


図 5-1 我が国の農業分野におけるカテゴリ間関係

表 5-1 農業分野で用いている方法論の Tier

温室効果ガスの種類 カテゴリー	CO <sub>2</sub>		CH <sub>4</sub>		N <sub>2</sub> O	
	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数	算定方法	排出係数
3.A. 消化管内発酵			CS,T1	CS,D		
3.B. 家畜排せつ物の管理			CS,T1	CS,D	CS,T1	CS,D
3.C. 稲作			T3	CS		
3.D. 農用地の土壌					CS,T2	CS,D
3.F. 農作物残さの野焼き			T1	D	T1	D
3.G. 石灰施用	T1	D				
3.H. 尿素施肥	T1	D				

D: IPCC デフォルト値、T1: IPCC Tier1、T2: IPCC Tier2、T3: IPCC Tier3、CS: 国独自の的方法または排出係数

## 5.2. 消化管内発酵 (3.A.)

牛、水牛、めん羊、山羊などの反すう動物は複胃を持っており、第一胃でセルロース等を分解するために嫌氣的発酵を行い、その際に CH<sub>4</sub>が発生する。馬、豚は反すう動物ではなく単胃であるが、消化管内発酵により CH<sub>4</sub>を微量に発生させ、大気中に放出している。消化管内発酵 (3.A.) ではこれらの CH<sub>4</sub>排出に関する算定、報告を行なう。

2018 年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は 7,466 kt-CO<sub>2</sub>換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.6%を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 20.8%の減少となっている。この 1990 年度からの減少の主な要因は牛の家畜頭数の減少によるものである。

表 5-2 消化管内発酵に伴う CH<sub>4</sub>排出量 (3.A.)

ガス	家畜種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH <sub>4</sub>	3.A.1.- 乳用牛	kt-CH <sub>4</sub>	192.1	184.4	171.2	162.9	149.5	146.3	146.2	143.4	139.7	137.0	136.4	133.5	133.5	133.5
	3.A.1.- 肉用牛		166.6	172.2	171.7	168.0	174.3	166.5	164.7	159.6	154.8	150.0	150.3	151.1	151.7	150.7
	3.A.2. めん羊		0.167	0.115	0.097	0.071	0.113	0.159	0.160	0.129	0.138	0.140	0.140	0.143	0.158	0.162
	3.A.3. 豚		15.9	13.9	13.7	13.5	13.8	13.7	13.6	13.6	13.4	13.2	13.0	13.1	12.9	12.8
	3.A.4.- 水牛		0.011	0.007	0.006	0.005	0.004	0.004	0.004	0.005	0.005	0.006	0.006	0.006	0.006	0.006
	3.A.4.- 山羊		0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
	3.A.4.- 馬		2.1	2.1	1.9	1.6	1.5	1.3	1.4	1.3	1.3	1.2	1.3	1.3	1.4	1.4
	合計		kt-CH <sub>4</sub>	376.9	372.7	358.7	346.0	339.2	328.1	326.2	318.1	309.5	301.7	301.4	299.2	299.8
	kt-CO <sub>2</sub> 換算	9,423	9,318	8,966	8,651	8,480	8,202	8,154	7,953	7,737	7,543	7,534	7,481	7,494	7,466	

### 5.2.1. 牛 (3.A.1.)

#### a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは牛の消化管内発酵による CH<sub>4</sub>排出に関する算定、報告を行なう。

#### b) 方法論

##### ■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Volume 4, Page 10.25, Fig.10.2) に従うと、乳用牛及び肉用牛については Tier 2 法を用いて算定を行うこととされている。Tier 2 法では、家畜の総エネルギー摂取量にメタン変換係数を乗じて排出係数を算定することとされているが、日本では畜産関係の研究において乾物摂取量を用いた算定を行っており、研究結果を利用することによってより排出実態に即した算定結果が得られると考えられる。このため、牛の消化管内発酵に伴う CH<sub>4</sub>排出量については、Tier 2 法と類似した日本独自の手法を用い、牛 (乳用牛、肉用牛) の飼養頭数に、乾物摂取量に基づき設定した排出係数を乗じて CH<sub>4</sub>排出量を求めた。

$$E = \sum (EF_i \times A_i)$$

- $E$  : 牛の消化管内発酵による CH<sub>4</sub>排出量 [kg-CH<sub>4</sub>]  
 $EF_i$  : 牛の種類  $i$  の消化管内発酵に関する CH<sub>4</sub>排出係数 [kg-CH<sub>4</sub>/頭]  
 $A_i$  : 牛の種類  $i$  の頭数 [頭]

牛は、月齢3ヶ月頃から粗飼料を本格的に摂取し始めるため、月齢3ヶ月以上の牛を消化管内発酵によるCH<sub>4</sub>排出の算定対象とする（月齢3ヶ月未満の牛は算定対象外）。我が国の排出実態を反映するために、牛の消化管内発酵に伴うCH<sub>4</sub>排出の算定区分を表5-3に示すように定義し、種類、年齢ごとに排出量の算定を行った。

表 5-3 牛の消化管内発酵に伴う CH<sub>4</sub>排出の算定区分

家畜種		排出量算定の前提条件等		区分の補足情報	
乳用牛	搾乳牛	初産	飼養頭数に、乳用牛群能力検定成績に記載の産次別頭数から算出した産児別頭数割合を用いて算出する。	搾乳している牛。畜産統計において、2歳以上の頭数が記載されている。	
		2産			
		3産以上			
	乾乳牛		—	現在、搾乳していない期間の搾乳目的の牛。	
	育成牛	2歳未満、7ヶ月以上	飼養頭数の6/24に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、2歳未満の飼養頭数の18/24が対象となる。	2歳未満の牛で搾乳目的の牛。畜産統計において、2歳未満の頭数が記載されている。	
		月齢3~6ヶ月	2歳未満の飼養頭数の4/24に相当する、3~6ヶ月の育成牛が対象となる。		
月齢3ヶ月未満		2歳未満の飼養頭数の2/24に相当する。CH <sub>4</sub> 排出量算定の対象外。			
肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	—	繁殖を目的とした雌牛（乳用牛を除く）。畜産統計において、1歳未満、1歳、2歳、3歳以上の頭数が記載されている。	
		2歳未満、7ヶ月以上	1歳未満の飼養頭数の6/12に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、1歳未満の飼養頭数の6/12と2歳未満である1歳の飼養頭数を合算している。		
		月齢3~6ヶ月	1歳未満の飼養頭数の4/12に相当する、3~6ヶ月の牛が対象となる。		
		月齢3ヶ月未満	1歳未満の飼養頭数の2/12に相当する。CH <sub>4</sub> 排出量算定の対象外。		
	肥育牛	和牛（雄）	1歳以上	—	日本在来種であり、食肉専用種。畜産統計において、肉用種おすととして、1歳未満、1歳、2歳以上の頭数が記載されている。
			1歳未満、7ヶ月以上	1歳未満の飼養頭数の6/12に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、1歳未満の飼養頭数の6/12が対象となる。	
			月齢3~6ヶ月	1歳未満の飼養頭数の4/12に相当する、3~6ヶ月の牛が対象となる。	
			月齢3ヶ月未満	1歳未満の飼養頭数の2/12に相当する。CH <sub>4</sub> 排出量算定の対象外。	
		和牛（雌）	1歳以上	—	日本在来種である食肉専用種の雌。畜産統計において、肉用種めすととして、1歳未満、1歳、2歳など（8区分）以上の頭数が記載されている。
			1歳未満、7ヶ月以上	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
			月齢3~6ヶ月	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
			月齢3ヶ月未満	和牛（雄）の同月齢区分と同様	
乳用種	乳用種	月齢7ヶ月以上	飼養頭数の6/24に相当する牛は月齢6ヶ月以下と仮定し、当算定区分の対象外としている。よって、2歳未満の飼養頭数の18/24が対象となる。	肉用目的の乳用種の牛（ホルスタインなど）。	
		月齢3~6ヶ月	2歳未満の飼養頭数の4/24に相当する、3~6ヶ月の牛が対象となる。		
		月齢3ヶ月未満	2歳未満の飼養頭数の2/24に相当する。CH <sub>4</sub> 排出量算定の対象外。		
	交雑種	月齢7ヶ月以上	乳用種の月齢7ヶ月以上の区分と同様	乳用種の雌に肉用種の雄を交配して肉用目的に生産されたF1牛など。	
		月齢3~6ヶ月	乳用種の月齢3~6ヶ月以上の区分と同様		
		月齢3ヶ月未満	乳用種の月齢3ヶ月未満の区分と同様		

■ 排出係数

牛の消化管内発酵に伴う CH<sub>4</sub>の排出係数については、日本における反すう家畜を対象とし

た呼吸試験の結果（乾物摂取量に対する CH<sub>4</sub>排出量の測定データ）に基づいて設定した。測定結果によると、反すう家畜の消化管内発酵に伴う CH<sub>4</sub>排出量は、乾物摂取量を説明変数とする次式により算定できることが明らかにされている（柴田ら（1993））。

$$EF = Y / L_{CH_4} \times Mol_{CH_4} \times Day$$

$$Y = -17.766 + 42.793 \times DMI - 0.849 \times (DMI)^2$$

<i>EF</i>	: 牛の消化管内発酵 CH <sub>4</sub> 排出係数 [kg-CH <sub>4</sub> /頭]
<i>Y</i>	: 1頭あたり1日あたりの CH <sub>4</sub> 発生量 [l/頭/日]
<i>L<sub>CH<sub>4</sub></sub></i>	: CH <sub>4</sub> 1mol 体積 [l/mol]
<i>Mol<sub>CH<sub>4</sub></sub></i>	: CH <sub>4</sub> 分子量 [kg/mol]
<i>Day</i>	: 年間日数 [日]
<i>DMI</i>	: 乾物摂取量 [kg/日]

この算定式に、牛の種類ごとの乾物摂取量を当てはめ、毎年の排出係数をそれぞれ設定した。乾物摂取量は農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本飼養標準」に記載の牛の種類ごとに設定した算定式に、体重及び増体日量を代入することで算定した。乳用牛では乾物摂取量算定に脂肪補正乳量の値も用いた。なお、乳用牛（搾乳牛及び乾乳牛）は2006年に、肉用牛（和牛・雄）は2008年に乾物摂取量の算定式が改訂された。

脂肪補正乳量については、農林水産省「牛乳製品統計」及び農林水産省「畜産統計」を基に計算した乳量と、農林水産省「畜産物生産費統計」に記載の乳脂肪率とを使用して算出し、毎年度データを更新した。

乳用牛の内の搾乳牛と乾乳牛の体重は、(社)家畜改良事業団「乳用牛群能力検定成績」に記載の産次別平均分娩時月齢を「日本飼養標準」に記載の成長曲線に当てはめて産次別体重を求め、各産次別体重の平均値を採用した。ただし、「乳用牛群能力検定成績」に記載の産次別平均分娩時月齢について、初産牛の平均分娩時月齢は毎年掲載されているものの、2産以上の牛の月齢は2014年以前の記載がなく、2014年以前の2産以上の牛の値は、2015年度値で代用した。また、乳用牛の成長曲線を示す回帰式は、1994年、1999年、2006年に改訂されており、当該年以降はそれぞれの改訂された式を用いた。育成牛と肉用牛の体重及び増体日量は、「日本飼養標準」の各巻末にある牛の種類ごとの各月齢における体重の一覧表を用いた。

表 5-4 牛の乾物摂取量 (DMI) の算定式

家畜種		算定式
乳用牛	搾乳牛	2006 年以降: $DMI = 1.3922 + 0.05839 \times W^{0.75} + 0.40497 \times FCM$ $DMI = 1.9120 + 0.07031 \times W^{0.75} + 0.34923 \times FCM$ (初産牛) $FCM = (15 \times FAT / 100 + 0.4) \times MILK$ 2005 年以前: $DMI = 2.98120 + 0.00905 \times W + 0.41055 \times FCM$ $FCM = (15 \times FAT / 100 + 0.4) \times MILK$
	乾乳牛	$DMI = 0.017 \times W$
	育成牛	$DMI = 0.49137 + 0.01768 \times W + 0.91754 \times DG$
肉用牛	繁殖雌牛	48 カ月まで: $DMI = [0.1067 \times W^{0.75} + (0.0639 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = 0.4213 + 0.1491 \times DG$ 49 カ月以降: $DMI = [0.1119 \times W^{0.75} + (0.0639 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / 1.81$ 妊娠末期の維持 (妊娠末期 2 カ月に加算): DMI に 1.0 kg/日を加算 授乳中の維持 (授乳期 5 カ月に加算): DMI に 0.5 kg/日/乳量を加算 ※ 対象の月齢は 120 カ月まで
	和牛 (雄)	2008 年以降: $DMI = -3.481 + 2.668 \times DG + 4.548 \times 10^{-2} \times W - 7.207 \times 10^{-5} \times W^2 + 3.867 \times 10^{-8} \times W^3$ 2007 年以前: $DMI = [0.1124 \times W^{0.75} + (0.0546 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / \{q \times (1.653 - 0.00123 \times W)\} / (q \times 4.4)$ $q = 0.5304 + 0.0748 \times DG$
	和牛 (雌)	$DMI = [0.1108 \times W^{0.75} + (0.0609 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = 0.5018 + 0.0956 \times DG$
	乳用種 (月齢 7 ヶ月以上)	$DMI = [0.1291 \times W^{0.75} + (0.0510 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = (0.933 + 0.00033 \times W) \times (0.498 + 0.0642 \times DG)$
	乳用種 (月齢 3~6 ヶ月)	$DMI = [0.1291 \times W^{0.75} + \{1.00 + 0.030 \times W^{0.75}\} \times DG] / (0.78 \times q + 0.006) / (q \times 4.4)$ $q = (0.859 - 0.00092 \times W) \times (0.790 + 0.0411 \times DG)$
	交雑種	$DMI = [0.1208 \times W^{0.75} + (0.0531 \times W^{0.75} \times DG) / (0.78 \times q + 0.006)] / (q \times 4.4)$ $q = (0.933 + 0.00033 \times W) \times (0.498 + 0.0642 \times DG)$

(注) W: 体重、FCM: 脂肪補正乳量、FAT: 乳脂肪率、MILK: 乳量、DG: 増体日量、q: エネルギー代謝率 (出典)「日本飼養標準」

表 5-5 牛の乳量 (MILK) 及び乳脂肪率 (FAT)

項目	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳量 (搾乳牛) 三産以上	kg/頭/日	21.9	23.6	24.7	26.6	27.1	26.9	26.9	27.3	27.4	28.0	28.6	28.7	28.8	28.8
乳量 (搾乳牛) 二産	kg/頭/日	21.4	23.1	24.2	26.0	26.5	26.4	26.3	26.8	26.9	27.3	27.9	28.0	28.1	28.1
乳量 (搾乳牛) 初産	kg/頭/日	18.5	19.9	20.9	22.4	22.8	22.7	22.7	23.0	23.1	23.5	24.0	24.2	24.5	24.4
乳脂肪率 (搾乳牛)	%	3.7	3.8	3.9	4.0	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9

表 5-6 牛の体重 (W) [kg・頭<sup>-1</sup>]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	653.8	653.5	673.7	673.4	685.8	685.6	685.9	685.7	685.2	684.7	684.7	684.3	683.9	683.8	
	搾乳牛 (二産)	598.4	601.6	622.6	622.6	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.9	623.4	622.5	622.5	
	搾乳牛 (初産)	517.2	528.0	551.1	538.3	524.6	523.6	525.6	524.6	524.6	523.6	523.6	522.6	521.6	520.5	
	乾乳牛	601.0	602.4	625.3	618.5	625.6	623.3	621.3	619.9	620.1	618.7	617.4	616.8	616.9	616.6	
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	342.4	349.3	364.9	374.2	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	376.1	
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	118.9	119.2	123.0	135.3	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	137.8	
肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	471.1	471.1	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8	512.8
		2歳未満、7ヶ月以上	314.9	314.9	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0	383.0
		月齢3~6ヶ月	118.4	118.4	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2
	肥育牛	和牛・雌 (1歳以上)	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8	562.8
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0	257.0
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5	120.5
		和牛・雌 (1歳以上)	382.4	382.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4	456.4
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	219.8	219.8	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0	266.0
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	118.4	118.4	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2	127.2
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8	479.8
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4	160.4		



表 5-7 牛の増体日量 (DG) [kg・頭<sup>-1</sup>日<sup>-1</sup>]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
乳用牛	搾乳牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	乾乳牛	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
肉用牛	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	0.60	0.63	0.65	0.59	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	0.58	
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	0.70	0.71	0.76	0.91	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	
	繁殖雌牛	2歳以上	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01	0.01
		2歳未満、7ヶ月以上	0.50	0.50	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60	0.60
	肥育牛	月齢3~6ヶ月	0.74	0.74	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
		和牛・雄 (1歳以上)	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62	0.62
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81	0.81
		和牛・雌 (1歳以上)	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29	0.29
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	0.71	0.71	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96	0.96
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	0.74	0.74	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93	0.93
交雑種 (月齢3~6ヶ月)	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14		

表 5-8 牛の乾物摂取量 (DMI) [kg・日<sup>-1</sup>]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	17.5	18.3	19.1	19.9	20.1	20.0	20.0	20.1	20.1	20.3	20.6	20.7	20.7	20.7	
	搾乳牛 (二産)	16.9	17.7	18.4	19.3	19.3	19.2	19.2	19.4	19.4	19.6	19.8	19.8	19.9	19.9	
	搾乳牛 (初産)	14.9	15.7	16.4	17.0	17.5	17.4	17.5	17.6	17.6	17.7	17.9	17.9	18.0	18.0	
	乾乳牛	10.2	10.2	10.6	10.5	10.6	10.6	10.6	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	7.1	7.2	7.5	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	3.2	3.2	3.4	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8
	肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	7.7	7.7	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0
2歳未満、7ヶ月以上			6.3	6.3	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4	7.4
肥育牛		月齢3~6ヶ月	3.4	3.4	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7
		和牛・雄 (1歳以上)	8.2	8.2	8.2	8.2	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7	7.7
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	6.5	6.5	6.5	6.5	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9	6.9
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	3.6	3.6	3.6	3.6	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3	3.3
		和牛・雌 (1歳以上)	5.6	5.6	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3	6.3
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	4.7	4.7	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9	5.9
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	3.0	3.0	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5	8.5
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4	4.4
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3	8.3
		交雑種 (月齢3~6ヶ月)	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6

表 5-9 牛の消化管内発酵に関する CH<sub>4</sub>排出係数 [kg-CH<sub>4</sub>・頭<sup>-1</sup>年<sup>-1</sup>]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
乳用牛	搾乳牛 (三産以上)	122.9	125.9	127.7	129.8	130.1	129.9	130.3	130.3	130.3	130.7	131.6	131.4	131.5	131.5	
	搾乳牛 (二産)	120.5	123.8	125.8	128.1	128.3	128.0	128.4	128.4	128.5	128.9	129.9	129.6	129.7	129.7	
	搾乳牛 (初産)	112.7	116.4	118.9	121.1	122.9	122.6	123.0	123.0	123.0	123.4	124.4	124.3	124.5	124.4	
	乾乳牛	86.3	86.6	89.0	88.2	89.0	88.7	88.8	88.4	88.4	88.2	88.3	88.0	88.0	88.0	
	育成牛 (2歳未満、7ヶ月以上)	63.4	64.7	66.9	67.8	68.0	68.0	68.1	68.0	68.0	68.0	68.1	68.0	68.0	68.0	
	育成牛 (月齢3~6ヶ月)	29.1	29.3	30.4	33.8	34.4	34.4	34.5	34.4	34.4	34.4	34.4	34.5	34.4	34.4	
肉用牛	繁殖雌牛	2歳以上	68.3	68.5	70.7	70.7	70.7	70.7	70.9	70.7	70.7	70.7	70.9	70.7	70.7	70.7
		2歳未満、7ヶ月以上	56.9	57.0	66.0	66.0	66.0	66.0	66.1	66.0	66.0	66.0	66.1	66.0	66.0	66.0
	肥育牛	月齢3~6ヶ月	30.3	30.3	33.7	33.7	33.7	33.7	33.8	33.7	33.7	33.7	33.8	33.7	33.7	33.7
		和牛・雄 (1歳以上)	72.1	72.3	72.1	72.1	68.5	68.5	68.7	68.5	68.5	68.5	68.7	68.5	68.5	68.5
		和牛・雄 (1歳未満、7ヶ月以上)	58.8	59.0	58.8	58.8	61.7	61.7	61.8	61.7	61.7	61.7	61.8	61.7	61.7	61.7
		和牛・雄 (月齢3~6ヶ月)	33.0	33.1	33.0	33.0	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4	29.4
		和牛・雌 (1歳以上)	51.0	51.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.3	57.2	57.2	57.2	57.3	57.2	57.2	57.2
		和牛・雌 (1歳未満、7ヶ月以上)	43.1	43.2	53.7	53.7	53.7	53.7	53.8	53.7	53.7	53.7	53.8	53.7	53.7	53.7
		和牛・雌 (月齢3~6ヶ月)	26.7	26.8	30.9	30.9	30.9	30.9	31.0	30.9	30.9	30.9	31.0	30.9	30.9	30.9
		乳用種 (月齢7ヶ月以上)	74.2	74.4	74.2	74.2	74.2	74.2	74.4	74.2	74.2	74.2	74.2	74.4	74.2	74.2
		乳用種 (月齢3~6ヶ月)	5.4	4.4	2.7	2.9	2.6	2.5	2.4	2.3	2.2	2.1	2.0	1.9	1.8	1.7
		交雑種 (月齢7ヶ月以上)	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0	73.2	73.0	73.0	73.0
		交雑種 (月齢3~6ヶ月)	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1	42.2	42.1	42.1	42.1

■ 活動量

当該カテゴリーの活動量については、「畜産統計」に示された、毎年2月1日時点の各種牛の飼養頭数を用いた。

表 5-10 牛の飼養頭数 [1000 頭]

家畜種		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳用牛	搾乳牛（三産以上）	510	467	447	391	392	374	364	347	334	324	317	308	309	308
	搾乳牛（二産）	260	250	241	229	208	196	197	203	202	191	194	193	194	193
	搾乳牛（初産）	313	318	283	280	230	235	251	248	236	235	241	234	228	228
	乾乳牛	332	299	249	231	200	195	200	194	185	184	185	179	176	171
	育成牛（2歳未満、7ヶ月以上）	491	445	379	379	341	351	328	323	328	328	306	307	316	323
	育成牛（月齢3～6ヶ月）	109	99	84	84	76	78	73	72	73	73	68	68	70	72
	育成牛（月齢3ヶ月未満）	55	49	42	42	38	39	36	36	36	36	34	34	35	36
<b>乳用牛合計</b>		<b>10,187</b>	<b>9,266</b>	<b>8,515</b>	<b>7,745</b>	<b>7,219</b>	<b>7,106</b>	<b>6,984</b>	<b>6,858</b>	<b>6,762</b>	<b>6,699</b>	<b>5,328</b>	<b>3,983</b>	<b>3,330</b>	<b>2,002</b>
肉用牛	繁殖雌牛														
	2歳以上	612	591	555	536	588	575	560	541	520	505	511	511	517	528
	2歳未満、7ヶ月以上	84	69	68	71	79	78	68	64	62	61	64	69	75	79
	月齢3～6ヶ月	12	9	8	9	11	11	9	9	9	9	9	12	12	13
	月齢3ヶ月未満	6	4	4	5	6	5	5	4	5	4	5	6	6	6
	和牛・雄（1歳以上）	368	412	385	374	425	409	405	396	381	368	371	374	379	380
	和牛・雄（1歳未満、7ヶ月以上）	125	133	114	119	132	127	123	116	115	112	109	110	116	120
	和牛・雄（月齢3～6ヶ月）	83	89	76	80	88	85	82	77	77	75	72	73	77	80
	和牛・雄（月齢3ヶ月未満）	42	44	38	40	44	42	41	39	38	37	36	37	39	40
	和牛・雌（1歳以上）	197	265	246	290	339	336	343	337	328	313	293	310	312	310
	和牛・雌（1歳未満、7ヶ月以上）	102	105	93	89	106	101	98	93	91	89	86	81	84	89
	和牛・雌（月齢3～6ヶ月）	68	70	62	59	70	67	65	62	60	59	57	54	56	60
	和牛・雌（月齢3ヶ月未満）	34	35	31	30	35	34	33	31	30	30	29	27	28	30
	乳用種（月齢7ヶ月以上）	665	541	333	351	316	309	294	282	276	259	249	235	221	206
	乳用種（月齢3～6ヶ月）	148	120	74	78	70	69	65	63	61	58	55	52	49	46
	乳用種（月齢3ヶ月未満）	74	60	37	39	35	34	33	31	31	29	28	26	25	23
	交雑種（月齢7ヶ月以上）	140	267	511	438	410	362	374	373	363	362	379	391	388	371
交雑種（月齢3～6ヶ月）	31	59	114	97	91	81	83	83	81	80	84	87	86	82	
交雑種（月齢3ヶ月未満）	16	30	57	49	46	40	42	41	40	40	42	43	43	41	
<b>肉用牛合計</b>		<b>2,805</b>	<b>2,901</b>	<b>2,806</b>	<b>2,755</b>	<b>2,892</b>	<b>2,763</b>	<b>2,723</b>	<b>2,642</b>	<b>2,567</b>	<b>2,489</b>	<b>2,479</b>	<b>2,499</b>	<b>2,515</b>	<b>2,503</b>

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は算定式の95%信頼区間から算出した（乳用牛：-26%～+32%、肉用牛：-40%～+49%）。牛の頭数（活動量）は「畜産統計」における全頭調査の結果であり標準誤差が示されていないことから、「畜産統計」の豚の数値（1%）で代用した。その結果、排出量の不確実性は乳用牛で-26%～+32%、肉用牛で-40%～+49%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は上記した方法を使用して、1990年度から一貫した方法で算定している。活動量は「畜産統計」を使用し、1990年度から一貫した方法を使用している。

d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

また、2016年度に開催されたQA活動（QAワーキンググループ）の実施により、「乳用牛なら3か月程度で離乳し、活発にCH<sub>4</sub>を生成する」との指摘を受けたことから、算定方法検討会における議論を経て、月齢3～4か月の牛の排出量を算定に含むよう2017年提出インベントリで改善が行われた。

加えて、我が国の算定方法と IPCC Tier 2 法による排出量算定結果との比較を行った。その際、Tier 2 法には2006年 IPCC ガイドラインで示された式（Vol.4, Chapter 10, EQUATION 10.3～10.16）を用い、上記表 5-3 に示した分類でそれぞれ算定を行った。なお、わが国のデータが利用可能なものは利用し（例：上記の表 5-4～表 5-8 の値、「日本飼養標準」に示された値



から計算した DE 値など)、利用可能でないものは 2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を用いた (例:  $Y_m$  値、 $C_{f_i}$  値、 $C_{pregnancy}$  値など)。その結果、肉用牛と乳用牛の両方に関して、 $CH_4$  変換率 ( $Y_m$ ) の誤差範囲を踏まえると ( $Y_m=6.5\% \pm 1.0\%$ )、我が国の算定方法による排出量は IPCC Tier2 法で算出した排出量が取りうる範囲内にあった。したがって、わが国の方法と IPCC Tier2 法による排出量に重大な差異はないと考えられる。

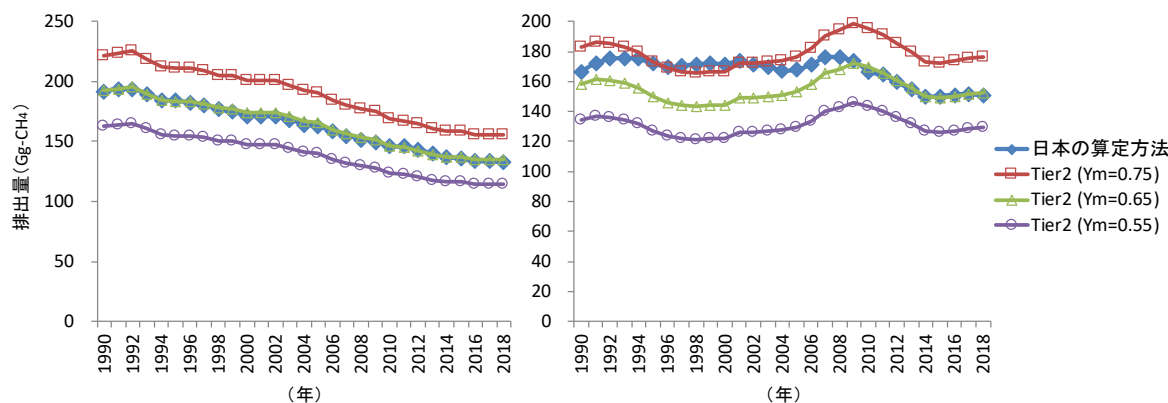


図 5-2 我が国の算定方法と IPCC Tier2 法の比較 (左: 乳用牛、右: 肉用牛)

#### e) 再計算

牛の算定区分が改訂されたため、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

#### f) 今後の改善計画及び課題

ルーメン内発酵の制御 (飼料への脂肪酸カルシウムの添加等) によるメタン発生抑制技術や混合飼料給与 (TMR 給与) による飼料利用効率の向上に伴う排出削減を反映できるような算定方法の構築について検討を行う予定である。

### 5.2.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、豚 (3.A.2., 3.A.3., 3.A.4.-)

#### a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは水牛、めん羊、山羊、馬、豚の消化管内発酵による  $CH_4$  排出に関する算定、報告を行なう。

#### b) 方法論

##### ■ 算定方法

$CH_4$  排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデシジョンツリーに従い、Tier1 法により算定を行った。

$$E = EF \times A$$

- $E$  : 各家畜の消化管内発酵による  $CH_4$  排出量 [kg- $CH_4$ ]
- $EF$  : 各家畜の消化管内発酵に関する  $CH_4$  排出係数 [kg- $CH_4$ /頭]
- $A$  : 各家畜の頭数 [頭]

##### ■ 排出係数

豚の  $CH_4$  排出係数については、日本国内の研究成果に基づく値を設定した。

めん羊、山羊、馬、水牛の CH<sub>4</sub>排出係数については、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を用いた。

表 5-11 豚、めん羊、山羊、馬、水牛の消化管内発酵に関する CH<sub>4</sub>排出係数

家畜種	CH <sub>4</sub> 排出係数 [kg/頭/年]	参考文献
豚	1.4	齋藤 (1988) をもとに算出 2006 年 IPCC ガイドライン
めん羊	8	
山羊	5	
馬	18.0	
水牛	55.0	

■ 活動量

めん羊及び山羊の活動量に関して、2009 年度までは (社) 中央畜産会「家畜改良関係資料」、2010 年度からは農林水産省「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」に示されたそれぞれの飼養頭数を用いた。豚の活動量については、「畜産統計」に示された、毎年 2 月 1 日時点の豚の飼養頭数を用いた。なお、2004 年度、2009 年度および 2014 年度は値を内挿した。馬の活動量に関して、2009 年度までは農林水産省「馬関係資料」、2010 年度からは「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」に示された飼養頭数を用いた。水牛の活動量は沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」に示された飼養頭数を用いた。

表 5-12 水牛、めん羊、山羊、豚、馬の飼養頭数 [1000 頭]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
めん羊	21	14	12	9	14	20	20	16	17	17	18	18	20	20
山羊	26	19	22	16	14	19	19	19	20	20	17	16	19	19
豚	11,336	9,900	9,788	9,621	9,834	9,768	9,736	9,684	9,536	9,424	9,313	9,346	9,190	9,157
馬	116	118	105	87	81	75	75	74	74	69	74	75	76	78
水牛	0.21	0.12	0.10	0.08	0.08	0.08	0.08	0.09	0.10	0.11	0.11	0.12	0.11	0.11

(注) 豚の 2009 年度、2014 年度値は内挿値。

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

各家畜分類で不確実性の評価を行った。豚の排出係数の不確実性は算定方法検討会で設定した値を採用した。豚以外の家畜の排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインに示された 50%を採用した。活動量については、豚は「畜産統計」に掲載の標準誤差 1%を採用し、豚以外の家畜の活動量の不確実性は、「畜産統計」に掲載のブロイラーの標準誤差で代替し、9%とした。その結果、排出量の不確実性は豚が-72~+157%、水牛、めん羊、山羊、馬が 51%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出係数は一定値を使用している。活動量には、「家畜改良関係資料」、「畜産統計」、「馬関係資料」、沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」、「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」を用いており、それぞれの家畜で 1990 年度から一貫した算定方法を用いている。

d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

e) 再計算

特になし。

f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.2.3. その他の家畜 (3.A.4.-)

2006年 IPCC ガイドラインに排出係数のデフォルト値が掲載されていて、上記で報告されていない家畜として、日本では鹿、アルパカが存在する。しかし、飼育頭数が少なく、いずれも算定方法検討会で定めた算定対象となる 3,000 t-CO<sub>2</sub>換算という閾値を超える排出量とはならないため、重要でない「NE」として報告した (別添5 参照)。

5.3. 家畜排せつ物の管理 (3.B.)

家畜の排せつ物の管理過程において、排せつ物中に含まれる有機物がメタン発酵によって分解される際に CH<sub>4</sub>が生成される。さらに、排せつ物中に消化管内発酵由来の CH<sub>4</sub>が溶けていてそれが通気や攪拌により大気中へ放出される。また、家畜の排せつ物の管理過程において、主に微生物の作用による硝化・脱窒過程で N<sub>2</sub>O が発生する。

2018年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は CH<sub>4</sub>が 2,324 kt-CO<sub>2</sub>換算、N<sub>2</sub>O が 3,922 kt-CO<sub>2</sub>換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) のそれぞれ 0.2%、0.3%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると CH<sub>4</sub>は 25.5%の減少、N<sub>2</sub>O は 6.8%の減少となっている。この 1990年度からの CH<sub>4</sub>排出量減少の主な要因は乳用牛の家畜頭数の減少によるものであり、N<sub>2</sub>O 排出量減少の主な要因は家畜頭数の減少に伴い大気沈降による間接 N<sub>2</sub>O 排出量が減少したことによるものである。

表 5-13 家畜排せつ物管理に伴う CH<sub>4</sub>及び N<sub>2</sub>O 排出量 (3.B.)

ガス	家畜種	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
CH <sub>4</sub>	3.B.1.- 乳用牛	kt-CH <sub>4</sub>	106.7	102.8	96.2	94.2	88.8	86.7	86.6	85.1	83.0	81.5	81.4	79.8	79.9	79.8	
	3.B.1.- 肉用牛		4.3	4.5	4.5	5.2	6.2	6.0	5.9	5.7	5.5	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4	5.4
	3.B.2. めん羊		0.006	0.004	0.003	0.002	0.004	0.006	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.006	0.006
	3.B.3. 豚		11.1	9.7	9.1	6.6	5.1	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7
	3.B.4.- 水牛		0.0004	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002	0.0002
	3.B.4.- 山羊		0.005	0.004	0.004	0.003	0.003	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.003	0.003	0.004	0.004
	3.B.4.- 馬		0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
	3.B.4.- 家禽類		2.3	2.2	2.1	2.4	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.7	2.7	2.7	2.8	2.8
	3.B.4.- うさぎ		0.001	0.001	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
	3.B.4.- ミング		0.105	0.007	0.004	0.0004	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005	0.0005
	合計		kt-CH <sub>4</sub>	124.8	119.5	112.2	108.7	102.9	100.5	100.3	98.6	96.2	94.6	94.5	92.9	93.0	92.9
	kt-CO <sub>2</sub> 換算	3,121	2,988	2,804	2,717	2,573	2,513	2,508	2,465	2,406	2,364	2,362	2,321	2,324	2,324		
N <sub>2</sub> O	3.B.1.- 乳用牛	kt-N <sub>2</sub> O	2.1	2.1	2.1	2.4	2.5	2.5	2.5	2.4	2.4	2.3	2.3	2.3	2.3	2.3	
	3.B.1.- 肉用牛		2.3	2.4	2.4	2.5	2.8	2.7	2.6	2.6	2.5	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	
	3.B.2. めん羊		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.3. 豚		3.7	3.2	3.2	3.8	4.4	4.5	4.5	4.4	4.3	4.2	4.1	4.1	4.1	4.3	
	3.B.4.- 水牛		0.00012	0.00007	0.00006	0.00005	0.00005	0.00004	0.00005	0.00005	0.00005	0.00006	0.00006	0.00007	0.00006	0.00006	
	3.B.4.- 山羊		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.4.- 馬		NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	NO	
	3.B.4.- 家禽類		1.4	1.4	1.3	1.3	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	1.1	1.1	1.2	1.2	1.2	
	3.B.4.- うさぎ		0.004	0.004	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	
	3.B.4.- ミング		0.0223	0.0016	0.0008	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	0.0001	
	3.B.5. 間接排出		4.6	4.3	3.9	3.5	3.2	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	3.0	
合計	kt-N <sub>2</sub> O	14.1	13.4	12.9	13.4	14.2	13.9	13.7	13.5	13.2	13.0	12.9	12.9	13.2	13.2		
	kt-CO <sub>2</sub> 換算	4,208	3,983	3,850	3,994	4,218	4,136	4,093	4,024	3,927	3,865	3,849	3,847	3,926	3,922		
全ガス合計	kt-CO <sub>2</sub> 換算	7,329	6,971	6,654	6,711	6,791	6,649	6,601	6,489	6,334	6,229	6,210	6,169	6,250	6,245		

5.3.1. 牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）（3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.-）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、牛（乳用牛、肉用牛）、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）の家畜排せつ物の管理による CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O 排出に関する算定、報告を行なう。

なお、放牧家畜の CH<sub>4</sub> に関してはこのカテゴリーで報告し、N<sub>2</sub>O に関しては「3.D.a.3.放牧家畜の排せつ物」で報告する。

b) 方法論

■ 算定方法

排せつ物の管理に伴う CH<sub>4</sub> 排出については、家畜種ごとの排せつ物中に含まれる有機物量に、排せつ物管理区分ごとの排出係数を乗じて算定を行った。

$$E_{CH_4} = \sum (EF_{CH_4-n} \times A_{CH_4-n})$$

- $E_{CH_4}$  : 牛、豚、家禽の排せつ物管理に伴う CH<sub>4</sub> 排出量 [kt-CH<sub>4</sub>]
- $EF_{CH_4-n}$  : 排せつ物管理区分  $n$  の排出係数 [g-CH<sub>4</sub>/g 有機物]
- $A_{CH_4-n}$  : 排せつ物管理区分  $n$  の排せつ物中に含まれる有機物量 [kt-有機物]

N<sub>2</sub>O 排出については、家畜種ごとの排せつ物中に含まれる窒素量に、排せつ物管理区分ごとの排出係数を乗じて算定を行った。

$$E_{N_2O} = \sum (EF_{N_2O-n} \times A_{N_2O-n}) \times 44/28$$

- $E_{N_2O}$  : 牛、豚、家禽の排せつ物管理に伴う N<sub>2</sub>O 排出量 [kt-N<sub>2</sub>O]
- $EF_{N_2O-n}$  : 排せつ物管理区分  $n$  の排出係数 [g-N<sub>2</sub>O-N/g-N]
- $A_{N_2O-n}$  : 排せつ物管理区分  $n$  の排せつ物中に含まれる窒素量 [kt-N]

■ 排出係数

家畜排せつ物の管理に伴う CH<sub>4</sub> 及び N<sub>2</sub>O の排出係数については、我が国における実測の研究結果を踏まえ、図 5-3 のデシジョンツリーに従い妥当性を検討し、家畜種別、処理方法別に設定し、表 5-14 及び表 5-15 に示した。

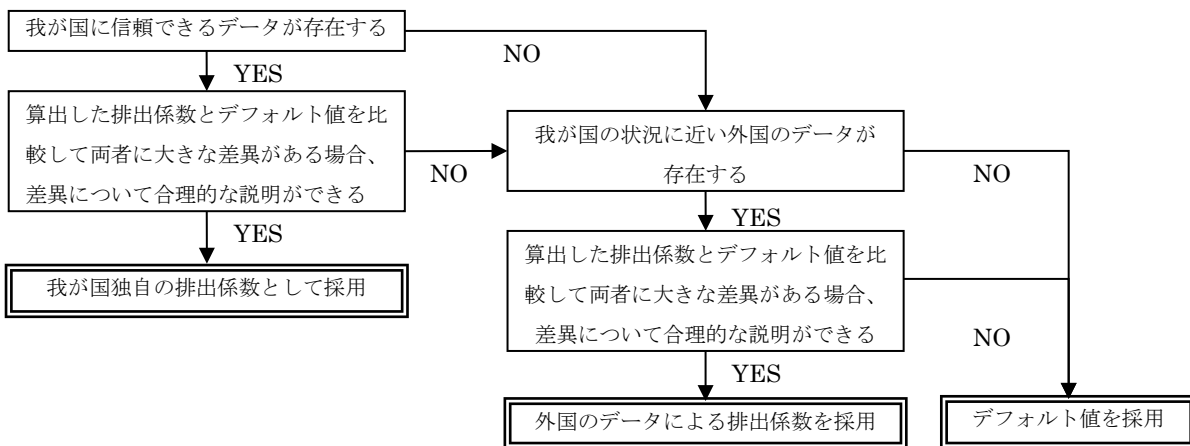


図 5-3 排出係数決定のためのデシジョンツリー

表 5-14 及び表 5-15 において、「D (デフォルト値)」と示されている CH<sub>4</sub>排出係数は 2006 年 IPCC ガイドラインに示された Asia の Bo (最大 CH<sub>4</sub>発生ポテンシャル) (乳用牛 : 0.13、肉用牛 : 0.10、豚 : 0.29) および MCF (メタン発生係数、表 5-16) を用いて、以下の式で示すように計算した。なお、2006 年 IPCC ガイドラインにおいて、貯留および強制発酵の MCF は気候区分別に掲載されているため、地域別平均気温から設定した MCF 値を地域別家畜頭数で加重平均して算出した。MCF 値の設定に使用した地域別の平均気温は表 5-17 の通り。各家畜が主に飼養されている市町村の平均気温から設定した。

また、わが国独自の排出係数については、実測結果から直接排出係数を算出しているため、MCF の値は設定していない。

$$EF_{CH_4-n} = Bo \times 0.67 \times MCF$$

$EF_{CH_4-n}$	: 排せつ物管理区分 $n$ の排出係数 [g-CH <sub>4</sub> /g 有機物]
$Bo$	: 最大 CH <sub>4</sub> 発生ポテンシャル [m <sup>3</sup> -CH <sub>4</sub> /kg-有機物]
0.67	: 体積から重量への換算係数 [kg-CH <sub>4</sub> /m <sup>3</sup> -CH <sub>4</sub> ]
$MCF$	: メタン発生係数 [%]

乳用牛の「貯留」および「メタン発酵」の CH<sub>4</sub>の排出係数について、フロートチャンバー法などを用いて貯留システムおよびメタン発酵システムにおいて実測した値から気温を変数として全国 9 地域別の排出係数が構築されており (農林水産省「平成 23 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法の開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2012) (以下、平成 23 年度 調査事業 報告書)、地域別の飼養頭数 (「畜産統計」に記載) で加重平均した排出係数 (表 5-18) を用いた。排出係数が 1990 年に比べて最新年で小さくなっているのは、気温が低く、排出係数の小さい北海道地域の飼養割合が徐々に増加しているためである (1990 年 : 42%、2018 年 : 60%)。

採卵鶏・ブロイラーの「天日乾燥」の排出係数については、鶏糞乾燥処理施設 (トンネル換気型でベルトコンベアを用いて鶏糞を移動・攪拌しながら乾燥させる施設) で発生する温室効果ガスの排出量を実測した値をもとに設定した。詳細な方法は、土屋他 (2014) の論文に記述されている。

豚の「強制発酵・ふん」及び「強制発酵・ふん尿混合」は「平成 20 年度環境バイオマス総合対策推進事業のうち農林水産分野における地球温暖化対策調査事業報告書 (全国調査事業) (以下、「平成 20 年度地球温暖化対策調査事業報告書」) を参照した。

採卵鶏・ブロイラーの「強制発酵・ふん」の排出係数には、専門家判断により豚の排出係数を適用している。

わが国で最も一般的に行われている家畜排せつ物処理方法である「堆積発酵」に関して、Osada et.al. (2005) は堆肥盤を覆うチャンバーを用いて CH<sub>4</sub>と N<sub>2</sub>O 排出を実測した。この値をもとにわが国の乳用牛、肉用牛、豚の排出係数を設定している。採卵鶏・ブロイラーの「堆積発酵」の排出係数については、国内 3 地域の堆肥化処理施設において、堆積物をチャンバーで覆って温室効果ガスの排出量を実測し、その値をもとに設定した。詳細な方法は、農林水産省「平成 25 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2014) (以下、平成 25 年度 調査事業 報告書) に記載されている。

「焼却」に関する係数は (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002) に記述されている。牛の「浄化」について、白石、他 (2017) は、乳用牛の尿およびふん尿から発生する CH<sub>4</sub>と N<sub>2</sub>O 排出を浄化処理施設において実測した。この結果を基に設定された排出係数を、乳用牛および肉用牛の尿およびふん尿の「浄化」に適用している。

豚の「浄化」は農林水産省「平成 24 年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発

事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2013)(以下、平成24年度 調査事業 報告書)の結果を参照している。

乳用牛および肉用牛の「放牧」の排出係数は、採取したふん尿を放牧地のチャンパー内に設置し、実測した値をもとに設定している。詳細な方法は Mori et.al (2015) の論文に記述されている。

表 5-14 牛、豚、採卵鶏、ブロイラーの排せつ物管理に伴う CH<sub>4</sub>排出係数 [g-CH<sub>4</sub>/g 有機物]

処理区分	乳用牛		肉用牛		豚		採卵鶏 ブロイラー		
	貯留	表 5-18	J <sup>9)</sup>	1.6 %	D <sup>1)</sup>	4.9 %	D <sup>1)</sup>	-	
天日乾燥	0.20 %		J <sup>3)</sup>	0.20 %	J <sup>3)</sup>	0.20 %	J <sup>3)</sup>	0.14 %	J <sup>11)</sup>
火力乾燥	0 %							Z <sup>4)</sup>	
強制発酵 (ふん)	0.052 %	D <sup>1)</sup>	0.054 %	D <sup>1)</sup>	0.080 %	J <sup>8)</sup>	0.080 %	Sw	
堆積発酵	3.8 %	J <sup>5)</sup>	0.13 %	J <sup>5)</sup>	0.16 %	J <sup>5)</sup>	採卵鶏: 0.13 % ブロイラー: 0.02 %	J <sup>13)</sup>	
焼却	0.4 %							O <sup>4)</sup>	
強制発酵 (尿)	0.052 %	D <sup>1)</sup>	0.054 %	D <sup>1)</sup>	0.097 %	D <sup>1)</sup>	-		
強制発酵 (ふん尿混合)					0.080 %	J <sup>8)</sup>			
浄化	0.3 %			J <sup>14)</sup>	0.91 %	J <sup>12)</sup>			
メタン発酵 (ふん)	3.8 %	PI	0.13 %	PI	0.16 %	PI	採卵鶏: 0.13 % ブロイラー: 0.02 %	PI	
メタン発酵 (ふん尿混合)	表 5-18	J <sup>9)</sup>	3.5 %	DC	3.6 %	DC	-		
放牧	0.076 %			J <sup>10)</sup>	-		0.14 %	SD	
その他 (ふん)	3.8 %	M	0.4 %	M	0.4 %	M	0.4 %	M	
その他 (ふん尿混合)	3.8 %	M	3.5 %	M	4.9 %	M	-		

(注) 表 5-15 の注釈と、出典を参照

表 5-15 牛、豚、採卵鶏、ブロイラーの排せつ物管理に伴う N<sub>2</sub>O 排出係数 [g-N<sub>2</sub>O-N/g-N]

処理区分	乳用牛		肉用牛		豚		採卵鶏 ブロイラー		
	貯留	0.02 %	J <sup>9)</sup>	0 %		D <sup>1)</sup>		-	
天日乾燥	2.0 %				D <sup>1)</sup>		0.33 %	J <sup>11)</sup>	
火力乾燥	2.0 %							D <sup>1)</sup>	
強制発酵 (ふん)	0.25 %		J <sup>6)</sup>		0.16 %	J <sup>8)</sup>	0.16 %	Sw	
堆積発酵	2.4 %	J <sup>5)</sup>	1.6 %	J <sup>5)</sup>	2.5 %	J <sup>5)</sup>	採卵鶏: 0.54 % ブロイラー: 0.08 %	J <sup>13)</sup>	
焼却	0.1 %							O <sup>4)</sup>	
強制発酵 (尿)	0.6 %				D <sup>1)</sup>		-		
強制発酵 (ふん尿混合)	0.6 %	D <sup>1)</sup>	0.25 %	J <sup>7)</sup>	0.16 %	J <sup>8)</sup>			
浄化	2.88 %			J <sup>14)</sup>	2.87 %	J <sup>12)</sup>			
メタン発酵 (ふん)	2.4 %	PI	1.6 %	PI	2.5 %	PI	採卵鶏: 0.54 % ブロイラー: 0.08 %	PI	
メタン発酵 (ふん尿混合)	0.15 %	J <sup>9)</sup>	0.15 %		DC		-		
放牧	0.684 %			J <sup>10)</sup>	-		0.33 %	SD	
その他 (ふん)	2.4 %	M	2.0 %	M	2.5 %	M	2.0 %	M	
その他 (ふん尿混合)	2.88 %	M	2.88 %	M	2.87 %	M	-		

(注) 採卵鶏・ブロイラーについては、ふんに近いふん尿混合状態であるため、ふんとして扱う。

D: 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を利用 (Asia の値を利用)



- J: 我が国の観測データより設定
  - O: 他国のデータより設定
  - Z: 原理的に排出は起こらないとの仮定により設定
  - Pl: 堆積発酵の値を適用
  - SD: 天日乾燥の値を適用
  - Sw: 豚の排出係数を適用
  - DC: 乳用牛の地域別排出係数もとに設定 (N<sub>2</sub>O は乳用牛の排出係数を適用)
  - M: 「ふん」または「ふん尿混合」に対する処理区分の最大値を適用  
(出典)
- 1) 2006年 IPCC ガイドライン (2006)
  - 2) 石橋他 (2003)
  - 3) (社) 畜産技術協会 (2002)
  - 4) Osada et.al. (2005)
  - 5) Osada et.al. (2000)
  - 6) Osada (2003)
  - 7) 平成 20 年度 地球温暖化対策調査事業報告書
  - 8) 平成 23 年度 調査事業 報告書
  - 9) Mori et.al. (2015)
  - 10) 土屋他 (2014)
  - 11) 平成 24 年度 調査事業 報告書
  - 12) 平成 25 年度 調査事業 報告書
  - 13) 白石他 (2017)

表 5-16 デフォルトの排出係数の計算に用いた MCF (メタン発生係数)

処理区分	MCF	2006年 IPCC ガイドラインの分類
貯留 (肉用牛)	24 %	Liquid/ Slurry- Without natural crust cover (加重平均で算出)
貯留 (豚)	25 %	Liquid/ Slurry- Without natural crust cover (加重平均で算出)
強制発酵 (乳用牛)	0.6 %	Composting – In-vessel (加重平均で算出)
強制発酵 (肉用牛)	0.8 %	Composting – In-vessel (加重平均で算出)

(注) 上記以外の区分には国独自の排出係数等を用いているため、MCF の値は設定していない。

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン、Vol.4 Table 10.17

表 5-17 MCF 値の設定に使用した地域別の平均気温 [°C]

地域	乳用牛	肉用牛	豚
北海道	5.3	6.2	7.4
東北	8.5	11.0	10.1
関東	11.9	12.1	14.4
北陸	14.0	14.0	12.7
東海	16.0	14.3	15.0
近畿	15.9	16.0	13.5
中国	14.6	15.0	14.4
四国	16.3	16.1	15.5
九州沖縄	15.8	16.5	16.3

表 5-18 乳用牛の「貯留」および「メタン発酵」の CH<sub>4</sub>排出係数 [g-CH<sub>4</sub>/g-有機物]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
貯留	2.47%	2.44%	2.42%	2.40%	2.38%	2.37%	2.37%	2.37%	2.37%	2.37%	2.36%	2.36%	2.36%	2.35%
メタン発酵	3.22%	3.17%	3.14%	3.11%	3.07%	3.06%	3.06%	3.06%	3.06%	3.05%	3.05%	3.04%	3.03%	3.03%

(注) 平成 23 年度 調査事業 報告書に記載の地域別排出係数をもとに、地域別の飼養頭数で加重平均している

## ■ 活動量

活動量については、年間に各家畜種から排せつされる有機物量及び窒素量の推計値をそれぞれ用いた。

$$A_{CH_4-n} = P \times Ex \times Day \times Org \times Mix_n \times MS_n / 1000$$

$$A_{N2O-n} = P \times Nex \times Day \times Mix_n \times MS_n / 1000$$

$A_{CH4-n}$	: 各家畜種から排せつされる有機物量 [kt]
$A_{N2O-n}$	: 各家畜種から排せつされる窒素量 [kt]
$P$	: 家畜の飼養頭数 [千頭]
$Ex$	: 1頭あたり1日あたりの排せつ物量 [kg/頭/日]
$Org$	: 排せつ物中の有機物含有率 [%]
$Nex$	: 1頭あたり1日あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N/頭/日]
$Day$	: 年間日数[日]
$Mix_n$	: 排せつ物分離・混合処理の割合 [%]
$MS_n$	: 排せつ物管理区分割合 [%]

各家畜種から排せつされる年間有機物量は、家畜種ごとの飼養頭数に一頭当たりの排せつ物量と有機物含有率を乗じることによって総量を算定し、年間窒素量は、家畜種ごとの飼養頭数に一頭当たりの排せつ物中窒素量を乗じることによって総量を算定した（表 5-25、表 5-26、表 5-27、表 5-28）。その総量に、排せつ物分離処理割合及び各排せつ物管理区分割合を乗じ、各排せつ物管理区分に有機物量及び窒素量を割り振った。

乳用牛、肉用牛、豚の飼養頭数は「3.A.消化管内発酵」と同じ出典のものを使用している。

採卵鶏は「畜産統計」および農林水産省「畜産物流通統計」に示された羽数を用いた（表 5-19 参照）。ただし、調査のなかった 2004 年度、2009 年度、2014 年度の値は内挿値である。ブロイラーに関して、1990 年度から 2008 年度までは「畜産物流通統計」の飼養羽数を用いた。2009 年度以降はその統計で飼養羽数が把握されなくなったことから、「畜産物流通統計」の出荷羽数を用いて飼養羽数を推計している（表 5-20 参照）。具体的にはブロイラーの飼養羽数／出荷羽数の 2004～2008 年度の 5 か年平均値 (0.170) を毎年度の出荷羽数に乘じ、さらに過去より出荷日齢が短くなっていることから、現在（農林水産省「鶏の改良増殖目標」(2015)）と過去（畜産技術協会「ブロイラー飼養実態アンケート調査」(2008)）の出荷日齢の比 0.919 (=49 日／53.3 日) を乗じて飼養羽数を算出した。

乳用牛の 1 頭あたり 1 日あたりの排せつ物量の内、ふん量は「日本飼養標準 乳牛」に記載の DMI と中性デタージェント繊維割合 (%) (NDFom) を説明変数とした重回帰式より算出し、尿量は大谷他 (2010) に記載の窒素摂取量 (NI)、カリウム摂取量 (KI)、乳量を説明変数とした重回帰式より算出した。乾物摂取量、乳量は 3.A.1 牛の消化管内発酵と同じものを用いた。中性デタージェント繊維割合 (%) (NDFom) は、「日本飼養標準 乳牛」を参考に 35% と設定した。窒素摂取量 (NI) は粗タンパク質量 (CP) を 6.25 で割って算出した。粗タンパク質量 (CP) は、乳量、体重、乳脂肪率、増体日量に 3.A.1 牛の消化管内発酵と同じ値を用いて、「日本飼養標準」の算出式を使用して算出した（表 5-21）。「日本飼養標準」では、ルーメン内での飼料の消化と微生物による発酵を高めるために、飼料乾物中の望ましい CP 含量は 12% 以上としている。その指針に沿って、算出式から算出された CP が DMI の 12% を下回る場合は、CP を 12% に補正した。カリウム摂取量 (KI) は、Kume et al. (2010) を参考に設定した（表 5-21）。

また、乳用牛の 1 頭あたり 1 日あたりの排せつ物中窒素量は、ふん、尿とも長命、他 (2006) に示された回帰式を使用して算出した（表 5-21）。

肉用牛の排せつ物中窒素量も、ふん、尿ともに長命、他 (2006) に示された回帰式を使用して算出した（表 5-22）。ふん中窒素量は DMI を変数とする式より算出し、尿中窒素量は CP を変数とする式より算出した。DMI は、既出の表 5-8 の値を用いた。CP は表 5-23 に記載の式で計算した。また、乳用牛と同様に算出式から算出された CP が DMI の 12% を下回る場合は、CP を 12% に補正した。

豚の排せつ物中窒素量は、温室効果ガス算定方法検討会農業分科会での検討結果を踏まえ、「日本飼養標準 豚」に示された体重区分ごとに、摂取した窒素量から体内に蓄積された窒素量を控除して求めた。各区分の合計値を飼養日数の合計値で除することで1日当たりの排せつ物中窒素量とした。得られた1日当たりの排せつ物中窒素量にふん・尿の配分割合を乗じて、1日当たりのふん中窒素量および尿中窒素量を算出した(表 5-24)。なお、摂取した窒素量は摂取する飼料のCP含有率と摂取量から算定する。算定区分は、「肥育豚」および「繁殖豚」の2種類とした。

排せつ物分離処理割合及び各排せつ物管理区分割合は、1997年の調査結果「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002)と2009年の調査結果である農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」(2009)を用いて設定している。1997年の調査は「家畜排せつ物法」(1999年施行、不適切な排せつ物管理を禁止する法律で、排せつ物管理区分割合が変わる契機となった)施行以前のデータである。そのため、1997年の調査結果を1999年以前に適用し、2009年度以降は2009年の調査結果を用いた。2000~2008年度はそれらを内挿した(表 5-29、表 5-30、表 5-31)。

表 5-19 採卵鶏の羽数 [1000羽]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
採卵鶏	188,786	190,634	186,202	180,697	179,770	178,546	177,607	174,784	174,806	175,270	175,733	178,900	184,350	184,917

(注) 調査のなかった2009年度、2014年度の値は内挿値。

(出典) 「畜産統計」、「畜産物流通統計」

表 5-20 ブロイラーの羽数 [1000羽]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
「畜産物流通統計」のブロイラー 飼養羽数	142,740	118,123	106,311	103,687										
ブロイラー 出荷羽数				606,898	634,692	633,799	617,176	649,629	653,999	661,030	666,859	677,332	685,105	700,571
インベントリで用いたブロイラー 飼養羽数	142,740	118,123	106,311	103,687	99,053	98,913	96,319	101,384	102,066	103,163	104,073	105,707	106,920	109,334

(注) 2008年度までは統計上の飼養羽数を使用。2009年度以降の飼養羽数は出荷羽数を用いて推計。

(出典) 「畜産物流通統計」

表 5-21 乳用牛の排せつ物量と排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん量 <sup>1)</sup>	$F = -8.4753 + 1.8657 \times DMI + 0.4948 \times NDFom$ (NDFom : 35%)
尿量 <sup>2)</sup>	$U = -2.2870 + 0.0231 \times NI + 0.0581 \times KI - 0.3350 \times MILK$ (NI = CP / 6.25)
カリウム摂取量 <sup>3)</sup>	KI : 380g/日 (初産搾乳牛) : 350g/日 (2産以上) : 250g/日 (乾乳牛) : 220g/日 (育成牛7~24ヵ月) : 100g/日 (育成牛3~6ヵ月)
ふん中窒素量 <sup>4)</sup>	$N_f = 5.01 \times DMI^{1.2}$ (搾乳牛) $N_f = 4.97 \times DMI^{1.21}$ (乾乳牛・育成牛)
尿中窒素量 <sup>4)</sup>	$N_u = 16.57 \times (CP / 1000 / DMI) \times 100 - 138.6$ (搾乳牛) $N_u = 0.24 \times (CP / 6.25)^{1.14}$ (乾乳牛・育成牛)

(注) 表 5-23 の注釈と、出典を参照

表 5-22 肉用牛の排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん中窒素量 <sup>4)</sup>	$N_f = 7.22 \times DMI^{1.00}$ (乳用種) $N_f = 4.97 \times DMI^{1.21}$ (乳用種 + 黒毛和牛)
尿中窒素量 <sup>4)</sup>	$N_u = -14.96 + 0.60 \times NI$ (乳用種) $N_u + N_m = 0.24NI^{1.14}$ (乳用種 + 黒毛和牛) ただし $N_m = 0$ として計算、NI = CP / 6.25

(注) 表 5-23 の注釈と、出典を参照

表 5-23 粗タンパク質量 (CP) の算定式<sup>1)</sup>

	算定式
搾乳牛	$CP = (CPI + CP2) \times CFA$ $CPI = 2.71 \times W^{0.75} / 0.6 \times \text{産次補正值 (初産:1.3、二産:1.15、三産以上:1)}$ $CP2 = (26.6 + 5.3 \times FAT) \times MILK / 0.65$ $CFA = 1 + MILK / 15 \times 0.04$
乾乳牛	$CP = 2.71 \times W^{0.75} / 0.6$
育成牛	$CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 30 \times DMI / 6.25 \quad UN = 2.75 \times W^{0.5} / 6.25$ $SP = 0.2 \times W^{0.6} \quad RP = 10 \times DG \times 23.5505 \times W^{-0.0645}$ $EP : 0.51 \text{ (体重 120kg 以上)} : 0.63 \text{ (体重 67~119kg)}$
肉用牛 (2007 年度まで)	$CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 4.80 \times DMI \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $RP = DG \times (235 - 0.195 \times W) \text{ (乳用種)}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W) \text{ (交雑種、肥育牛雄)}$ $RP = DG \times (235 - 0.293 \times W) \text{ (肥育牛雌、繁殖雌牛 48 カ月まで)}$ $RP = 0 \text{ (成雌牛の維持 49 カ月以上)}$ $EP : 0.51 \text{ (体重 150kg 以上)} : 0.56 \text{ (体重 101~149kg)} : 0.66 \text{ (体重 51~100kg)}$ (繁殖雌牛 妊娠末期維持加算用 CP) $CP = DCPR / 0.75$ $DCPR = TP / 38.5 \times 30.0 / 63 / 0.6 \times 1000 + FN \times 6.25$ $TP = TP(t) - TP(t-63)$ $TP(t) = (1.486 \times 10^{-4} \times t^3 - 4.247 \times 10^{-2} \times t^2 + 3.173 \times t - 0.328) \times$ $(-0.323 \times 10^{-6} \times t^3 + 3.000 \times 10^{-4} \times t^2 - 9.430 \times 10^{-2} \times t + 11.263) \times 6.25$ $FN = 4.80 \times 3.21 / 2.7$ (繁殖雌牛 授乳中維持加算用 CP) $CP = DCPR / 0.65$ $DCPR = 53 \times MILK$
肉用牛 (2008 年度以降)	$CP = (MCP / 0.85 + MPu / 0.80) / 1.15$ $MCP = 100 \times TDN \text{ (繁殖雌牛以外)} \quad MCP = 130 \times TDN \text{ (繁殖雌牛)}$ $MPu = MPR - MPd$ $MPR = MPm + MPg$ $MPd = 0.8 \times 0.8 \times MCP$ $MPm = (FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP) / 0.67$ $FN = 4.80 \times DMI - Adj \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $MPg = RP / 0.492$ $RP = DG \times (235 - 0.195 \times W) \text{ (乳用種)}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W) \text{ (交雑種、肥育牛雄)}$ $RP = DG \times (235 - 0.293 \times W) \text{ (肥育牛雌、繁殖雌牛 48 カ月まで)}$ $RP = 0 \text{ (成雌牛の維持 (49 カ月以上))}$ $Adj = (100 \times TDN \times 0.64 \times 0.25 \times 0.5) / 6.25$ $Adj = (130 \times TDN \times 0.64 \times 0.25 \times 0.5) / 6.25 \text{ (繁殖雌牛)}$ (体重 200kg 未満の乳用種) $CP = NP / EP$ $NP = FN \times 6.25 + UN \times 6.25 + SP + RP$ $FN = 4.80 \times DMI \quad UN = 0.44 \times W^{0.5} \quad SP = 0.2 \times W^{0.6}$ $RP = DG \times (235 - 0.234 \times W)$ $EP : 0.51$ (繁殖雌牛 妊娠末期維持加算用) $MPc = PP(t) / 0.65$ $PP(t) = BW / 40 \times TP(t) \times 34.37 e^{-0.00262t}$ $TP(t) = 10^{3.707 - 5.698e^{-0.0022t}}$ (繁殖雌牛 授乳中維持加算用) $MP\theta = (38 \times MILK) / 0.65$

(注) 表 5-21、表 5-22、表 5-23 に共通

F: ふん量 (kg/日)      DMI: 乾物摂取量 (kg/日)      NDFom: 中性ダタージェント繊維割合 (%)

*U*: 尿量 (kg/日)      *NI*: 窒素摂取量 (kg/日)      *KI*: カリウム摂取量 (kg/日)      *MILK*: 乳量 (kg/日)  
*N<sub>f</sub>*: ふん中窒素量      *N<sub>u</sub>*: 尿中窒素量      *CP*: 粗タンパク質 (g)      *CFA*: 補正係数  
*W*: 体重 (kg)      *FAT*: 乳脂肪率 (%)      *NP*: 成長時の維持・増体に要する正味の蛋白質量  
*EP*: 成長時の粗蛋白質を正味蛋白質にする変換効率      *UN*: 内因性尿中窒素 (g/day)  
*FN*: 離乳後の育成牛 (体重 66kg 以上) の代謝性ふん中窒素 (g/day)      *SP*: 脱落表皮蛋白質 (g/day)  
*RP*: 増体に伴う蛋白質蓄積量 (g/day)      *DG*: 増体日量 (kg/日)      *DCPR*: 可消化粗蛋白質の要求量  
*PP(t)*: 妊娠(t)日目における妊娠子宮の蛋白質蓄積量      *t*: 妊娠期間日数      *MCP*: 微生物蛋白質 (g/日)  
*TP(t)*: 妊娠(t)日までの妊娠子宮の蛋白質蓄積量      *BW*: 生時体重  
*MP<sub>u</sub>*: 飼料からの非分解性蛋白質供給量 (g/日)      *MP<sub>d</sub>*: 微生物によって供給される代謝蛋白質供給量  
*MP<sub>m</sub>*: 維持における代謝蛋白質の要求量      *MP<sub>g</sub>*: 成長における代謝エネルギー要求量  
*MP<sub>c</sub>*: 妊娠に要する代謝蛋白質量 (g/日)      *TDN*: 可消化養分総量      *MPR*: 代謝蛋白質要求量 (g/日)  
*MP<sub>l</sub>*: 泌乳に要する代謝蛋白質量 (g/日)      *Adj*: 補正值

(出典)

- 1) 「日本飼養標準」
- 2) 大谷他 (2010)
- 3) Kume et.al. (2010)
- 4) 長命他 (2006)

表 5-24 豚の排せつ物中窒素量の算定式

	算定式
ふん中窒素量	$N_f = N_{out} \times f$
尿中窒素量	$N_u = N_{out} \times u$
排せつ物中窒素量	$N_{out} = N_{in} - N_{PR}$ $N_{out} = N_{in} - N_M$ (授乳豚) $N_{in} = (CP \times F_{intake}) / 6.25$ $F_{intake} = F_{demand} \times Day$

*N<sub>f</sub>*: ふん中窒素量 (kg/day)      *N<sub>u</sub>*: 尿中窒素量 (kg/day)      *N<sub>out</sub>*: 排せつ物中窒素量 (g)      *f*: ふん分配割合  
*u*: 尿分配割合      *N<sub>in</sub>*: 摂取飼料中窒素量 (g)      *N<sub>PR</sub>*: 体内蓄積窒素量 (g)      *N<sub>M</sub>*: 乳中窒素量  
*CP*: 摂取飼料中 CP 含有率 (%)      *F<sub>intake</sub>*: 飼料摂取量 (kg)      *F<sub>demand</sub>*: 1 日当たりの飼料摂取量 (kg/day)

表 5-25 肉用牛と豚の排せつ物量 (Ex)

家畜種		排せつ物量 [kg/頭/日]	
		ふん	尿
肉用牛	2 歳未満	17.8	6.5
	2 歳以上	20.0	6.7
	乳用種	18.0	7.2
豚	肥育豚	2.1	3.8
	繁殖豚	3.3	7.0

(出典) 築城他 (1997)

表 5-26 乳用牛、肉用牛、豚の排せつ物量 (Ex) 及び排せつ物中窒素量 (Nex)

項目		単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
排せつ物量	乳用牛	ふん量	搾乳牛 (三産以上)	kg/頭/日	41.5	43.1	44.5	46.0	46.3	46.1	46.1	46.4	46.4	46.8	47.3	47.4	47.5	
			搾乳牛 (二産)	kg/頭/日	40.3	41.8	43.3	44.8	44.9	44.7	44.7	45.0	45.0	45.3	45.8	45.9	46.0	46.0
			搾乳牛 (初産)	kg/頭/日	36.7	38.2	39.5	40.6	41.5	41.4	41.4	41.6	41.6	41.8	42.2	42.3	42.5	42.4
		乾乳牛・未経産牛	kg/頭/日	27.9	27.9	28.7	28.5	28.7	28.6	28.5	28.5	28.5	28.5	28.4	28.4	28.4	28.4	
		育成牛 (7-24ヵ月)	kg/頭/日	22.1	22.4	22.9	23.1	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	23.2	
		育成牛 (3-6ヵ月)	kg/頭/日	14.9	14.9	15.1	15.8	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	15.9	
	尿量	搾乳牛 (三産以上)	kg/頭/日	16.9	16.9	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	17.0	16.9	16.9	16.9	16.9		
		搾乳牛 (二産)	kg/頭/日	17.1	17.1	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.2	17.1	17.1	17.1	17.1	17.1		
		搾乳牛 (初産)	kg/頭/日	18.8	18.8	18.9	18.9	18.8	18.8	18.8	18.8	18.7	18.7	18.7	18.7	18.7		
		乾乳牛・未経産牛	kg/頭/日	82.7	83.0	86.8	85.6	86.8	86.4	86.1	85.9	85.9	85.7	85.5	85.4	85.4		
		育成牛 (7-24ヵ月)	kg/頭/日	12.3	12.3	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5	12.5		
		育成牛 (3-6ヵ月)	kg/頭/日	4.4	4.4	4.8	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1	5.1		
乳用牛	ふん中窒素量	搾乳牛 (三産以上)	g-N/頭/日	155.7	164.4	172.7	181.7	183.2	182.1	182.2	183.8	184.0	186.0	189.1	189.6	190.1	190.3	
		搾乳牛 (二産)	g-N/頭/日	148.5	157.4	165.5	174.3	175.0	173.9	174.0	175.6	175.7	177.6	180.5	180.8	181.3	181.4	
		搾乳牛 (初産)	g-N/頭/日	128.6	136.7	144.1	150.2	155.6	154.7	155.0	156.0	156.1	157.4	159.5	160.1	160.9	160.5	
		乾乳牛・未経産牛	g-N/頭/日	82.7	83.0	86.8	85.6	86.8	86.4	86.1	85.9	85.9	85.7	85.5	85.4	85.4		
		育成牛 (7-24ヵ月)	g-N/頭/日	53.3	54.5	57.2	58.3	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5	58.5		
		育成牛 (3-6ヵ月)	g-N/頭/日	20.6	20.7	21.6	24.3	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9	24.9		
	尿中窒素量	搾乳牛 (三産以上)	g-N/頭/日	76.1	81.0	83.2	87.9	89.9	89.5	89.4	90.5	90.8	92.1	93.5	93.9	94.2	94.2	
		搾乳牛 (二産)	g-N/頭/日	85.8	90.2	92.2	96.6	98.7	98.4	98.4	99.3	99.6	100.7	102.1	102.3	102.6	102.6	
		搾乳牛 (初産)	g-N/頭/日	88.8	92.5	94.4	98.7	93.2	92.8	92.7	93.9	94.2	95.5	97.2	97.9	98.8	98.5	
		乾乳牛・未経産牛	g-N/頭/日	98.6	98.8	103.1	101.9	103.2	102.8	102.4	102.1	102.2	101.9	101.7	101.5	101.6	101.5	
		育成牛 (7-24ヵ月)	g-N/頭/日	65.1	66.6	69.7	70.9	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1	71.1		
		育成牛 (3-6ヵ月)	g-N/頭/日	27.4	27.6	37.4	43.1	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2	44.2		
肉用牛	ふん中窒素量	繁殖雌牛：2歳以上	g-N/頭/日	58.9	58.9	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8		
		繁殖雌牛：7ヵ月～2歳未満	g-N/頭/日	46.1	46.1	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2	56.2			
		繁殖雌牛：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	21.5	21.5	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3	24.3			
		肥育牛・雄：1歳以上	g-N/頭/日	63.5	63.5	63.5	63.5	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1	59.1			
		肥育牛・雄：7ヵ月～1歳未満	g-N/頭/日	48.1	48.1	48.1	48.1	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3	51.3			
		肥育牛・雄：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	23.7	23.7	23.7	23.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7	20.7			
	尿中窒素量	肥育牛・雌：1歳以上	g-N/頭/日	40.1	40.1	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4	46.4			
		肥育牛・雌：7ヵ月～1歳未満	g-N/頭/日	32.5	32.5	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7	42.7				
		肥育牛・雌：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	18.7	18.7	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0	22.0				
		乳用種：7ヵ月以上	g-N/頭/日	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3	61.3				
		乳用種：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8	31.8				
		交雑種：7ヵ月以上	g-N/頭/日	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2	60.2				
豚	ふん	交雑種：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2	33.2				
		繁殖雌牛：2歳以上	g-N/頭/日	73.9	73.9	76.7	76.7	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9	74.9				
		繁殖雌牛：7ヵ月～2歳未満	g-N/頭/日	57.5	57.5	69.4	69.4	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6	70.6				
		繁殖雌牛：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	35.5	35.5	43.6	43.6	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3	54.3				
		肥育牛・雄：1歳以上	g-N/頭/日	76.9	76.9	76.9	76.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9	71.9				
		肥育牛・雄：7ヵ月～1歳未満	g-N/頭/日	65.1	65.1	65.1	65.1	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6	71.6				
	尿	肥育牛・雄：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	41.0	41.0	41.0	41.0	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2	48.2				
		肥育牛・雌：1歳以上	g-N/頭/日	49.8	49.8	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2	57.2					
		肥育牛・雌：7ヵ月～1歳未満	g-N/頭/日	44.8	44.8	57.5	57.5	60.4	60.4	60.4	60.4	60.4	60.4					
		肥育牛・雌：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	33.9	33.9	42.3	42.3	51.6	51.6	51.6	51.6	51.6	51.6					
		乳用種：7ヵ月以上	g-N/頭/日	84.2	84.2	84.2	84.2	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5	85.5					
		乳用種：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	57.2	57.2	57.2	57.2	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8	61.8					
豚	ふん	交雑種：7ヵ月以上	g-N/頭/日	82.0	82.0	82.0	82.0	83.0	83.0	83.0	83.0	83.0	83.0					
		交雑種：3ヵ月～6ヵ月	g-N/頭/日	57.0	57.0	57.0	57.0	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8	65.8					
	尿	肥育豚	g-N/頭/日	4.6	4.6	4.4	4.0	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9	3.9					
		繁殖豚	g-N/頭/日	4.9	4.9	4.9	4.6	4.5	4.6	4.6	4.5	4.5	4.4					

表 5-27 採卵鶏とブロイラーの排せつ物中窒素量 (Nex)

家畜種		排せつ物量 [kg/頭/日]	ふん中の窒素量 [g-N/頭/日]		
			ふん	1990～1997	1998～2011
採卵鶏	雛	0.059	1.54	1.54	1.54
	成鶏	0.136	3.28	内挿	2.20
ブロイラー		0.130	2.62	内挿	1.87

(出典) 採卵鶏 雛：築城他 (1997)

成鶏およびブロイラー：1990～1997：築城他 (1997) 2012～：Ogino et al. (2016)



表 5-28 家畜種ごとの排せつ物中の有機物含有率（湿ベース）（Org）

家畜種	有機物含有率	
	ふん	尿
乳用牛	16 %	0.5 %
肉用牛	18 %	0.5 %
豚	20 %	0.5 %
採卵鶏	15 %	—
ブロイラー	15 %	—

（出典）畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」（2002）

表 5-29 家畜種ごとの排せつ物分離・混合処理の割合（Mix<sub>n</sub>）

家畜種	ふん尿分離			ふん尿混合		
	~1999	2000~2008	2009~	~1999	2000~2008	2009~
乳用牛	60 %	内挿	45.5 %	40 %	内挿	54.5 %
肉用牛	7 %	内挿	4.8 %	93 %	内挿	95.2 %
豚	70 %	内挿	73.9 %	30 %	内挿	26.1 %
採卵鶏	100 %	内挿	100 %	—	内挿	—
ブロイラー	100 %	内挿	100 %	—	内挿	—

（出典）1999 年以前：畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」（2002）

2009 年以降：農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」（2009）

表 5-30 家畜種ごとの排せつ物管理区分割合（乳用牛、肉用牛、豚）（MS<sub>n</sub>）

ふん尿 分離状況	処理方法	乳用牛			肉用牛			豚			
		~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~	
ふん尿 分離 処理	ふん	天日乾燥	2.8%	内挿	2.0%	1.5%	内挿	0.9%	7.0%	内挿	0.7%
		火力乾燥	0%	—	0%	0%	—	0%	0.7%	内挿	0.1%
		強制発酵	9.0%	内挿	6.6%	11.0%	内挿	8.1%	62.0%	内挿	48.2%
		堆積発酵等	88.0%	内挿	90.1%	87.0%	内挿	89.8%	29.6%	内挿	49.3%
		焼却	0.2%	内挿	0%	0.5%	内挿	—	0.7%	内挿	0.6%
		メタン発酵	—	—	—	—	—	—	—	内挿	0.1%
		公共下水道	—	—	0%	—	—	—	—	—	—
		放牧	—	—	0%	—	—	—	—	—	—
	その他	—	内挿	1.3%	—	内挿	1.2%	—	内挿	1.0%	
	尿	天日乾燥	—	—	0%	—	—	0%	—	—	0%
		強制発酵	1.5%	内挿	1.7%	9.0%	内挿	1.2%	10.0%	内挿	5.4%
		浄化	2.5%	内挿	5.1%	2.0%	内挿	4.4%	45.0%	内挿	76.3%
		貯留	96.0%	内挿	89.6%	89.0%	内挿	91.5%	45.0%	内挿	15.3%
		メタン発酵	—	内挿	1.9%	—	—	0%	—	内挿	0.5%
公共下水道		—	内挿	0.8%	—	内挿	0.6%	—	内挿	0.4%	
その他	—	内挿	0.9%	—	内挿	2.4%	—	内挿	2.1%		
ふん尿 混合 処理	天日乾燥	4.4% <sup>1)</sup>	内挿	1.1%	3.4% <sup>1)</sup>	内挿	0.7%	6.0%	内挿	0.2%	
	火力乾燥	0%	—	0%	0%	—	0%	0%	—	0%	
	強制発酵	18.7% <sup>1)</sup>	内挿	22.9%	21.8% <sup>1)</sup>	内挿	10.8%	29.0%	内挿	21.3%	
	堆積発酵	13.1% <sup>1)</sup>	内挿	50.9%	73.2% <sup>1)</sup>	内挿	85.6%	20.0%	内挿	51.3%	
	浄化	0.3% <sup>1)</sup>	内挿	0.2%	0%	—	0%	22.0%	内挿	18.5%	
	貯留	57.0% <sup>1)</sup>	内挿	15.4%	0.6% <sup>1)</sup>	内挿	0.1%	23.0%	内挿	4.0%	
	焼却	—	内挿	0.1%	—	—	0%	—	—	0%	
	メタン発酵	—	内挿	1.7%	—	—	0%	—	内挿	2.0%	
	公共下水道	—	内挿	0.1%	—	—	0%	—	内挿	0.7%	
	放牧	6.5% <sup>1)</sup>	内挿	6.5%	1.1% <sup>1)</sup>	内挿	1.1%	—	—	0%	
その他	—	内挿	1.2%	—	内挿	1.6%	—	内挿	1.9%		

（出典）1999 年以前：畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 第四集」（1999）

2009 年以降：農林水産省「家畜排せつ物処理状況調査結果」（2009）

(注)

- 1) 乳用牛、肉用牛に関して、畜産技術協会（1999）では放牧の区分割合は記載されていなかったが、農林水産省（2009）の調査結果では放牧の区分割合が記載されている。算定方法の一貫性を示すため、2008年以前についても2009年以降と同じ割合を適用し、排せつ物管理区分割合の合計が100%になるよう、調整を行った。

表 5-31 家畜種ごとの排せつ物管理区分割合（採卵鶏、ブロイラー）（MS<sub>n</sub>）

ふん尿 分離状況	処理方法	採卵鶏			ブロイラー		
		~1999	2000~ 2008	2009~	~1999	2000~ 2008	2009~
ふん尿 分離 処理	天日乾燥	30.0%	内挿	8.2%	15.0%	内挿	2.5%
	火力乾燥	3.0%	内挿	2.2%	0%	内挿	1.1%
	強制発酵	42.0%	内挿	49.6%	5.1%	内挿	19.3%
	堆積発酵等	23.0%	内挿	36.8%	66.9%	内挿	36.7%
	焼却	2.0%	内挿	1.6%	13.0%	内挿	30.5%
	メタン発酵	—	—	—	—	内挿	0.1%
	公共下水道	—	—	—	—	—	—
	放牧	—	—	0%	—	内挿	0.1%
	その他	—	内挿	1.6%	—	内挿	9.9%

(出典) 上記表 5-30 参照

### ■ 日本の家畜排せつ物管理の背景情報

欧州においてはスラリー散布（液状処理）が一般的な家畜排せつ物管理である。一方、日本においては堆肥化（強制発酵、堆積発酵）が一般的な家畜排せつ物管理となっている。堆積発酵の排出係数を実測調査した Osada et al. (2005) は、「単位面積あたりの家畜密度が特に高い地域において、家畜ふん尿からの栄養塩の適切なりサイクルはその地域における循環のみによって完結することはできない。それゆえ、家畜排せつ物は堆肥化プロセスによってより管理しやすくすることができ、その結果得られる生産物を広い範囲に分散させることができる。」と記述している。我が国で堆肥化処理が多く行われている理由としては、①我が国の畜産農家の場合、発生する排せつ物の還元に必要な面積を所有していない場合が多く、経営体外での利用向けに排せつ物を仕向ける必要性が高いため、堆肥化による運搬性、取扱い性の改善が不可欠であること、②我が国は降雨量が多く施肥の流失が生じやすく、水質保全、悪臭防止、衛生管理といった観点からの要請も強いため、様々な作物生産への施肥において、スラリーや液状物に比べ、堆肥に対する需要はるかに大きいことなどがあげられる。

### ■ 共通報告様式（CRF）での報告方法について

CRF では、当該区分の窒素排せつ物量（MMS）について処理方法ごと（嫌気性ラグーン（Anaerobic Lagoons）、汚水処理（Liquid Systems）、逐次散布（Daily Spread）、固形貯留及び乾燥（Solid Storage and Dry Lot）、放牧（Pasture, Range and Paddock）、堆肥化（Composting）、消化（Digesters）、燃料および廃棄物としての焼却（Burned for fuel or as waste）、その他（Other））に報告することとされている。

牛、豚、家禽類については、我が国独自の家畜種ごとの排せつ物管理区分、及び排せつ物管理区分の実施割合を設定している。表 5-32 にその詳細を示した。

「嫌気性ラグーン」については、「NO」として報告した。家畜ふん尿を貯留して散布するだけの農地を有する畜産家がほとんど存在せず、農地への散布を行う場合でも、事前に攪拌を行ってから散布しており「嫌氣的 (anaerobic)」な処理方法は存在しないといえるためである。

表 5-32 我が国の排せつ物管理区分と CRF における報告区分及び排せつ物管理区分の概要

我が国の区分		CRF における報告区分	排せつ物管理区分の概要
排せつ物分離状況	排せつ物管理区分		
ふん尿分離処理	ふん	天日乾燥	Solid storage and dry lot 天日により乾燥し、ふんの取扱性（貯蔵施用、臭気等）を改善する。
		火力乾燥	Other system 火力により乾燥し、ふんの取扱性を改善する。
		強制発酵	Composting 堆肥化方法の一つ。開閉式または密閉式の強制通気攪拌発酵槽で数日～数週間発酵させる。
		堆積発酵	Composting 堆肥化方法の一つ。堆肥盤、堆肥舎等に高さ 1.5-2m 程度で堆積し、時々切り返しながら数ヶ月かけて発酵させる。
		焼却	Burned for fuel or as waste ふんの容積減少や廃棄、及びエネルギー利用（鶏ふんボイラー）のため行う。
		メタン発酵	Digesters スラリー状の家畜排せつ物を嫌氣的条件下で発酵させる。発生したメタンガスはエネルギー利用する。
		公共下水道	- 浄化処理や曝気処理等を行わず、公共下水道へ放流する。排出量は廃棄物分野で計上。
		放牧	Pasture range and paddock 採食のための植生を有する土地で家畜を飼養する。N <sub>2</sub> O は「放牧家畜の排せつ物（3.D.a.3）」で計上。
	その他	Other system 上記以外の処理を行っている。	
	尿	強制発酵	Composting 貯留槽において曝気処理する。
		浄化	Aerobic treatment 活性汚泥など、好気性微生物によって、汚濁成分を分離する。
		貯留	Liquid system 貯留槽に貯留する。
		メタン発酵	Digesters 上記メタン発酵に同じ。
		公共下水道	- 上記公共下水道に同じ。
その他		Other system 上記以外の処理を行っている。	
ふん尿混合処理	天日乾燥	Solid storage and dry lot 天日により乾燥し、ふんの取扱性を改善する。	
	火力乾燥	Other system ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	強制発酵	Composting 貯留槽において曝気処理する。	
	堆積発酵	Composting ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	浄化	Aerobic treatment ふん尿分離処理の記述に同じ。	
	貯留	Liquid system 貯留槽（スラリーストア等）に貯留する。	
	メタン発酵	Digesters ふん尿分離処理に同じ。	
	公共下水道	- 上記公共下水道に同じ。	
	放牧	Pasture range and paddock 上記放牧に同じ。	
	その他	Other system 上記以外の処理を行っている。	

## c) 不確実性と時系列の一貫性

## ■ 不確実性

CH<sub>4</sub>排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインの Tier2 の値（20%）を採用した。N<sub>2</sub>O 排出係数の不確実性は 2006 年 IPCC ガイドラインの各パラメータの不確実性のデフォルト値を使用し、それらを合成して算出した。

活動量の不確実性は、豚は「畜産統計」掲載の標準誤差 1%を採用し、鶏は「畜産統計」掲載のブロイラーの標準誤差 9%を採用した。牛は「消化管内発酵 牛」と同様に 1%を採用した。

その結果、排出量の不確実性は、乳用牛、肉用牛および豚の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O でそれぞれ-20%～+20%、-71%～+112%、鶏の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O でそれぞれ-22%～+22%、-72%～+112%と評価された。

## ■ 時系列の一貫性

排出係数は 1990 年度値から一貫した方法で算定している。活動量は「畜産統計」をもとに、1990 年度値から一貫した方法を使用している。

## d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

放牧牛の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O の排出係数に国独自の排出係数を用いており、これらの値は 2006年 IPCC ガイドラインに掲載されているデフォルト値から計算した値よりも小さい。日本の放牧地の土壌は排水性のよい黒ボク土・褐色森林土が大半を占めており、そのため日本の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O の排出係数は小さくなっているのではないかと推測される。

乳用牛の貯留の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O の排出係数に国独自の排出係数を用いており、この値は 2006年 IPCC ガイドラインに掲載されているデフォルト値から計算した値よりも小さい。CH<sub>4</sub>については、我が国におけるスラリー貯留期間は比較的短期であり、スラリーからの CH<sub>4</sub>発生が盛んになる前に農地や採草地に散布されているためと考えられる。N<sub>2</sub>O の排出係数が小さいことについても同様で、長期貯留を行わないため、N<sub>2</sub>O 排出源と推定されるスカムが貯留槽を覆うまでに至っていないことが理由として考えられる。

インベントリ審査において、乳用牛の見かけの CH<sub>4</sub>排出係数が他の附属書 I 国と比べてかなり高いと指摘を受けた。これは、日本において堆積発酵が一般的なふん尿管理方法であり、その堆積発酵の排出係数が大きいためである。なお、乳用牛のふんは含水率が高く嫌気性環境になりやすいことから、ふんの堆積発酵における CH<sub>4</sub>排出係数が大きな数値になっていると考えられる。

鶏の堆積発酵の排出係数に関して、採卵鶏の排出係数がブロイラーよりも大きくなっている。CH<sub>4</sub>については採卵鶏のふんの含水率が高いことが理由として考えられる。また、N<sub>2</sub>O の国独自の排出係数がデフォルト値よりも小さいのは、デフォルト値が鶏だけのものではない（牛や豚も含まれている）ことが理由として考えられる（牛、豚より鶏のふんの方が、硝化作用が起きにくい）。

鶏の天日乾燥の国独自の N<sub>2</sub>O 排出係数がデフォルト値よりも小さい。これは鶏の堆積発酵の排出係数と同様、デフォルト値の対象が鶏だけではないことが理由として考えられる。

## e) 再計算

乳用牛群能力検定成績 検定牛の産次別頭数が更新されたため、乳用牛の 2017 年の排出量が更新された。肉用牛および豚の排せつ物中窒素量の計算方法が改訂されたことにより、肉用牛および豚の全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

## f) 今後の改善計画及び課題

排出実態に関する研究や排出削減対策の情報収集が関係機関により継続して実施されているため、新たな成果が得られた場合には、排出係数及び各種パラメータの見直しを検討する。

## 5.3.2. 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンク (3.B.2., 3.B.4.-)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの家畜排せつ物の管理による CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O 排出に関する算定、報告を行なう。

## b) 方法論

## ■ 算定方法

CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O 排出量については、2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4, Page 10.36, Fig.10.3 及び Page 10.55, Fig.10.4) に従い Tier 1 法を用いて算定を行った。

$$E_{CH_4} = EF_{CH_4} \times P$$

$$E_{N_2O} = \sum (EF_{N_2O-n} \times P \times Nex \times MS_n)$$

$E_{CH_4}$	: 家畜排せつ物管理に伴う CH <sub>4</sub> 排出量 [kg-CH <sub>4</sub> ]
$E_{N_2O}$	: 家畜排せつ物管理に伴う N <sub>2</sub> O 排出量 [kg-N <sub>2</sub> O]
$EF_{CH_4}$	: CH <sub>4</sub> 排出係数 [kg-CH <sub>4</sub> 頭 <sup>-1</sup> 年 <sup>-1</sup> ]
$EF_{N_2O-n}$	: 排せつ物処理区分 n の N <sub>2</sub> O 排出係数 [kg-N <sub>2</sub> O (kg-N) <sup>-1</sup> ]
$P$	: 家畜の飼養頭数 [頭]
$Nex$	: 1 頭あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N 頭 <sup>-1</sup> ]
$MS_n$	: 排せつ物管理区分割合 [%]

### ■ 排出係数

CH<sub>4</sub>排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示された先進国の温帯のデフォルト値を使用した。水牛については「Asia」温帯のデフォルト値を採用した (表 5-33)。

N<sub>2</sub>O 排出係数については、2006年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルト値を使用した (表 5-34)。

表 5-33 水牛、めん羊、山羊、馬の CH<sub>4</sub>排出係数

家畜種	CH <sub>4</sub> 排出係数 [kg-CH <sub>4</sub> 頭 <sup>-1</sup> 年 <sup>-1</sup> ]	出典
めん羊	0.28	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.40、Table10.15
山羊	0.20	
馬	2.34	
水牛	2	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.39、Table10.14
うさぎ	0.08	2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、p10.41、Table10.16
ミンク	0.68	

表 5-34 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの N<sub>2</sub>O 排出係数

排せつ物管理区分		N <sub>2</sub> O 排出係数 [kg-N <sub>2</sub> O-N (kg-N) <sup>-1</sup> ]
Dry lot	乾燥	2.0 %
Pasture Range and Paddock (水牛)	その他 (放牧地/牧野/牧区)	2.0 %
Pasture Range and Paddock (めん羊、山羊、馬)	その他 (放牧地/牧野/牧区)	1.0 %
Daily spread	逐次散布	0 %
Burned for fuel	燃料利用	0 %

(出典) Dry lot, Daily Spread : 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、page 10.62、Table 10.21

Pasture Range and Paddock : 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4、page 11.11、Table 11.1

### ■ 活動量

めん羊、山羊、馬、水牛の家畜頭数は「3.A.消化管内発酵」と同じデータを使用した (表 5-12 参照)。うさぎ、ミンクに関しては、農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」に示された飼養頭数を用いた (表 5-35 参照)。

N<sub>2</sub>O に関して、各家畜の飼養頭数に家畜 1 頭あたりの排せつ物中窒素量 (または体重に体重あたりの排せつ物窒素量を掛け合わせて算出した値) を乗じて総窒素量を算出し、その総窒素量に排せつ物管理区分ごとの割合を掛け合わせ、排出処理区分ごとの窒素量を算出した (表 5-36)。水牛の排せつ物管理区分割合は 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を使用した (排せつ物管理区分割合は「Asia」のデフォルト値) (表 5-37)。

2006年 IPCC ガイドラインでデフォルト値が示されていないうさぎ、ミンクの排せつ物管



理割合に関しては専門家判断により、100%乾燥処理されるとした。2006年 IPCC ガイドラインでデフォルト値が示されていないめん羊、山羊、馬の排せつ物管理割合については「その他の家畜カテゴリーからのふん尿は概して放牧地で管理される」（2006年 IPCC ガイドライン、Vol.4, p10.61）と記述されていることから、これら家畜の排せつ物は放牧により処理されるとみなした。

表 5-35 うさぎ、ミンクの飼養頭数 [1000 頭]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
うさぎ	15	16	21	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18
ミンク	155	11	6	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

(出典)「小動物及び実験動物等の飼養状況」

表 5-36 水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンクの体重および排せつ物中窒素量 (Nex)

家畜種	体重 [kg]	体重あたりの排せつ物中窒素量 [kg-N (1000kg-家畜体重) <sup>-1</sup> 日 <sup>-1</sup> ]	家畜排せつ物中窒素量 [kg-N (頭) <sup>-1</sup> 年 <sup>-1</sup> ]
水牛	380	0.32	(44.4)
めん羊	48.5	1.17	(20.7)
山羊	38.5	1.37	(19.3)
馬	377	0.46	(63.3)
うさぎ	-	-	8.10
ミンク	-	-	4.59

(注) 括弧内の数値は、計算値。

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, page 10.79, Table 10A-6, page 10.82, Table 10A-9, page 10.59, Table 10.19

表 5-37 水牛の排せつ物管理処理区分割合 (MS<sub>n</sub>)

排せつ物管理区分		処理区分割合
Lagoons	嫌気性ラグーン	0 %
Liquid /Slurry	汚水処理	0 %
Solid Storage	固形貯留	0 %
Dry lot	乾燥	41 %
Pasture Range and Paddock	放牧地／牧野／牧区	50 %
Daily Spread	逐次散布	4 %
Digester	消化処理	0 %
Burned for Fuel	燃料利用	5 %
Other	その他	0 %

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, page 10.79, Table 10A-6

### c) 不確実性と時系列の一貫性

#### ■ 不確実性

家畜ごとに不確実性の評価を行った。CH<sub>4</sub>排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインの Tier1 の値 (30%) を採用した。N<sub>2</sub>O 排出係数の不確実性は 2006年 IPCC ガイドラインの各パラメータの不確実性のデフォルト値を使用し、それらを合成して算出した。活動量の不確実性は、畜産統計のブロイラーの値で代替し、9%とした。その結果、各家畜の CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O の不確実性は、それぞれ、-31%～+31%、-72%～+112%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出係数はすべての年で一定値を使用している。活動量については、「家畜改良関係資料」、「馬関係資料」、「家畜・家きん等の使用状況調査結果」、「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」を用い、それぞれ 1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。



## d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

## e) 再計算

特になし。

## f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

## 5.3.3. その他の家畜 (3.B.4.-)

上述した家畜以外に、農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」においては、鹿、トナカイ、銀ぎつね、その他の家禽類（あひる・あいがも、七面鳥など）が掲載されているが、飼育頭数が少なく、いずれも算定方法検討会で定めた算定対象となる 3,000t-CO<sub>2</sub>換算という閾値を超える排出量とはならないため、排出量を報告していない（別添5参照）。

5.3.4. 間接 N<sub>2</sub>O 排出量 (3.B.5.)

## 5.3.4.1. 大気沈降 (3.B.5.-)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、家畜排せつ物処理過程で NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素化合物の大気沈降に伴い発生した N<sub>2</sub>O の排出量の算定、報告を行う。

## b) 方法論

## ■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4 Page 10.55, Fig.10.4) に従い、Tier2 法で N<sub>2</sub>O 排出量の算定を行った。

$$E = N_{Volatilization-MMS} \times EF \times 44/28$$

$E$  : 大気沈降による N<sub>2</sub>O 排出量 (家畜排せつ物処理過程) [kg-N<sub>2</sub>O]

$N_{Volatilization-MMS}$  : 家畜排せつ物処理過程で NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 [kg (NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N)]

$EF$  : 排出係数 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg (NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N)]

## ■ 排出係数

0.010 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-NH<sub>3</sub>-N & NO<sub>x</sub>-N deposited] (2006年 IPCC ガイドライン Vol.4, Page10.24, Table11.3)

## ■ 活動量

牛、豚、鶏（採卵鶏、ブロイラー）に関して、活動量は下記の式で示したように、家畜のふん尿管理から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 ( $N_{Volatilization-MMS}$ ) は、上記 5.3.1.で算出した各処理方式の家畜排せつ物中の窒素量 ( $N_{Bi}$ ) と各処理方式の畜舎における家畜排せつ物からの揮散割合 ( $Frac_{GASMi}$ ) と各処理方式の処理時における家畜排せつ物からの揮散割合

( $Frac_{GASM2i}$ ) から算出した。各処理方式の揮散割合は寶示戸、他 (2003) に示されたデータから設定した (表 5-39)。浄化処理に関しては処理時に揮散しないと設定した。なお、放牧家畜のふん尿から  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発した窒素からの間接  $N_2O$  排出量は 3.D.b.1. で報告している。

$$N_{Volatilization-MMS} = \sum \{N_{Bi} \times (Frac_{GASM1i} + Frac_{GASM2i})\}$$

- $N_{Volatilization-MMS}$  : 家畜排せつ物処理過程で  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発した窒素量 [kg ( $NH_3-N+NO_x-N$ )]
- $N_{Bi}$  : 処理方式  $i$  における家畜排せつ物中の窒素量 [kg-N]
- $Frac_{GASM1i}$  : 処理方式  $i$  の畜舎における家畜排せつ物から  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発する割合 [kg- $NH_3-N + NO_x-N$ /kg-N]
- $Frac_{GASM2i}$  : 処理方式  $i$  の処理時に家畜排せつ物から  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発する割合 [kg- $NH_3-N + NO_x-N$ /kg-N]

表 5-38 家畜排せつ物からの揮散割合 (畜舎・処理時)

家畜種	処理区分		畜舎からの揮散割合 ( $Frac_{GASM1}$ )	処理時揮散割合 ( $Frac_{GASM2}$ )
乳用牛	ふん	強制発酵以外	10.3 %	13.7 %
		強制発酵	10.3 %	1.9 %
	尿	浄化以外	10.3 %	11.0 %
		浄化	10.3 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	4.5 %	13.7 %
		浄化	10.3 %	0 %
肉用牛	ふん	強制発酵以外	6.38 %	13.7 %
		強制発酵	6.38 %	1.9 %
	尿	浄化以外	6.38 %	11 %
		浄化	6.38 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	6.38 %	13.7 %
		貯留・メタン発酵	6.38 %	10.8 %
豚	ふん	すべての処理	14.7 %	19.7 %
	尿	浄化以外	14.7 %	27.0 %
		浄化	14.7 %	0 %
	ふん尿混合	浄化・貯留・メタン発酵以外	15.8 %	24.2 %
		貯留・メタン発酵	14.7 %	25.0 %
	採卵鶏・ブロイラー	ふん	すべての処理	8.4 %

(出典) 寶示戸他 (2003)

水牛、うさぎ、ミンクに関しては、ふん尿全量に 2006 年 IPCC ガイドラインで示されたデフォルトの揮散割合 (Other-Solid storage : 12%) を掛けることにより、 $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発する量を算出した。

表 5-39 家畜排せつ物処理過程で  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発した窒素量 [kt( $NH_3-N+NO_x-N$ )]

家畜種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
乳用牛	26.6	26.1	24.6	23.4	21.0	20.5	20.5	20.2	19.7	19.4	19.5	19.1	19.1	19.1
肉用牛	22.3	23.0	23.0	22.5	23.5	22.5	22.2	21.5	20.9	20.3	20.3	20.4	20.5	20.3
豚	54.7	47.5	44.7	38.3	35.9	36.2	36.2	36.0	34.8	34.0	33.4	33.3	34.7	34.5
鶏 (採卵鶏、ブロイラー)	187.6	177.5	157.2	136.3	121.8	118.1	113.8	111.2	111.5	112.1	113.0	114.5	117.0	118.5
その他の家畜 (水牛、ミンク、うさぎ)	0.10	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02
合計	291.3	274.0	249.6	220.5	202.4	197.3	192.8	189.0	186.9	185.8	186.2	187.4	191.3	192.4

## c) 不確実性と時系列の一貫性

## ■ 不確実性

後述の「農用地の土壌（大気沈降）」の節で算出した不確実性（-106%～+447%）を用いた。

## ■ 時系列の一貫性

排出係数はすべての年で一定値（デフォルト値）を使用している。活動量に関して、揮発割合はすべての年で一定値を使用し、家畜排せつ物量は 5.3.1. で算出した値を用いており、1990 年度値から一貫した方法を使用して、算定している。

## d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

## e) 再計算

肉用牛と豚の排せつ物中窒素量の算定方法が改訂されたので、全年で再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

## f) 今後の改善計画及び課題

「5.3.1. 牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）（3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.-）」に同じ。

## 5.3.4.2. 窒素溶脱・流出（3.B.5.-）

「家畜排せつ物法」が制定されており、家畜排せつ物管理の際に施設から汚水が流出しない処置を施すこと（床をコンクリート張りにしたり、防水シートを敷くなど）が義務付けられていることから、家畜排せつ物処理時に地下水等に窒素が溶脱・流出する可能性については極めて低い。そのため、この排出源については「NO」として報告する。

## 5.4. 稲作（3.C.）

CH<sub>4</sub>は嫌気性条件で微生物の働きによって生成されるため、水田は CH<sub>4</sub>生成に好適な条件が整っていると言える。日本ではすべての水田が灌漑されており、間断灌漑水田（中干しされる水田）と常時湛水田に分かれ、これらが算定の対象となる。日本では主に、間断灌漑水田で稲作が営まれている。

2018 年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は 13,561 kt-CO<sub>2</sub>換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCF を除く）の 1.1%を占めている。また、1990 年度の排出量と比較すると 6.2%の増加となっている。この 1990 年度からの排出量増加の主な要因は有機物投入量が増加したことによるものである。

表 5-40 稲作に伴う CH<sub>4</sub>排出量（3.C.）

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CH <sub>4</sub>	3.C.1.- 常時湛水田	kt-CH <sub>4</sub>	69.8	77.9	72.0	78.2	78.2	83.8	83.7	82.6	83.3	82.7	79.4	78.6	77.6	75.5
	3.C.1.- 間断灌漑水田		441.1	466.3	437.9	459.6	476.3	517.8	503.5	490.4	499.3	494.8	476.9	477.6	467.5	467.0
	合計	kt-CH <sub>4</sub>	510.8	544.2	510.0	537.8	554.5	601.6	587.2	573.0	582.6	577.5	556.3	556.3	545.1	542.4
		kt-CO <sub>2</sub> 換算	12,771	13,605	12,749	13,445	13,863	15,041	14,680	14,325	14,565	14,437	13,908	13,907	13,627	13,561

5.4.1. 灌漑水田（間断灌漑水田（中干し）、常時湛水田）（3.C.1.）

a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、灌漑水田（間断灌漑水田、常時湛水田）からの CH<sub>4</sub>排出の算定、報告を行う。

■ 日本の水田における水管理について

日本の一般的な水田農家の間断灌漑（中干し）水田は、2006年 IPCC ガイドラインの間断灌漑水田（複数落水）とは性質が異なるため、CRF 上では「Intermittently flooded (Single aeration)」で報告する。概要を下図に示す。

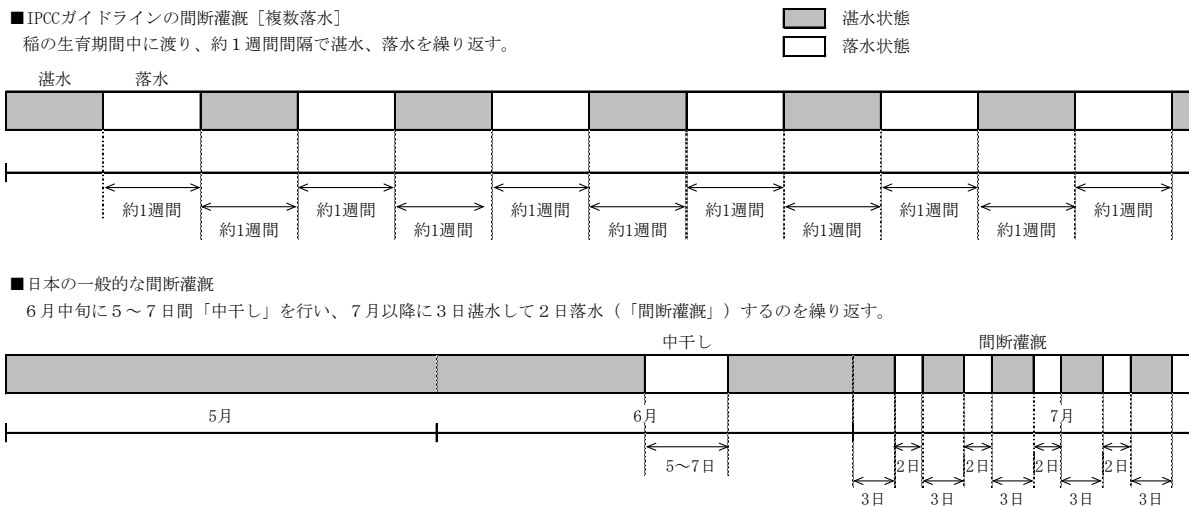


図 5-4 2006年 IPCC ガイドラインの間断灌漑（複数落水）水田と日本の一般的な間断灌漑（中干し）水田

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの算定方法をもとに、水田の有機物施用方法や水管理によるメタン発生量の変化を推定する数理モデルである DeNitrification-DeComposition-Rice モデル（DNDC-Rice モデル（麓、他（2010））を用いて決定した算定方法（下記式）とそのモデルから算出した排出係数をもとに算定をおこなった。なお、DNDC-Rice モデルは DNDC モデルをベースに日本における水稻の CH<sub>4</sub>排出量を推定できるよう日本で改良を加えたモデルである。図 5-5 は DNDC-Rice モデルの概念図である。

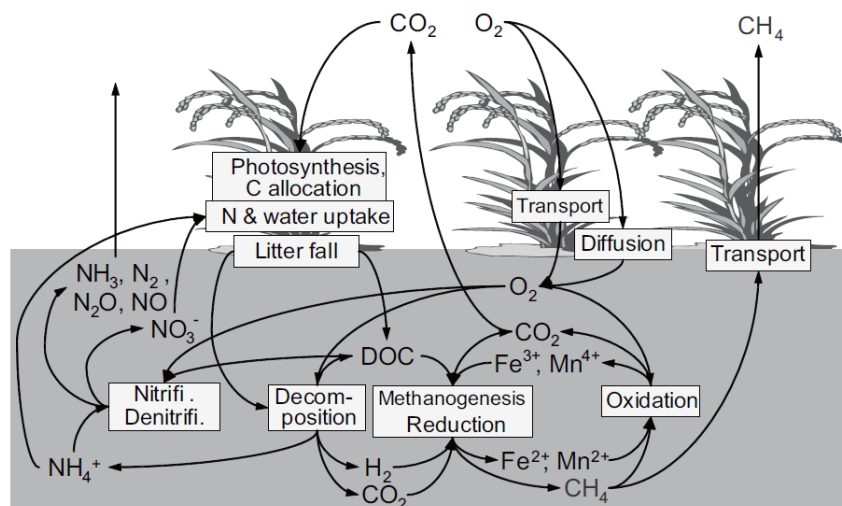


図 5-5 DNDC-Rice モデルの概念図

(出典) 麓他 (2010)

排出係数の算出には Tier3 法 (DNDC-Rice モデル) を用い、排出量の算定には Tier2 法を変形した方法を用いている。

なお、ここで用いられている算定方法については Katayanagi et al. (2016)、Katayanagi et al. (2017) および関連文献に記述されているものをもとに算定方法検討会において検討し、構築している。

$$E = \sum_{i,j,k,l} \{ (A_i \times f_{Dij} \times f_{wi,k} \times f_{ol}) \times EF_{ij,k,l} \} \times 16/12$$

$$EF = aX + b$$

$E$	: 水田からの $\text{CH}_4$ の排出量 [ $\text{kgCH}_4/\text{年}$ ]
$i$	: 地域 (全国 7 地域)
$j$	: 排水性 (排水不良、日排除、4 時間排除)
$k$	: 水管理 (間断灌漑、常時湛水)
$l$	: 施用有機物 (稲わら、堆肥、無施用)
$A$	: 地方別水稲作付面積 [ $\text{ha}$ ]
$f_D$	: 排水性割合
$f_w$	: 水管理割合
$f_o$	: 有機物管理割合
$EF$	: 地方別・排水性別・水管理別・有機物管理割合別排出係数 [ $\text{kgCH}_4\text{-C}/\text{ha}/\text{年}$ ]
$X$	: 有機物施用量 [ $\text{tC}/\text{ha}/\text{年}$ ]
$a$	: 傾き (有機物施用量と DNDC-Rice モデルによって算出された $\text{CH}_4$ 排出量の回帰式より算出)
$b$	: 切片 (有機物施用量と DNDC-Rice モデルによって算出された $\text{CH}_4$ 排出量の回帰式より算出)

## ■ 排出係数

排出係数の算出には DNDC-Rice モデルを用いている。

今回使用した排出係数は全国 986 地点の水田の情報を基に構築している。入力データには、土壌 (土壌有機態炭素量、pH、粘土含量、乾燥密度など)、圃場の排水性 (最大排水速度)、気象データ (気温、降水量)、圃場管理情報 (移植日、収穫日、耕起日、耕起法、施肥日、施肥量、有機物施用日、有機物施用量、有機物 C/N 比、湛水日、落水日) を用いている。入力データの出典と概要は以下の通りである。

- ・ 土壌理化学性：農林水産省「土壌環境基礎調査」の 1,2 巡目のデータのうち、DNDC-Rice

モデルで入力する必要がある全てのデータが記載されている 986 地点のデータ。

- ・ 圃場の排水性：農林水産省「第4次土地利用基盤整備基本調査」(2006)の「湛水状況」の記載(4時間排除、日排除、排水不良)に基づき、調査地点の最大排水速度を 15 mm day<sup>-1</sup>、10 mm day<sup>-1</sup>、または 5 mm day<sup>-1</sup> と設定した。
- ・ 気象データ：調査地点の最寄りの AMeDAS 地点の日最低気温、日最高気温、降水量を用いた。
- ・ 圃場管理情報：日本全体を気象庁の一次細分区域に従って 136 に区分し、各地の JA 等が公表している栽培歴に基づき作成したデータセット (Hayano et al., 2013) を用いた。
- ・ 有機物施用量：Yagasaki and Shirato (2014) の方法により、県別に 1981~2010 年の稲わら等の作物残渣すき込み量および堆肥の施用量を推定した。すなわち、稲わら等の作物残渣の平均すき込み量は、水稻と裏作の麦および肥飼料作物の県別収穫量統計値から推定したそれぞれの残渣発生量とそのうち土壌にすき込まれた割合をかけあわせたのち、水稻作付面積でその量を除して算出した。堆肥施用量は、「土壌環境基礎調査」(1990)、温暖化対策土壌機能調査協議会「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」(2013)のアンケート結果等から年別の平均施用量を推定した。

DNDC-Rice モデルと上記の入力値を用いて、986 地点の 1981~2010 年 (30 年間) のメタン排出フラックスを、水管理 2 シナリオ (間断灌漑および常時湛水)、有機物施用 4 シナリオ (わらと堆肥<sup>1</sup>、わらのみ、堆肥のみ、施用なし) の計 8 シナリオで推定した。その結果から統計の有意差を考慮し、メタン排出フラックス推定値を 7 地域、排水性 (3 段階) および水管理と有機物施用シナリオで区分し、年別の平均値を求めた。さらに、有機物施用量 (区分毎の各年の平均値) から CH<sub>4</sub>排出フラックスを予測する回帰式 (1 次関数) を導出した。なお、回帰式の切片 (b) は、有機物施用なしで推定した平均メタン排出フラックスに固定した。

地域別の有機物施用総量は Yagasaki and Shirato (2014) の方法で求めた県別の施用量からまとめた。さらに、インベントリの算定には、有機物管理方法別の施用量 (有機物施用量) (X) が必要となるため、その総量と有機物管理方法の割合 (表 5-46) から求めた。有機物管理方法の割合は「土壌環境基礎調査」、「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」、農林水産省「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」、「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」の調査結果を基にした。地域別の各投入区分における有機物施用量およびそれらから算出された各区分の排出係数はそれぞれ下記表 5-41、表 5-42 に示したとおりである。

表 5-41 地域別の各施用区分における有機物投入量 (X) [t-C/ha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
稲わら	北海道	1.68	2.16	2.39	2.74	2.31	2.74	2.68	2.50	2.50	2.56	2.57	2.52	2.56	2.28
	東北	1.83	2.25	2.62	2.66	2.60	2.85	2.59	2.46	2.52	2.54	2.53	2.48	2.43	2.46
	北陸	2.97	2.99	3.41	2.36	2.43	3.60	3.34	2.31	2.37	2.33	2.38	2.52	2.34	2.38
	関東	1.76	2.09	2.54	2.56	2.48	2.58	2.44	2.34	2.41	2.36	2.26	2.30	2.26	2.31
	東海・近畿	2.29	2.65	2.87	2.97	2.83	3.06	2.83	2.75	2.84	2.70	2.82	2.87	2.80	2.79
	中国・四国	1.96	2.51	2.72	2.74	2.50	2.90	2.71	2.58	2.59	2.48	2.57	2.68	2.67	2.63
	九州・沖縄	1.39	1.50	1.65	1.57	1.75	1.96	1.53	1.75	1.77	1.72	1.75	1.80	1.79	1.79
	九州・沖縄	1.39	1.50	1.65	1.57	1.75	1.96	1.53	1.75	1.77	1.72	1.75	1.80	1.79	1.79
堆肥	北海道	1.24	0.61	0.68	1.78	2.32	2.22	2.61	2.49	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	東北	1.24	0.61	0.67	1.78	2.30	2.18	2.52	2.41	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	北陸	1.23	0.61	0.67	1.78	2.31	2.20	2.58	2.47	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15	2.15
	関東	1.38	0.74	0.73	2.14	2.73	2.57	2.99	2.85	2.50	2.49	2.49	2.49	2.49	2.50
	東海・近畿	1.25	0.61	0.68	1.80	2.34	2.22	2.61	2.48	2.16	2.16	2.16	2.16	2.16	2.16
	中国・四国	1.33	0.67	0.71	1.94	2.49	2.37	2.77	2.65	2.31	2.31	2.33	2.33	2.34	2.35
	九州・沖縄	1.60	0.95	0.85	2.82	3.82	3.58	4.33	4.11	3.67	3.70	3.73	3.77	3.75	3.79
	九州・沖縄	1.60	0.95	0.85	2.82	3.82	3.58	4.33	4.11	3.67	3.70	3.73	3.77	3.75	3.79

<sup>1</sup> わらと堆肥を同時に投入したシナリオはモデル上で構築されているが、わらと堆肥を同時に投入している有機物管理割合 (fo) が得られないことから、インベントリ排出量の算定には使用していない。



表 5-42 各区分の稲作からの CH<sub>4</sub>排出係数 [kg-CH<sub>4</sub>-C/ha/年]

項目		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
排水不良・常時湛水	稲わら	北海道	571	701	765	859	743	859	843	794	795	811	812	798	811	734		
		東北	664	775	875	886	871	936	867	833	847	854	850	839	825	833		
		北陸	805	810	909	664	679	953	892	653	666	655	668	701	660	668		
		関東	235	276	331	333	324	335	319	306	316	309	297	302	297	303		
		東海・近畿	492	562	606	627	600	644	599	583	600	574	596	606	593	591		
		中国・四国	464	573	615	619	571	650	611	587	589	568	585	606	605	597		
		九州・沖縄	185	198	216	206	229	254	202	228	231	224	228	235	234	234		
		堆肥	北海道	452	279	298	600	746	717	823	792	698	698	698	698	698	698	
			東北	505	337	355	651	790	757	848	820	748	748	748	748	748	748	
	北陸		401	254	270	529	652	627	715	689	613	613	613	613	613	613		
	関東		188	109	108	282	355	335	387	370	326	325	325	325	325	326		
	東海・近畿		284	157	170	394	500	478	554	530	466	466	466	466	466	466		
	中国・四国		341	210	218	460	570	546	624	600	534	534	537	538	539	541		
	九州・沖縄		211	131	119	358	481	450	542	515	462	465	469	474	471	476		
	無施用		北海道	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	
			東北	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	175	
		北陸	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113	113		
		関東	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18		
		東海・近畿	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35		
		中国・四国	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77		
		九州・沖縄	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16		
		排水不良・間断灌漑	稲わら	北海道	571	701	765	859	743	859	843	794	795	811	812	798	811	734
				東北	637	747	846	856	842	906	838	805	818	825	821	810	797	804
	北陸			605	609	691	488	501	727	677	479	490	481	492	519	485	492	
	関東			212	249	298	300	292	302	287	275	284	278	267	272	268	273	
	東海・近畿			399	457	493	510	488	525	487	473	488	466	485	493	482	480	
	中国・四国			416	518	556	560	515	589	553	530	533	512	528	548	547	540	
九州・沖縄	162			173	188	180	199	220	176	198	201	195	198	204	203	203		
堆肥	北海道			452	279	298	600	746	717	823	792	698	698	698	698	698	698	
	東北			480	314	332	624	762	730	819	792	720	720	720	720	720	720	
	北陸		271	150	163	377	479	458	531	509	447	447	447	447	447	447		
	関東		170	99	98	254	319	301	348	333	293	293	292	293	293	293		
	東海・近畿		227	122	133	318	406	387	450	430	377	377	377	377	377	377		
	中国・四国		302	180	187	412	514	492	565	543	481	481	484	484	486	487		
	九州・沖縄		183	116	106	308	412	386	464	441	396	399	402	406	404	408		
	無施用		北海道	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	114	
			東北	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	
北陸			33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33		
関東			17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17		
東海・近畿			21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21		
中国・四国			57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57	57		
九州・沖縄			19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19	19		
日排除・常時湛水			稲わら	北海道	333	417	458	519	444	518	508	477	477	488	488	479	488	438
				東北	492	576	653	661	649	699	646	621	631	637	634	625	615	620
	北陸			608	612	692	493	506	728	678	484	495	486	497	523	490	497	
	関東			156	182	218	219	213	220	210	201	208	203	196	199	196	200	
	東海・近畿			225	258	279	289	276	297	275	268	276	264	274	279	273	272	
	中国・四国			184	232	250	252	231	265	248	238	239	229	237	246	246	242	
	九州・沖縄	155		166	180	172	191	212	169	190	193	187	191	196	195	195		
	堆肥	北海道		256	145	157	352	446	427	495	475	415	415	415	415	415	415	
		東北		371	242	256	482	588	563	632	611	556	556	556	556	556	556	
		北陸	280	160	173	384	484	464	535	514	452	452	452	452	452	452		
		関東	126	75	75	186	233	220	253	242	214	214	213	214	214	214		
		東海・近畿	125	65	71	178	229	218	254	243	212	212	212	212	212	212		
		中国・四国	131	74	77	183	230	220	254	244	215	215	216	216	217	218		
		九州・沖縄	176	109	99	300	403	377	455	432	387	390	393	398	395	399		
		無施用	北海道	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	39	
			東北	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	119	
	北陸		46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46	46		
	関東		17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17		
	東海・近畿		6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6		
	中国・四国		17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17		
	九州・沖縄		12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12		

表 5-42 各区分の稲作からの CH<sub>4</sub>排出係数 [kg-CH<sub>4</sub>-C/ha/年] (つづき)

項目		1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
日 排 除 ・ 間 断 灌 漑	稲 わ ら	北海道	229	289	318	360	307	360	353	331	331	339	339	333	339	303
		東北	349	412	469	475	467	504	465	445	453	457	455	448	441	445
		北陸	441	444	502	357	366	529	492	351	358	352	360	379	355	360
		関東	115	134	160	161	156	162	154	148	153	149	144	146	144	147
		東海・近畿	101	116	126	130	124	134	124	121	124	119	123	126	123	122
		中国・四国	98	125	135	136	124	144	134	128	129	124	128	133	132	131
	九州・沖縄	88	94	103	98	109	121	96	109	110	107	109	112	111	111	
	堆 肥	北海道	175	96	105	242	309	296	344	330	287	287	287	287	287	287
		東北	259	163	173	342	421	402	454	438	397	397	397	397	397	397
		北陸	201	114	124	277	350	335	388	372	327	327	327	327	327	327
		関東	93	57	56	137	171	161	186	178	157	157	157	157	157	157
		東海・近畿	56	29	32	80	103	98	114	109	95	95	95	95	95	95
中国・四国		69	37	39	98	124	118	137	131	115	116	116	116	117	117	
九州・沖縄	100	62	56	171	230	215	260	247	221	223	225	227	225	228		
無 施 用	北海道	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	21	
	東北	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	71	
	北陸	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	31	
	関東	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	
	東海・近畿	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
	中国・四国	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
九州・沖縄	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		
4 時 間 排 除 ・ 常 時 灌 水	稲 わ ら	北海道	300	376	413	468	400	468	459	430	430	440	441	433	440	395
		東北	451	532	605	612	601	649	598	574	584	589	586	578	568	574
		北陸	578	582	659	469	481	693	646	461	471	463	473	498	466	472
		関東	208	242	288	289	282	291	277	267	275	269	259	263	259	264
		東海・近畿	240	275	296	307	293	316	293	285	294	281	292	297	290	289
		中国・四国	250	313	337	339	312	357	335	321	322	310	319	332	331	327
	九州・沖縄	185	198	216	206	229	255	202	228	232	225	229	235	234	234	
	堆 肥	北海道	230	130	140	317	402	385	447	429	374	374	374	374	374	374
		東北	336	214	227	442	543	519	585	565	512	512	512	512	512	512
		北陸	266	152	165	365	460	441	509	489	430	430	430	430	430	430
		関東	169	103	102	247	307	291	334	320	283	282	282	282	283	283
		東海・近畿	137	73	80	191	244	233	271	259	227	227	227	227	227	227
中国・四国		179	104	108	248	311	297	342	328	290	290	292	292	293	294	
九州・沖縄	211	130	118	360	484	454	547	519	465	469	473	478	475	480		
無 施 用	北海道	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	33	
	東北	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	97	
	北陸	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	43	
	関東	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	
	東海・近畿	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	
	中国・四国	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	27	
九州・沖縄	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13		
4 時 間 排 除 ・ 間 断 灌 漑	稲 わ ら	北海道	166	210	231	263	224	263	257	241	241	247	247	242	247	221
		東北	316	374	427	432	424	458	422	404	412	415	413	407	400	404
		北陸	390	392	445	315	323	468	436	309	316	310	317	334	313	317
		関東	143	167	199	200	195	201	192	184	190	186	179	182	179	182
		東海・近畿	135	154	167	173	165	178	165	160	165	158	164	167	163	163
		中国・四国	173	217	233	235	216	248	222	223	214	221	230	229	229	226
	九州・沖縄	109	117	128	122	136	151	120	135	137	133	135	139	139	139	
	堆 肥	北海道	126	69	75	176	225	215	251	240	209	209	209	209	209	209
		東北	232	144	154	309	382	365	412	398	360	360	360	360	360	360
		北陸	175	97	106	243	309	295	342	328	288	288	288	288	288	288
		関東	115	69	68	170	213	201	231	221	195	195	195	195	195	196
		東海・近畿	76	40	44	107	137	131	152	145	127	127	127	127	127	127
中国・四国		123	71	74	171	215	206	237	227	201	201	202	202	203	204	
九州・沖縄	125	76	69	214	288	270	325	309	276	279	281	284	282	285		
無 施 用	北海道	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	
	東北	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	59	
	北陸	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	22	
	関東	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	
	東海・近畿	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	
	中国・四国	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	
九州・沖縄	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		

■ 活動量

地域別水稲作付面積 (A) は農林水産省「耕地及び作付面積統計」に示された値を用いた。排水性割合 (f<sub>D</sub>)、水管理割合 (f<sub>w</sub>)、有機物管理割合 (f<sub>o</sub>) はそれぞれ下記表 5-43～表 5-46 に示した農林水産省等の調査データをそれぞれ用いている。

表 5-43 地域別水稲作付面積 (A) [kha]

地域	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
北海道	146	163	135	119	115	115	114	113	113	112	111	108	107	106
東北	525	539	456	444	421	429	406	414	419	419	415	414	413	412
北陸	258	260	221	218	211	213	213	213	215	216	214	213	212	213
関東	386	390	336	331	320	322	323	324	324	323	322	321	318	316
東海	117	116	95	91	87	88	88	88	87	86	85	85	84	84
近畿	145	148	122	117	111	111	111	111	111	110	108	107	106	106
中国・四国	236	232	187	182	176	178	176	175	175	173	170	167	165	162
九州・沖縄	246	251	207	206	196	202	202	203	203	201	199	196	195	193
合計	2,058	2,098	1,758	1,708	1,637	1,657	1,632	1,641	1,647	1,639	1,623	1,611	1,600	1,592

(注) 算定上では東海と近畿は1地域としてまとめられ計算されている

(出典) 「耕地及び作付面積統計」

表 5-44 排水性割合 ( $f_D$ )

地域	4時間排除割合	日排除程度割合	排水不良割合
北海道	51%	42%	7%
東北	63%	31%	6%
北陸	69%	26%	4%
関東	59%	32%	9%
東海・近畿	69%	23%	8%
中国・四国	65%	27%	8%
九州・沖縄	74%	21%	5%

(出典) 「第4次土地利用基盤整備基本調査」

表 5-45 水管理割合 ( $f_w$ )

地域	常時湛水田割合	間断灌漑水田割合
北海道	48%	52%
東北	5%	95%
北陸	4%	96%
関東	14%	86%
東海・近畿	11%	89%
中国・四国	8%	92%
九州・沖縄	7%	93%

(出典) 「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

表 5-46 日本の有機物管理方法の割合 ( $f_o$ )

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
わら施用	60%	60%	60%	60%	61%	57%	62%	65%	64%	64%	61%	61%	61%	61%
各種堆肥施用	20%	20%	20%	20%	23%	26%	22%	23%	27%	27%	27%	27%	27%	27%
無施用	20%	20%	20%	20%	16%	17%	16%	12%	9%	9%	12%	12%	12%	12%

(出典) 1990～2007年値：「土壌環境基礎調査」

2008～2012年値：「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

2013～2014年値：「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業」

2015年以降：「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業」

### c) 不確実性と時系列の一貫性

#### ■ 不確実性

排出係数の不確実性は、DNDC-Rice モデルから算出した 6%を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差 (1%) を採用した。その結果、排出量の不確実性は 6%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、出典を用いて算定されている。

## d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

2016年提出で報告した有機物投入量データについて検証した結果、DNDC-Rice モデルに入力する稲わらのデータの代わりに、稲わらと堆肥の合計値を入力して計算しており、堆肥の有機物投入量が重複計上されていた。従って、2017年提出で有機物投入量データを修正した。

なお、DNDC-Rice モデルから算出されたメタン排出量の推定値と圃場におけるメタン排出量の実測値の比較は、Minamikawa et al. (2014)、麓他 (2010)、Katayanagi et al. (2016) の論文などで実施され、報告されている。下図 5-6 は Katayanagi et al. (2016) に記載されている年間メタン排出量の実測値と DNDC-Rice モデルによる推定値の比較である。論文によると、CH<sub>4</sub> 排出量の推定値は地点間の条件の違いによるばらつきを反映し、実測値と高い相関をもっていた ( $r=0.861$ ) と報告している。

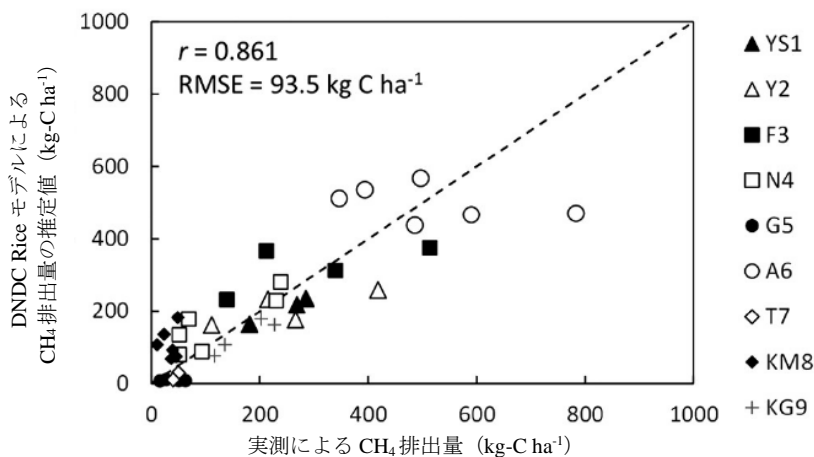


図 5-6 年間メタン排出量の実測値と DNDC-Rice モデルによる推定値の比較

(出典) Katayanagi et al. (2016) Fig.3 より引用

また、DNDC-Rice モデルから算出された排出係数を我が国のインベントリに適用することの妥当性確認については、Katayanagi et al. (2016) の中で行うとともに、算定方法検討会の農業分科会においても検討を行っている。

## e) 再計算

特になし。

## f) 今後の改善計画及び課題

将来的に DNDC-Rice モデルの研究が進み、改良・アップデートされた際には、改良版 DNDC-Rice モデルの適用を検討する。

## 5.4.2. 天水田、深水田、その他の水田 (3.C.2., 3.C.3., 3.C.4.)

天水田、深水田については、International Rice Research Institute (IRRI) の *World Rice STATISTICS 1993-94* (1995) に示されている通り、日本には存在しないため、「NO」として報告した。

その他の水田については、*World Rice STATISTICS 1993-94* (1995) に示されている通り、陸

稲の作付田が考えられるが、陸稲の作付田は湛水しないため畑土壌と同様に好氣的である。CH<sub>4</sub>生成菌は絶対嫌気性菌であり、土壌が嫌気性に保たれなければCH<sub>4</sub>は排出されない。従って、「NA」として報告した。

### 5.5. 農用地の土壌 (3.D.)

農用地からのN<sub>2</sub>Oの直接排出（無機質肥料の施肥、有機質肥料の施肥、放牧家畜の排せつ物、作物残渣のすき込み、土壌有機物の損失／獲得による無機化／固定化、有機質土壌の耕起）及び間接排出（大気沈降、窒素溶脱）を対象に算定、報告を行う。

2018年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は5,412 kt-CO<sub>2</sub>換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量（LULUCFを除く）の0.4%を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると23.9%の減少となっている。この1990年度からの排出量減少の主な要因は無機質肥料（化学肥料）施用量、家畜ふん尿由来の有機質肥料施用量が減少したことによるものである。その主な理由には日本の農地の栽培面積が減少していること（表 5-50）と、一部の地域においては、地下水の窒素汚染を緩和するために環境保全農業が推奨されたことによる。

表 5-47 農用地の土壌からのN<sub>2</sub>O排出量 (3.D.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
N <sub>2</sub> O	3.D.a. 直接排出	1.無機質肥料	6.2	5.3	5.0	4.8	3.6	4.2	4.0	4.1	4.2	4.1	3.9	3.9	3.9	3.9	
		2.有機質肥料	5.3	5.0	4.8	4.2	4.1	4.2	4.2	4.1	4.1	4.1	4.2	4.5	4.4	4.6	4.6
		3.放牧地のふん尿	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
		4.作物残渣	2.4	2.3	2.5	2.3	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	1.9	1.9	1.8	1.8
		5.無機化	1.4	1.3	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2	1.2
		6.有機質土壌の耕起	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4
	3.D.b. 間接排出	1.大気沈降	2.7	2.5	2.3	2.1	1.9	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.1	2.0	2.1	2.1
		2.窒素溶脱・流出	5.4	5.1	4.8	4.5	4.0	4.2	4.1	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.1
	合計	kt-N <sub>2</sub> O	23.9	22.1	21.2	19.8	17.4	18.5	18.1	18.1	18.3	18.1	18.2	18.1	18.3	18.2	
		kt-CO <sub>2</sub> 換算	7,115	6,580	6,327	5,894	5,175	5,506	5,391	5,397	5,448	5,388	5,426	5,390	5,440	5,412	

#### 5.5.1. 直接排出 (3.D.a.)

農用地の土壌からは、無機質肥料の施肥、有機質肥料の施肥、放牧家畜の排せつ物、作物残渣のすき込みにより土壌中にアンモニウムイオンが発生し、好気条件下でそのアンモニウムイオンが硝酸態窒素に酸化される過程でN<sub>2</sub>Oが発生する。また、硝酸態窒素が脱窒する過程でN<sub>2</sub>Oが発生する。

また、鉍質土壌において有機物が分解することや有機質土壌を耕起することにより、窒素分の硝化・脱窒によりN<sub>2</sub>Oが発生する。

##### 5.5.1.1. 無機質窒素肥料 (3.D.a.1.)

###### a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地の土壌への無機質窒素肥料（化学肥料）の施肥に伴うN<sub>2</sub>O排出の算定を行う。

###### b) 方法論

###### ■ 算定方法

N<sub>2</sub>O排出量については、2006年IPCCガイドラインのデシジョンツリー（Vol.4, p.11.9, Fig.11.2）に従い、我が国独自の排出係数が存在するため、Tier2法で算定を行った。

また、硝化抑制剤入り化学肥料を投入し、土壌からのN<sub>2</sub>O排出量を抑制する排出削減対策についても算定に組み込んだ。

$$E = \sum_{ij} (F_{SNi,j} \times EF_{1i,j}) \times 44/28$$

- $E$  : 農用地の土壌への無機質肥料（化学肥料）の施肥に伴う N<sub>2</sub>O 排出量 [kg-N<sub>2</sub>O]
- $F_{SNi,j}$  : 作物種  $i$  の農用地土壌に投入された化学肥料  $j$  の施用量 [kg-N]
- $EF_{1i,j}$  : 作物種  $i$  の化学肥料  $j$  を投入した場合の排出係数 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-N]
- $i$  : 作物種
- $j$  : 肥料の種類（硝化抑制剤入りまたはなし）

■ 排出係数

排出係数については、日本の各地で測定されたデータを解析し、化学肥料の投入窒素量と N<sub>2</sub>O 排出量から、我が国独自の排出係数を設定した。また、硝化抑制剤入り化学肥料を投入した場合の排出係数は、我が国独自の排出係数に N<sub>2</sub>O の削減率をかけて設定した。

また、作物の種類による排出係数の違いを比較したところ、他の作物に比べ茶が有意に高く、水稻が有意に低いことが判明した。しかし、他の作物については有意な差はなかったため、農用地の土壌への施肥に伴う N<sub>2</sub>O の排出係数は、水稻、茶、その他の作物の3種類に区分して設定した。なお、我が国には火山灰由来の土壌が広く分布しており、排水性のよいこの土壌からの N<sub>2</sub>O 排出量が少ないことが、我が国の排出係数が 2006 年 IPCC ガイドラインに示される排出係数のデフォルト値に比べ低い理由であると考えられる。なお、水稻の排出係数は、2006 年 IPCC ガイドラインにデフォルト値の 1 つとして採用されており、国際的に妥当性が認められている数値である。

硝化抑制剤入り化学肥料を投入した際の N<sub>2</sub>O の削減率は Akiyama et.al (2010) におけるジシアンジアミド入り肥料による N<sub>2</sub>O 削減率（26～36%）の下限値である 26% と設定した。なお、日本において硝化抑制剤として添加されているのは多くがジシアンジアミドであるが、一部の化学肥料では別の物質が添加されていることから、削減量の過大評価を避けるためジシアンジアミドの削減率の下限値を用いた。また、水稻については湛水され硝化が起きにくいことから、硝化抑制剤入り化学肥料が施用される可能性がほとんどないため、排出係数は設定しない。

表 5-48 農用地の土壌への化学肥料の施肥に伴う N<sub>2</sub>O 排出係数

作物種	排出係数（硝化抑制剤なし） [kg-N <sub>2</sub> O-N/kg-N]	排出係数（硝化抑制剤入り） [kg-N <sub>2</sub> O-N/kg-N]
水稻	0.31 %	—
茶	2.9 %	2.1 % [=2.9% × (1-0.26)]
その他の作物	0.62 %	0.46 % [=0.62% × (1-0.26)]

(出典) Akiyama et.al. (2006 a)  
Akiyama et.al. (2006 b)  
Akiyama et.al. (2010)

■ 活動量

化学肥料施用総量は農林統計協会「ポケット肥料要覧」の「窒素質肥料需要量」を用いた。この値から森林への施用量を除いたものを農用地の土壌の化学肥料施用量として用いた（表 5-46）。さらに、上記排出係数を考慮し、作物別の化学肥料施用量を算出するため、各作物種の作付面積（表 5-53）に、各作物種の単位面積当たり化学肥料由来窒素施用量の我が国の調査結果を乗じて作物別の窒素施用量に相当する値を求め、作物別の施肥相当量に応じて化学肥料施用量を各作物別に配分した。



$$F_{SNi} = (F_T - F_{FRST}) \times \frac{(RA_i \times RF_i \times 10)}{\sum (RA_n \times RF_n \times 10)}$$

$F_{SNi}$	: 作物種 $i$ の農用地に投入された化学肥料施用量 [t-N]
$F_T$	: 化学肥料施用総量 [t-N]
$F_{FRST}$	: 森林への化学肥料施用量 [t-N]
$RA_i$	: 作物種 $i$ の作付面積 [ha]
$RF_i$	: 作物種 $i$ の単位面積当たり化学肥料施用量 [kg-N/10a]
$RA_n$	: 各作物種別作付面積 [ha]
$RF_n$	: 各作物種の単位面積当たり化学肥料施用量 [kg-N/10a]

作物別の肥料施用量については、2000年に行われた営農調査（鶴田（2001））により各作物別の施肥量が化学肥料、有機質肥料別に把握されている。専門家判断によると、水稻、茶を除く作物においては経年的な施肥量の変化が余りないと考えられることから、これらの作物については、鶴田（2001）による単位面積当たり化学肥料施用量のデータを全ての年に対して一律に適用した。

茶の施肥量については、自治体の策定する施肥基準等の影響を受け経年的に変化している。野中（2005）がまとめた1993、1998、2002年における茶畑に対する窒素施用量（化学肥料と有機質肥料由来窒素量の合計値）と鶴田（2001）における茶の化学肥料と有機質肥料の比を用いて、1993年、1998年、2002年それぞれの化学肥料施用量と有機質肥料施用量を推計した。また、推計した3ヵ年の施肥量を用いて1993年から2002年までは数値を内挿、1993年以前は1993年値を据え置き、2002年以降は2002年値を据え置きし、時系列データを作成した（表5-52参照）。

水稻の単位面積当たり化学肥料施用量については、「ポケット肥料要覧」により把握できる各年の施肥量データを用い、陸稲については、水稻の値で代用した。

硝化抑制剤入り化学肥料については、1996年より調査を開始した出荷量（製品ベース）（「化学肥料施用量（農地）」の内数）に関する農林水産省のデータを使用し、それらに含まれる窒素含有率は主要メーカー製品の平均値である13%を用いた。また、硝化抑制剤入り化学肥料は、水稻および飼肥料作物に対して施用される可能性がほとんどないため、水稻および飼肥料作物は施用対象から除いた。

表 5-49 化学肥料施用量 [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
化学肥料施用総量	611,955	527,517	487,406	471,190	350,135	409,590	387,201	396,783	409,918	394,629	372,339	374,879	374,879	374,879
化学肥料施用量（森林）	288	248	229	222	165	193	182	187	193	186	175	176	176	176
化学肥料施用量（農地）	611,667	527,269	487,177	470,968	349,970	409,397	387,019	396,596	409,725	394,443	372,164	374,703	374,703	374,703

（注）硝化抑制剤入り化学肥料を含む

（出典）化学肥料施用総量：「ポケット肥料要覧」

化学肥料施用量（森林）：林野庁調べをもとに算出

表 5-50 硝化抑制剤入り化学肥料の出荷量（窒素量ベース） [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
硝化抑制剤入り化学肥料出荷量（窒素ベース）	NO	NO	4,030	4,290	5,980	4,940	5,850	5,070	7,800	4,550	5,070	5,330	5,070	5,590

（出典）農林水産省調査：製品中の窒素含有率を13%として算出

表 5-51 作物種別単位面積当たり化学肥料施用量（水稻、茶以外）

作物種	施用量 [kg-N/10a]
野菜	21.27
果樹	14.70
ばれいしょ	12.70
豆類	3.10
飼肥料作物	10.00
かんしょ	6.20
麦	10.00
雑穀（そばを含む）	4.12
桑	16.20
工芸作物	22.90
たばこ	15.40

（出典）鶴田（2001）

表 5-52 単位面積当たり化学肥料施用量（水稻、茶） [kg-N/10a]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
化学肥料施用量（水稻）	9.65	8.71	7.34	6.62	5.80	5.95	5.93	6.04	6.10	5.97	5.85	5.85	5.85	5.85
化学肥料施用量（茶）	57.23	54.88	48.06	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76	44.76

（出典）水稻：「ポケット肥料要覧」 茶：野中（2005）、鶴田（2001）

表 5-53 作物種別作付面積 [kha]

作物種	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
野菜	620.1	564.4	524.9	476.3	468.7	465.4	460.4	457.9	453.4	452.1	448.9	444.1	441.7	437.3
水稻（子実用）	2,055.0	2,106.0	1,763.0	1,702.0	1,621.0	1,625.0	1,574.0	1,579.0	1,597.0	1,573.0	1,505.0	1,478.0	1,465.0	1,470.0
果樹	346.3	314.9	286.2	265.4	250.7	246.9	243.5	240.3	237.0	233.8	230.2	226.7	222.9	218.8
茶	58.5	53.7	50.4	48.7	47.3	46.8	46.2	45.9	45.4	44.8	44.0	43.1	42.4	41.5
ばれいしょ	115.8	104.4	94.6	86.9	83.1	82.5	81.0	81.2	79.7	78.3	77.4	77.2	77.2	76.5
豆類	256.6	155.5	191.8	193.9	197.5	189.0	186.2	180.2	178.5	181.0	187.6	187.7	187.9	185.4
飼肥料作物	1,096.0	1,013.0	1,026.0	1,030.0	1,008.0	1,012.0	1,030.0	1,029.0	1,012.0	1,019.0	1,072.0	1,082.0	1,084.9	1,068.6
かんしょ	60.6	49.4	43.4	40.8	40.5	39.7	38.9	38.8	38.6	38.0	36.6	36.0	35.6	35.7
麦	366.4	210.2	236.6	268.3	266.2	265.7	271.7	269.5	269.5	272.7	274.4	275.9	273.7	272.9
雑穀（そばを含む）	29.6	23.4	38.4	45.9	47.5	49.7	58.1	62.6	62.9	61.4	59.7	62.2	64.5	65.5
桑	59.5	26.3	5.9	3.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
工芸作物	142.9	124.5	116.3	110.3	106.4	104.8	101.9	100.2	98.5	97.8	98.8	99.3	100.3	98.2
たばこ	30.0	26.4	24.0	19.1	15.8	15.0	13.0	9.0	8.9	8.6	8.3	8.0	7.6	7.1
陸稲	18.9	11.6	7.1	4.5	3.0	2.9	2.4	2.1	1.7	1.4	1.2	0.9	0.8	0.8

（出典）ばれいしょ：「野菜生産出荷統計」、たばこ：日本たばこ産業株式会社資料、桑：農林水産省生産局調べ、それ以外の作物：「耕地及び作付面積統計」（ただし、「工芸作物」については茶、なたね、てんさい、さとうきびの合計から推計した面積からたばこの面積を差し引いた値である。2016年度値までの「野菜」については、ばれいしょの面積を差し引いた値である。また2017年度の野菜・果樹・豆類・飼肥料作物・雑穀については、作物分類合計の作付面積調査が廃止されたため、それらの作物分類に対象として含まれる作物の作付面積の合計から過去5年間のカバー率を算出して推計した。）

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、排出係数の出典である Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は31%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

## d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

なお、我が国の排出係数と IPCC ガイドラインのデフォルト値が大きく異なる理由については上記「排出係数」に記載している。

## e) 再計算

2015年以降の化学肥料及び2016年以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

## f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

## 5.5.1.2. 有機質窒素肥料 (3.D.a.2.)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地土壌への有機質肥料(畜産廃棄物由来およびその他有機質肥料)の施用に伴う N<sub>2</sub>O 排出の算定を行う。

## b) 方法論

## ■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4、p.11.9、Fig.11.2) に従い、Tier2 法で N<sub>2</sub>O 排出量の算定を行った。

$$E = \sum_i (N_{ONi} \times EF_{1i}) \times 44/28$$

$E$	: 農用地の土壌への有機質肥料の施用に伴う N <sub>2</sub> O 排出量 [kg-N <sub>2</sub> O]
$N_{ONi}$	: 作物種 $i$ の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量 [kg-N]
$EF_{1i}$	: 作物種 $i$ の有機質肥料を投入した場合の排出係数 [kg-N <sub>2</sub> O-N/kg-N]
$i$	: 作物種

## ■ 排出係数

化学肥料と有機質肥料の投入窒素量と N<sub>2</sub>O 排出量を調査したところ、化学肥料と有機質肥料で排出係数に有意差がなかったため、無機質窒素肥料の排出係数と同じ値を使用した。

## ■ 活動量

活動量(有機質肥料に含まれる総窒素量)については、2006年 IPCC ガイドラインに示された式 (Vol.4、p11.12、Equation 11.3) をもとに、下記の窒素量を対象とした。

$$N_{ON} = N_{AM} + N_{SEW} + N_{FU} + N_{COMPsub} + N_{OOA}$$

$N_{ON}$	: 農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量
$N_{AM}$	: 農用地土壌に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量
$N_{SEW}$	: 農用地土壌に施用される下水汚泥に含まれる窒素量
$N_{FU}$	: 農用地土壌に施用されるし尿に含まれる窒素量
$N_{COMPsub}$	: 農用地土壌に施用される堆肥副資材(稲わら、もみがら、麦わら)に含まれる窒素量

$N_{00A}$  : 農用地土壌に施用されるその他有機質肥料（魚かす、大豆粕、なたね油粕など）に含まれる窒素量

○ 農用地土壌に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{AM}$ )

農用地土壌に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{AM}$ ) は下記の式で示したように、家畜排せつ物中の総窒素量 ( $N_{Total-AW}$ ) から、放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{PRP}$ )、大気中に  $N_2O$  として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) ( $N_{N_2O}$ )、大気中に  $NH_3 + NO_x$  として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) ( $N_{NH_3+NO_x}$ )、「焼却」・「浄化」処理に含まれる窒素量 ( $N_{inc+pur}$ )、廃棄物として直接埋立処分される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{disposal}$ ) を除いた量を使用した。

$$N_{AM} = N_{Total-AW} - N_{PRP} - N_{N_2O} - N_{NH_3+NO_x} - N_{inc+pur} - N_{disposal}$$

$N_{AM}$  : 農用地に施用された家畜排せつ物中の窒素量 [kg-N]  
 $N_{Total-AW}$  : 家畜から排せつされた窒素総量 [kg-N]  
 $N_{PRP}$  : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]  
 $N_{N_2O}$  : 家畜排せつ物から  $N_2O$  として大気中に揮発した窒素量 (放牧家畜を除く) [kg-N]  
 $N_{NH_3+NO_x}$  : 家畜排せつ物から  $NH_3$  や  $NO_x$  として揮発した窒素量 (放牧家畜を除く) [kg- $NH_3-N+NO_x-N$ ]  
 $N_{inc+pur}$  : 「焼却」及び「浄化」処理された窒素量 [kg-N]  
 $N_{disposal}$  : 廃棄物として「直接最終処分」される家畜排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]

放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{PRP}$ )、大気中に  $N_2O$  として揮発する窒素量 (放牧家畜を除く) ( $N_{N_2O}$ )、「焼却」・「浄化」処理に含まれる窒素量 ( $N_{inc+pur}$ ) は「3.B.家畜排せつ物の管理」で計算された結果を用いた。

廃棄物として直接埋立処分される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{disposal}$ ) は、何らかの処理がされた後に埋め立てられる分 (以後、「処理後最終処分」と、特に何の処理も施されずにそのまま直接的に埋め立てられる分 (以後、「直接最終処分」) を含んでいる。しかし、「処理後最終処分」される家畜排せつ物量については極少量であり、また、どの処理区分で処理されているか不明であるため、「直接最終処分」に加えることとした。

直接最終処分された家畜排せつ物中の窒素量 ( $N_{disposal}$ ) は、次式のように算出した。

$\frac{\text{直接最終処分された家畜排せつ物中の窒素量 } (N_{disposal})}{\text{直接最終処分量と処理後最終処分量の合計値}} \times \text{家畜排せつ物中の平均窒素含有率}$
---

「直接最終処分量と処理後最終処分量の合計値」は環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用実態調査報告書」で示された値を用いた。「家畜排せつ物中の平均窒素含有率」は各家畜のふん尿中窒素量の合計値と各家畜のふん尿量の合計値から算定した。

なお、農用地土壌に施用されずに直接最終処分された家畜排せつ物は廃棄物分野の「7.2.1.管理処分場からの排出 (5.A.1.)」の算定に含まれている。

表 5-54 農用地土壌に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{AM}$ ) [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
ふん尿中の窒素総量 ( $N_{Total-AW}$ )	786,060	743,633	692,290	634,484	603,321	589,142	580,013	569,103	558,658	551,719	551,507	552,595	563,117	564,245
放牧家畜のふん尿中の窒素総量 ( $N_{PRP}$ )	12,987	12,836	11,935	11,162	11,072	10,709	10,721	10,505	10,390	9,996	10,278	10,237	10,399	10,568
大気中に $N_2O$ として排出される窒素量 (浄化・焼却以外) ( $N_{N2O}$ )	4,460	4,363	4,318	4,690	5,080	4,943	4,898	4,798	4,679	4,593	4,591	4,577	4,639	4,629
大気中に $NH_3$ 、 $NO_x$ として排出される窒素量 (放牧分を除く) ( $N_{NH3+NNOx}$ )	270,977	256,432	232,562	199,757	179,093	174,361	170,407	166,455	164,621	163,662	164,003	165,046	168,511	169,377
浄化・焼却によって消失する窒素量 ( $N_{inc+pur}$ )	77,554	67,389	66,526	78,933	90,246	90,096	88,956	88,922	86,773	85,687	84,707	84,961	87,580	87,746
埋立され消失する窒素量 ( $N_{disposal}$ )	317	301	272	248	315	235	239	278	285	293	280	288	280	280
農用地に施用される家畜排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{AM}$ )	419,764	402,311	376,677	339,692	317,514	308,799	304,792	298,144	291,909	287,489	287,648	287,486	291,708	291,645

○ 農用地土壌に施用された下水汚泥に含まれる窒素量 ( $N_{SEW}$ )

農用地土壌に施用される下水汚泥 ( $N_{SEW}$ ) は、「ポケット肥料要覧」に記載された汚泥肥料の流通量に日本下水道協会のデータから設定した窒素含有率を掛けることによって算出した。

○ 農用地土壌に施用された人間のし尿に含まれる窒素量 ( $N_{FU}$ )

し尿に含まれる窒素量 ( $N_{FU}$ ) は、環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」等から算出した人間のし尿由来の窒素量を用いた。

○ 農用地土壌に施用される堆肥副資材 (稲わら、もみがら、麦わら) に含まれる窒素量 ( $N_{COMPsub}$ )

堆肥副資材量については、稲わら、もみ殻、麦わらの用途別データ (都道府県において把握しているデータより算出) の「堆肥」、「畜舎敷料」の値を使用した。稲わら、もみ殻、麦わらの窒素含有率に関しては、後述の 5.5.1.4. 作物残渣で記述している値 (表 5-62) を用いた。

○ 農用地土壌に施用されたその他有機質肥料に含まれる窒素量 ( $N_{OOA}$ )

農用地土壌に施用されるその他有機質肥料 (魚かす、大豆粕、なたね油粕など) に含まれる窒素量 ( $N_{OOA}$ ) は、「ポケット肥料要覧」に記載された有機質肥料の流通量に「ポケット肥料要覧」から設定した窒素含有率を掛けることによって算出した。

表 5-55 有機質肥料 (汚泥肥料、その他有機質肥料) の流通量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
動物質肥料	384.1	389.4	341.0	262.7	271.2	268.3	259.8	302.6	298.3	268.2	300.6	310.0	285.4	285.4
魚かす	111.5	88.6	89.0	73.9	70.0	62.2	52.1	55.4	60.0	51.7	52.9	54.7	53.3	53.3
蒸製骨粉	113.1	134.2	112.8	11.4	21.3	16.7	17.6	19.4	16.2	18.5	20.0	22.3	20.0	20.0
その他の動物質肥料	159.5	166.6	139.2	177.5	179.9	189.4	190.1	227.7	222.1	198.1	227.7	233.0	212.1	212.1
植物質肥料	635.9	725.7	982.4	494.8	643.2	1,064.3	1,190.9	1,079.2	1,203.7	1,455.4	1,852.7	1,810.9	2,012.0	2,012.0
大豆油粕	3.5	4.7	28.9	1.1	36.1	209.5	138.5	134.4	167.7	265.0	477.0	494.5	491.3	491.3
なたね油粕	451.0	437.2	620.7	241.0	228.0	221.4	396.3	347.9	288.4	399.5	474.8	486.8	449.3	449.3
その他の植物質肥料	181.4	283.8	332.8	252.7	379.1	633.5	656.1	596.9	747.6	790.9	900.9	829.6	1,071.4	1,071.4
汚泥	787.3	935.2	817.7	1,287.4	1,295.0	1,395.6	1,361.5	1,329.3	1,355.5	1,292.9	1,395.7	1,351.7	1,377.8	1,377.8

(出典)「ポケット肥料要覧」

表 5-56 各有機質肥料の窒素含有率

有機質肥料	窒素含有割合
魚かす	8.0%
蒸製骨粉	4.1%
その他の動物質肥料	7.5%
大豆油粕	7.5%
なたね油粕	5.1%
その他の植物質肥料	4.6%
汚泥	2.7%

(出典) 汚泥以外：「ポケット肥料要覧」  
 汚泥：日本下水道協会データより設定

表 5-57 農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量 [t-N]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
家畜ふん尿由来 (N <sub>AM</sub> )	419,764	402,311	376,677	339,692	317,514	308,799	304,792	298,144	291,909	287,489	287,648	287,486	291,708	291,645
下水汚泥由来 (N <sub>SEW</sub> )	21,257	25,250	22,078	34,760	34,965	37,682	36,759	35,892	36,599	34,907	37,685	36,497	37,202	37,202
し尿由来 (N <sub>FI</sub> )	10,394	4,747	2,116	874	457	427	369	351	286	273	231	204	223	260
堆肥副資材由来 (N <sub>COMPsub</sub> )	18,316	15,514	11,485	11,217	9,270	8,864	8,443	8,803	8,879	7,700	6,816	6,774	6,480	6,494
その他有機質肥料由来 (N <sub>OOA</sub> )	57,128	60,790	71,314	43,685	51,743	76,006	79,927	77,593	83,796	96,378	123,560	122,844	130,034	130,034
合計 (農用地土壌に施用される有機質肥料に含まれる窒素量) (N <sub>ON</sub> )	526,859	508,611	483,670	430,229	413,949	431,779	430,289	420,784	421,469	426,747	455,940	453,804	465,647	465,635

○ 作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量の推計

作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量は、上記した農用地土壌に施用された有機質肥料に含まれる総窒素量 (N<sub>ON</sub>) に、作物種 *i* に施用されるべき窒素量が総窒素量 (N<sub>ON</sub>) に占める割合 (施肥量割合) を乗じて推計した。施肥量割合は、作物種 *i* の単位面積当たり有機質肥料由来窒素施用量と各作物 *i* の作付面積の積を、全作物種の積の総和で除して求めた。

$$N_{ONi} = N_{ON} \times \frac{(RA_i \times RF_i / 10)}{\sum (RA_n \times RF_n / 10)}$$

- N<sub>ONi</sub> : 作物種 *i* の農用地に投入された有機質肥料に含まれる窒素量 [t-N]
- N<sub>ON</sub> : 農用地土壌に施用された有機質肥料に含まれる総窒素量 [t-N]
- RA<sub>*i*</sub> : 作物種 *i* の作付面積 [ha]
- RF<sub>*i*</sub> : 作物種 *i* の単位面積当たり有機質肥料施用量 [kg-N/10a]
- RA<sub>*n*</sub> : 各作物種別作付面積 [ha]
- RF<sub>*n*</sub> : 各作物種の単位面積当たり有機質肥料施用量 [kg-N/10a]

茶の単位面積当たりの有機質肥料に含まれる窒素施用量に関して、化学肥料同様に、野中 (2005) がまとめた 1993、1998、2002 年における茶畑に対する窒素施用量 (化学肥料、有機質肥料の合計値) と鶴田 (2001) における茶の化学肥料と有機質肥料の比を用いて、有機質肥料別の施肥量を推計し、時系列データを作成した (表 5-58 参照)。

茶以外の作物種別の単位面積当たりの有機質肥料施用量は、化学肥料と同様に鶴田 (2001) のデータを使用した。陸稲については、水稻の値で代用した。なお、作物種別の作付面積は化学肥料の算定に用いたものと同様である。



表 5-58 単位面積当たり有機質肥料施用量（茶）[kg-N/10a]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
有機質肥料施用量（茶）	20.77	19.92	17.44	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24	16.24

（出典）野中（2005）、鶴田（2001）

表 5-59 作物種別単位面積当たり有機質肥料として施用された窒素量（茶以外）

作物種	施用量[kg-N/10a]
野菜	23.62
水稻	3.2
果樹	10.90
ばれいしょ	7.94
豆類	6.24
飼肥料作物	10.00
かんしょ	8.85
麦	5.70
雑穀（そばを含む）	1.81
桑	0.00
工芸作物	3.96
たばこ	11.41

（出典）鶴田（2001）

#### c) 不確実性と時系列の一貫性

##### ■ 不確実性

排出係数の不確実性は、Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性に関して、家畜ふん尿由来は、「畜産統計」に示されたブロイラーの頭数の標準誤差（9%）を採用し、それ以外は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は32%と評価された。

##### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

#### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

#### e) 再計算

2015年以降の有機質肥料の統計値が改訂され、全年度にわたり、肉用牛と豚の排せつ物量に含まれる窒素量の算定方法が改訂されたことにより、全年度の排出量が変更された。再計算の影響の程度については10章参照。

#### f) 今後の改善計画及び課題

現在、無機質窒素（化学肥料）・有機質肥料について同一の排出係数を使用していることから、別々に設定できるよう検討している。

## 5.5.1.3. 放牧家畜の排せつ物 (3.D.a.3.)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、放牧家畜の排せつ物からの N<sub>2</sub>O 排出の算定を行う。

## b) 方法論

放牧家畜の排せつ物からの CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O 排出量の算定方法は「5.3.1.節 家畜排せつ物の管理」の「牛、豚、家禽類（採卵鶏、ブロイラー）(3.B.1., 3.B.3., 3.B.4.)」および「水牛、めん羊、山羊、馬、うさぎ、ミンク (3.B.2., 3.B.4.-)」でまとめて記述している。

## 5.5.1.4. 作物残渣 (3.D.a.4.)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、作物残渣の農用地の土壌へのすき込みに伴う N<sub>2</sub>O 排出の算定を行う。

## b) 方法論

## ■ 算定方法

N<sub>2</sub>O 排出量は 2006 年 IPCC ガイドラインをもとにして算出している。排出係数には 2006 年ガイドラインのデフォルト値を用いた。ただし、活動量の算定において、2006 年 IPCC ガイドラインの方法よりも正確に排出量を算定できると考えられるいくつかの作物（稲、茶、野菜類、さとうきび、てんさい）についてはわが国独自の方法を用いた。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

<i>E</i>	: N <sub>2</sub> O 排出量 [kg-N <sub>2</sub> O]
<i>EF</i>	: 残渣のすき込みの N <sub>2</sub> O 排出係数 [kg-N <sub>2</sub> O-N/kg-N]
<i>A</i>	: 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [kg-N]

## ■ 排出係数

0.01[kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-N] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

## ■ 活動量

## 【稲】

地上部の稲の作物残渣すき込み量は、都道府県において把握しているデータより算出した稲わら・もみがらの残渣すき込み量のデータを使用した。作物残渣中の窒素量は、このデータに伊達昇 (1988) から設定した「作物残渣当たりの窒素量」を乗じ推計した。また、地下部の計算には生産量、生産量に対する乾物割合、生産量に対する地下部残渣割合、地下部の窒素含有率から推計した。生産量に対する地下部残渣割合 (*Frac<sub>BGR-P</sub>*) は小川、他 (1988) で示されている 27% を用いた。生産量に対する乾物割合 (*DRY*) は 2006 年 IPCC ガイドラインで示されているデフォルト値の 0.89 を用いた。

$$A_{Rice} = Residue \times N_{AG} + P \times DRY \times Frac_{BGR-P} \times N_{BG}$$

<i>A<sub>Rice</sub></i>	: 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [tN] (稲わら・もみ殻)
<i>Residue</i>	: 稲の作物残渣すき込み量 (稲わら・もみ殻) [t]
<i>N<sub>AG</sub></i>	: 稲の地上部残渣の窒素含有率 [kg-N/kg]
<i>P</i>	: 米の生産量 [t]
<i>DRY</i>	: 生産物に対する乾物割合 [%]

$Frac_{BGR-P}$  : 生産量に対する地下部残渣割合 [%]  
 $N_{BG}$  : 稲の地下部残渣の窒素含有率 [kg-N/kg]

【茶】

茶に関しては、毎年土中に還る残渣として「落葉」分と「秋整枝」分を対象とし、加えて数年に一度土中に還る残渣として、5年に1度程度実施される「中切り」（地面から約30~50cm上の部分を剪枝）分を対象とした。「中切り」に関しては、茶の総面積のうち1/5で毎年実施され、5年ですべての茶園の更新が行われると仮定した。「落葉」、「秋整枝」、「中切り」の単位栽培面積当たり残渣中窒素量に栽培面積を乗じ、残渣中の窒素量を推計した。栽培面積は農林水産省「耕地及び作付面積統計」のデータを用いた。

$$A_{Tea} = (A_{AP} + A_{LF} + A_{MP} / 5) \times 10 \times Area$$

$A_{Tea}$  : 土壌にすき込まれた窒素量 [kg-N] (茶)  
 $A_{AP}$  : 秋整枝による残渣量 [kg-N/10a]  
 $A_{LF}$  : 落葉による残渣量 [kg-N/10a]  
 $A_{MP}$  : 中切りによる残渣量 [kg-N/10a]  
 $Area$  : 茶作付面積 [ha]

表 5-60 剪枝された残渣部の窒素含有量

剪枝の種類		窒素含有量 [kg-N/10a]	出典
秋整枝	毎年	7.7	保科他 (1982)、木下他 (2005)、橘他 (1996)
中切り	5年に一度	19.4	太田他 (1996)
落葉	毎年	11.5	保科他 (1982)

【野菜類、さとうきび、てんさい】

各作物の農地にすき込まれた作物残渣に含まれる窒素量は、松本 (2000) から設定した「作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量」に、年間作物収穫量（「作物統計」または「野菜出荷統計」）を乗じ、それに持ち出し割合、野焼きされる割合（燃焼係数を考慮後）を除いた割合を乗じて推計した。

なお、「作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量」について、さとうきびには鹿児島県農業総合開発センター提供値を、てんさい、だいこん、たまねぎには北海道農政部「北海道施肥ガイド2010」のデータを、はくさい、レタスには尾和 (1996) のデータを用いた。

「作物生産量に対する残渣中に含まれる窒素含有率」のデータがない作物については、種類が近い作物の数値を用いた。また全ての年度について同一の数値を使用した。

$$A_{Vegetable} = P \times (1 - Frac_{Remove} - Frac_{burnt} \times CF) \times N_R$$

$A_{Vegetable}$  : 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [t-N] (野菜類、さとうきび、てんさい)  
 $P$  : 生産量 [t]  
 $Frac_{Remove}$  : 作物 T の持ち出し割合 [%]  
 $Frac_{burnt}$  : 作物 T の焼却割合 (面積) [%]  
 $CF$  : 燃焼係数  
 $N_R$  : 残渣の窒素含有率 (作物生産量当たりの残渣中に含まれる窒素量) [kg-N/kg]

表 5-61 主な作物の地上部残渣の持ち出し割合 ( $Frac_{Remove}$ )、残渣の焼却割合 ( $Frac_{burnt}$ )、燃焼係数 ( $CF$ )、地上部バイオマスに対する地下部残渣の割合 ( $R_{BG-BIO}$ )

作物	地上部残渣の持ち出し割合 ( $Frac_{Remove}$ )	残渣の焼却割合 ( $Frac_{burnt}$ )	燃焼係数 ( $CF$ )	地下部残渣割合 ( $R_{BG-BIO}$ )
野菜類	47 %	7 %	0.80 <sup>4)</sup>	-
てんさい	47 % <sup>1)</sup>	7 % <sup>1)</sup>	0.80 <sup>4)</sup>	-
さとうきび	47 % <sup>1)</sup>	7 % <sup>1)</sup>	0.80 <sup>4)</sup>	-
飼肥料作物 (緑肥用)	0 % <sup>2)</sup>	0 % <sup>2)</sup>	-	牧草 : 0.80
飼肥料作物 (飼料用)	100 % <sup>3)</sup>	0 % <sup>3)</sup>	-	ソルガム : 0.24 <sup>9)</sup>
麦類 (小麦、大麦、ライ麦、オート麦)	表 5-63 参照	表 5-63 参照	0.90 <sup>5)</sup>	小麦 : 0.24 大麦 : 0.22 ライ麦 : 0.25 <sup>10)</sup> オート麦 : 0.25
豆類	13 %	12 %	0.80 <sup>4)</sup>	0.19 <sup>6)</sup>
とうもろこし、いも類、その他作物 (そば、たばこ等)	47 % <sup>1)</sup>	7 % <sup>1)</sup>	0.80 <sup>4)</sup>	とうもろこし : 0.22 いも類 : 0.20 <sup>7)</sup> その他作物 : 0.22 <sup>8)</sup>

(出典) 麦類以外の  $Frac_{Remove}$ 、 $Frac_{burnt}$  : 「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

$CF$ 、 $R_{BG-BIO}$  : 2006年 IPCC ガイドライン

(注)

- 1) 野菜の値で代替、2) すべて土壌にすき込まれると設定、
- 3) 地上部すべてが飼料用として持ち出されると設定、4) とうもろこし・さとうきびの値、
- 5) 小麦の値、6) 大豆の値、7) ばれいしょの値、8) 穀物類で代用、
- 9) とうもろこしとオート麦の平均値、10) オート麦の値で代用

表 5-62 主な作物の地上部残渣の窒素含有率 ( $N_{AG}$ )、地下部残渣の窒素含有率 ( $N_{BG}$ )

作物	地上部残渣の窒素含有率 ( $N_{AG}$ )	地下部残渣の窒素含有率 ( $N_{BG}$ )	備考
稲 (地上部)	稲わら : 0.541% <sup>a)</sup> もみ殻 : 0.423% <sup>a)</sup>	-	現物重比
稲 (地下部)	-	0.9% <sup>2)3)</sup>	乾物重比
野菜類	だいこん : 0.093% <sup>b)c)</sup> はくさい : 0.071% <sup>c)</sup> キャベツ : 0.183% <sup>e)</sup> レタス : 0.164% <sup>c)</sup> たまねぎ : 0.019% <sup>b)c)</sup>		現物重比
てんさい	0.095% <sup>b)c)</sup>		
さとうきび	0.548% <sup>d)</sup>		
飼肥料作物	牧草 : 1.5% <sup>2)</sup> ソルガム : 0.7% <sup>2)</sup>	牧草 : 1.2% <sup>2)</sup> ソルガム : 0.6% <sup>2)</sup>	
小麦	0.43% <sup>e)</sup>	0.9% <sup>2)</sup>	
大麦	二条大麦 : 2.14% <sup>e)</sup> 六条大麦 : 0.31% <sup>e)</sup>	1.4% <sup>2)</sup>	乾物重比
ライ麦	0.50% <sup>2)</sup>	1.1% <sup>2)</sup>	
オート麦	0.70% <sup>2)</sup>	0.8% <sup>2)</sup>	
とうもろこし	1.64% <sup>e)</sup>	0.7% <sup>2)</sup>	
大豆	0.65% <sup>e)</sup>	0.8% <sup>2)</sup>	
小豆	0.84% <sup>e)</sup>	1.0% <sup>2)1)</sup>	
ばれいしょ	2.42% <sup>e)</sup>	1.4% <sup>2)2)</sup>	

(出典)

- a): 伊達 (1988)
- b): 北海道農政部 (2010)
- c): 尾和 (1996)
- d): 鹿児島県農業総合開発センター資料

- e): 松本 (2000)
- z): 2006年 IPCC ガイドライン  
(注)
- 1): Dry bean で代用
- 2): ばれいしょの値で代用
- 3): 小麦の値で代用

**【飼肥料作物、麦類、とうもろこし、豆類、いも類、その他の作物（そば、たばこ等）】**

活動量は、2006年 IPCC ガイドラインに従い、下記の式で示した方法で算出した。なお、パラメータに関しては表 5-62～表 5-63 に示した値を用いた。麦類の野焼きされる割合および残渣の持ち出し割合については、農林水産省が調査した麦稈の処理方法別作付面積から表 5-60 に示すように設定した。なお、2006年度以前は調査データがないため、2007年度値を適用している。更新割合 ( $Frac_{Renew}$ ) は、飼肥料作物（飼料用）のみ、各種調査結果を踏まえた専門家判断により 3%と設定しているが、それ以外の作物は 100%更新されるとして計算している。

$$A = \sum_T \left\{ \left[ AG_{DM(T)} \times N_{AG(T)} \times (1 - Frac_{Remove(T)}) + (AG_{DM(T)} \times 1000 + Crop_{(T)}) \times R_{BG-BIO(T)} \times N_{BG(T)} \right] \times \frac{(Area_{(T)} - Area_{burnt(T)} \times CF) \times Frac_{Renew(T)}}{Area_{(T)}} \right\}$$

$$Area_{burnt(T)} = Area_{(T)} \times Frac_{burnt(T)}$$

- A : 土壌にすき込まれる残渣由来の窒素量 [t-N]
- $Area_{(T)}$  : 作物 T の作付面積 [ha]
- $Area_{burnt(T)}$  : 作物 T の焼却面積 [ha]
- CF : 燃焼係数
- $Frac_{Renew(T)}$  : 作物 T の更新割合 [%]
- $AG_{DM(T)}$  : 作物 T の地上部残渣の乾物重量 [Mg/ha]
- $N_{AG(T)}$  : 作物 T の地上部残渣の窒素含有率 [%]
- $Frac_{Remove(T)}$  : 作物 T の持ち出し割合 [%]
- $Crop_{(T)}$  : 作物 T の生産物の乾物重量 [kg/ha]
- $R_{BG-BIO(T)}$  : 作物 T の地上部バイオマスに対する地下部残渣の割合
- $N_{BG(T)}$  : 作物 T の地下部残渣の窒素含有率 [%]
- $Frac_{burnt(T)}$  : 作物 T の焼却割合 [%]

表 5-63 麦類の残渣持ち出し割合、焼却割合 [%]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
残渣の持ち出し割合	32.1	32.1	32.1	32.1	35.9	37.8	39.8	40.2	41.0	41.0	37.9	40.2	38.5	39.5
焼却割合	13.5	13.5	13.5	13.5	11.6	10.6	9.5	9.2	8.8	8.3	8.0	7.7	7.7	6.9

(注) 都道府県において把握しているデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (-70%~+200%) を採用した。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」で示された水田面積の標準誤差 1% で代替した。その結果、排出量の不確実性は、-70%~+200%と評価された。

■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

## d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

2012年度の算定方法検討会農業分科会において、稲の窒素含有率の精査が実施された。その結果、稲わらともみがらの窒素含有率を分け、日本各地の数値の中で中間的な数値であり、日本全体の値として使用するのが最も適切であると考えられる伊達（1988）の値を用いることとした。

## e) 再計算

稲わら・もみがらの残渣すき込み量のデータが更新されたので、2017年度の排出量が変更された。再計算の影響の程度については10章参照。

## f) 今後の改善計画及び課題

排出係数について我が国独自の排出係数が使用できるよう検討している。

5.5.1.5. 土壌有機物中の炭素の消失により無機化された窒素からの N<sub>2</sub>O 排出 (3.D.a.5.)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、鈹質土壌における土壌有機物中の有機物が酸化され炭素が失われる際に無機化された窒素由来の N<sub>2</sub>O の算定を行う。

## b) 方法論

## ■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインの算定方法を使用する場合、鈹質土壌有機物中の炭素消失量(活動量の一部)が把握できない。そのため、鈹質土壌の耕地面積と面積あたりの N<sub>2</sub>O 排出量(農地のバックグラウンドからの N<sub>2</sub>O 排出量)を用いたわが国独自の方法で算定を行った。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

<i>E</i>	: 鈹質土壌における無機化された窒素由来の N <sub>2</sub> O 排出量 [kg-N <sub>2</sub> O]
<i>EF</i>	: 鈹質土壌 1ha あたりの無機化された窒素由来の N <sub>2</sub> O 排出量[kg-N <sub>2</sub> O-N/ha]
<i>A</i>	: 鈹質土壌の耕地面積 [ha]

## ■ 排出係数

5.5.1.1 無機質窒素肥料 (3.D.a.1.) で使用した論文の Akiyama et al. (2006) で示されているバックグラウンドの N<sub>2</sub>O 排出係数である 0.65 kgN<sub>2</sub>O-N/ha をベースとし、農地への大気沈降と作物残さから発生する N<sub>2</sub>O 排出量を控除した。

国内の研究事例をもとに農地に沈降する NH<sub>3</sub>+NO<sub>x</sub> は 10 kgN/ha と判断した。さらに、作物残渣による面積当たりの窒素のすき込み量は上記「5.5.1.4. 作物残渣 (3.D.a.4.)」の値から 32 kgN/ha を用いた。その農地への大気沈降と作物残渣のすき込み量から発生する面積当たりの N<sub>2</sub>O 排出量 0.10 kgN<sub>2</sub>O-N/ha+0.32 kgN<sub>2</sub>O-N/ha (排出係数は大気沈降の 1% および作物残渣の 1%) をダブルカウント分として控除した。補正後の排出係数である 0.23 (=0.65 -0.10 -0.32) kgN<sub>2</sub>O-N/ha を用いた。



## ■ 活動量

鉱質土壌の面積は、「耕地及び作付面積統計」から把握した水田及び普通畑の作付面積から我が国の水田及び普通畑における有機質土壌（泥炭土及び黒泥土）面積を減じることにより設定する。また、鉱質土壌のうち転用された水田・畑地については、土地利用、土地利用変化及び林業分野で計上する。詳細については土地利用、土地利用変化及び林業分野の算定（後述 6.6.1 b) 2)の「活動量」の項目）を参照されたい。

表 5-64 農業分野で対象となる鉱質土壌面積 [kha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
対象となる水田	2,612	2,549	2,469	2,386	2,334	2,325	2,303	2,295	2,288	2,279	2,268	2,252	2,236	2,219
対象となる畑地	1,162	1,117	1,095	1,112	1,127	1,131	1,128	1,129	1,126	1,122	1,117	1,115	1,107	1,101

### c) 不確実性と時系列の一貫性

#### ■ 不確実性

排出係数の不確実性は、Akiyama et al. (2006)に示されている不確実性（31%）を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」で示された水田面積の標準誤差 1%を用いた。その結果、排出量の不確実性は、31%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

### e) 再計算

LULUCF 分野における土地利用の転用に伴う鉱質土壌面積の算定方法が変更されたことにより、全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10章参照。

### f) 今後の改善計画及び課題

Akiyama et al. (2006) の排出係数における N<sub>2</sub>O 排出量のダブルカウント分の控除方法については、引き続き精緻化を図っていく。

#### 5.5.1.6. 有機質土壌の耕起 (3.D.a.6.)

##### a) 排出源カテゴリーの説明

我が国では、北海道を中心に有機質土壌が存在している。本カテゴリーでは「黒泥土」と「泥炭土」の2種類の土壌区分を有機質土壌として取り扱っている。我が国では有機質土壌における農地造成は 1970年代までにはほぼ終了しており、一般的に客土が行われた土地が耕作に利用されている。

##### b) 方法論

#### ■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインに従い、耕起された有機質土壌の水田面積、普通畑面積及び草地面積にそれぞれの排出係数を乗じて有機質土壌の耕起による N<sub>2</sub>O 排出量を算定する。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E : 有機質土壌の耕起に伴う N<sub>2</sub>O 排出量 [kg-N<sub>2</sub>O]
- EF : 有機質土壌の耕起の際の N<sub>2</sub>O 排出係数 [kg-N<sub>2</sub>O-N/ha]
- A : 耕起された有機質土壌の面積 [ha]

■ 排出係数

有機質土壌の水田耕作においては、畑作に比べN<sub>2</sub>O排出量が低くなることが知られている。我が国では北海道の有機質土壌耕作地で行われたN<sub>2</sub>O排出の観測事例（永田他（2006）が存在するが、窒素施用分の排出も含めた観測結果であることから、施肥による排出分（上記表5-45で示した排出係数（0.31% [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-N]）を用いて算出）を控除して我が国独自の排出係数0.30 [kg-N<sub>2</sub>O-N/ha/年]を設定した。

有機質土壌における畑作に関しても若干の観測事例（永田他（2006）、永田他（2009））が存在するが、2006年IPCCガイドラインに示された温帯におけるデフォルト値8[kg-N<sub>2</sub>O-N/ha/年]と大きな違いはないことから、デフォルト値を利用する。草地についても、同じデフォルト値(8 [kg-N<sub>2</sub>O-N/ha/年])を使用する。

■ 活動量

有機質土壌の面積は、1992年、2001年時点の水田と普通畑、牧草地における有機質土壌面積に対し、他の土地利用から転用された水田と普通畑、牧草地における有機質土壌面積の加算、水田と普通畑、牧草地から他の土地利用に転用した有機質土壌面積の減算、を毎年実施することで、時系列としての有機質土壌面積を求めた。

耕起された有機質土壌の面積は、農地の内の水田と普通畑における有機質土壌のすべてと更新した牧草地の有機質土壌面積とし、樹園地、更新されていない牧草地、採草放牧地、原野の面積を含んでいない。これは、樹園地、採草放牧地及び原野は、耕起されないためである。（6.7.1.転用のない草地）

牧草地の更新とは、再耕転と新しい種まきを伴った、数年に一度行われる牧草地管理の作業である。毎年の牧草地の有機質土壌の耕起面積は牧草地の更新割合と当該地域の牧草地の有機質土壌面積を乗じて算出した。牧草地の更新割合は、波多野（2017）の調査結果を使用した。波多野の結果は、2006年から2015年に渡り、北海道と他の都府県の2つに地域を区分した更新割合からなる。2005年度以前と2016年度以降については、2006年度～2010年度の平均値（北海道：3.0%、都府県1.3%）を使用した。

表 5-65 牧草地の更新割合

年度	2005年度以前	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016年度以降
北海道	3.0%	2.5%	2.8%	3.0%	3.7%	2.9%	3.5%	3.6%	3.3%	3.9%	4.1%	3.0%
都府県	1.3%	1.0%	1.2%	1.0%	1.4%	2.1%	3.8%	15.7%	9.6%	5.2%	3.5%	1.3%

（出典）波多野（2017）

表 5-66 農業分野で対象となる有機質土壌面積 [kha]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
対象となる水田	161.9	161.3	160.6	159.9	159.7	159.6	159.5	159.7	160.0	160.2	160.2	160.2	160.4	160.7
対象となる畑地	24.7	24.4	24.2	24.0	24.0	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	23.9	24.0	24.2
対象となる牧草地（北海道）	1.2	1.2	1.2	1.2	1.5	1.2	1.4	1.5	1.3	1.6	1.7	1.2	1.2	1.2
対象となる牧草地（都府県）	0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.006	0.010	0.043	0.026	0.014	0.009	0.004	0.003	0.003

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年IPCCガイドラインで示されている不確実性(-75%～+200%)

を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に示された水田面積の標準誤差(1%)を採用した。その結果、排出量の不確実性は-75%~+200%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

#### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

我が国独自の有機質土壌の水田の排出係数 0.30 [kg-N<sub>2</sub>O-N/ha/年]は、北海道の泥炭土の水田で行われた N<sub>2</sub>O 排出の実測値(永田(2006))を基にして設定している。泥炭土の水田からの N<sub>2</sub>O は 8つの観測点で測定され、排出量実測値は-0.28~1.27 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]であった。永田が行った観測では施肥が行なわれているため、排出係数設定の際には、施肥に伴う排出量を控除している。水田への施肥に伴う N<sub>2</sub>O の排出推測値は 0.11~0.29 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]であり、泥炭土の水田における N<sub>2</sub>O の排出係数は 0.30 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]となった。

また、永田は、同時に泥炭土の畑地でも N<sub>2</sub>O 排出の観測を行っている。畑地での測定は9つの観測点で実施され、排出量実測値は 2.87~13.60 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]の範囲に有った。施肥に伴う N<sub>2</sub>O 排出量は、0.17~2.38 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]であり、N<sub>2</sub>O の排出実測値から施肥に伴う N<sub>2</sub>O の排出推測値を控除した泥炭土の畑地における N<sub>2</sub>O の排出係数は 7.42 [kgN<sub>2</sub>O-N/ha/年]となった。この値は、デフォルトの排出係数 8 [kg N<sub>2</sub>O-N/ha/年] (2006 IPCC ガイドライン, Volume 11, 表 11.1)と同程度である。永田(2006)は、有機質土壌においても、灌漑水田と畑地では N<sub>2</sub>O の排出量に明確な差がある事を示している。

#### e) 再計算

LULUCF 分野における土地利用の転用に伴う有機質土壌面積の算定方法が変更されたことにより、全年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10章参照。

#### f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

### 5.5.2. 間接排出 (3.D.b.)

農用地土壌へ施用された無機質肥料および有機質肥料、放牧家畜のふん尿から揮発したアンモニアなどの窒素化合物が乱流拡散、分子拡散、静電力効果、化学反応、植物呼吸、降雨洗浄などの作用によって大気から土壌に沈着して微生物活動を受けて N<sub>2</sub>O が発生する。

農用地土壌へ施用された無機質肥料、有機質肥料などの窒素が硝酸として溶脱・流出したことから、微生物の作用により N<sub>2</sub>O が発生する。

#### 5.5.2.1. 大気沈降 (3.D.b.1.)

##### a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub> として揮散した窒素化合物による大気沈降に伴い発生した N<sub>2</sub>O の排出量の算定、報告を行う。

b) 方法論

■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー (Vol.4, Page 11.20, Fig.11.3) に従い、N<sub>2</sub>O 排出量の算定を行った。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E* : 大気沈降による N<sub>2</sub>O 排出量 [kg N<sub>2</sub>O]
- EF* : 大気沈降による N<sub>2</sub>O 排出量に関する排出係数 [kg-N<sub>2</sub>O-N/ kg-NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N volatilized]
- A* : 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 [kg-NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N]

■ 排出係数

0.01 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N volatilized] (デフォルト値、2006年 IPCC ガイドライン Vol4, Table11.3)

■ 活動量

活動量は下記の式で示したように、無機質窒素肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量で構成されている。なお、家畜排せつ物処理過程で NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量は 3.B.5.で報告している。

$$A = N_{FERT} \times Frac_{GASF} + N_{ON} \times Frac_{GASM3} + N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$$

- A* : 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 [kg-NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N]
- N<sub>FERT</sub>* : 無機質窒素施用量 [kg-N]
- Frac<sub>GASF</sub>* : 無機質窒素肥料から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発する割合 [kg-NH<sub>3</sub>-N + NO<sub>x</sub>-N/kg-N]
- N<sub>ON</sub>* : 農用地に施用された有機質肥料由来肥料中の窒素量 [kg-N]
- Frac<sub>GASM3</sub>* : 農用地に施用された有機質肥料中の窒素のうち NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発する割合 [kg-NH<sub>3</sub>-N + NO<sub>x</sub>-N/kg-N]
- N<sub>PRP</sub>* : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]
- Frac<sub>GASM4</sub>* : 家畜排せつ物の処理の際に家畜排せつ物から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発する割合 [kg-NH<sub>3</sub>-N + NO<sub>x</sub>-N/kg-N]

○ 農用地土壤に施用された無機質窒素肥料から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 (*N<sub>FERT</sub>* × *Frac<sub>GASF</sub>*)

窒素施用量 (*N<sub>FERT</sub>*) は無機質窒素肥料 (3.D.a.1.) で算出した「化学肥料施用量 (表 5-49)」の内「化学肥料施用量 (農地)」の値を用い、揮散割合 (*Frac<sub>GASF</sub>*) は、下記の表 5-67 に示した 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値を用いた。

表 5-67 無機質肥料及び有機質肥料中の窒素から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発する割合

	値	単位
<i>Frac<sub>GASF</sub></i>	0.10	kg-NH <sub>3</sub> -N + NO <sub>x</sub> -N/kg of synthetic fertilizer nitrogen applied
<i>Frac<sub>GASM</sub></i>	0.20	kg-NH <sub>3</sub> -N + NO <sub>x</sub> -N/kg of nitrogen excreted by livestock

(出典) 2006年 IPCC ガイドライン Vol.4 Table11.3

○ 農用地土壤に施用された有機質肥料から NH<sub>3</sub>や NO<sub>x</sub>として揮発した窒素量 (*N<sub>ON</sub>* × *Frac<sub>GASM3</sub>*)

農用地土壤に施用された家畜排せつ物に含まれる窒素量 (*N<sub>ON</sub>*) は有機質窒素肥料 (3.D.a.2.) で記述した値を用いた。NH<sub>3</sub>+NO<sub>x</sub> 揮散割合 (*Frac<sub>GASM3</sub>*) は上記の表 5-67 に示した 2006年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 (*Frac<sub>GASM</sub>* = 0.20) を用いた。

○ 放牧家畜の排せつ物から NH<sub>3</sub> や NO<sub>x</sub> として揮発した窒素量 ( $N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$ )

放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 ( $N_{PRP}$ ) は、3.B で計算された値を用いた。NH<sub>3</sub>+NO<sub>x</sub> 揮発割合 ( $Frac_{GASM4}$ ) については、上記の表 5-67 に示した 2006 年 IPCC ガイドラインのデフォルト値 ( $Frac_{GASM} = 0.20$ ) を用いた。

表 5-68 無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿から  
NH<sub>3</sub> や NO<sub>x</sub> として揮発した窒素量 [t (NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N)]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無機質肥料由来 ( $N_{FERT} \times Frac_{GASF}$ )	61,167	52,727	48,718	47,097	34,997	40,940	38,702	39,660	40,973	39,444	37,216	37,470	37,470	37,470
有機質肥料由来 ( $N_{ON} \times Frac_{GASM3}$ )	105,372	101,722	96,734	86,046	82,790	86,356	86,058	84,157	84,294	85,349	91,188	90,761	93,129	93,127
放牧家畜由来 ( $N_{PRP} \times Frac_{GASM4}$ )	2,597	2,567	2,387	2,232	2,214	2,142	2,144	2,101	2,078	1,999	2,056	2,047	2,080	2,114
合計 (NH <sub>3</sub> +NO <sub>x</sub> として 揮散した窒素量) (A)	169,136	157,016	147,839	135,375	120,001	129,437	126,904	125,917	127,344	126,793	130,460	130,278	132,679	132,711

## c) 不確実性と時系列の一貫性

## ■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値 (-106%~+447%) を用いた。活動量の不確実性は、家畜の中で最も大きいブロイラーの値 (9%) で代替した。その結果、排出量の不確実性は-106%~+447%と評価された。

## ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

## d) QA/QC と検証

2006 年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1 章に詳述している。

## e) 再計算

2015 年度以降の化学肥料 (硝化抑制剤含まない) 統計値と、2016 年度以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が更新された。また、肉用牛と豚の排せつ物に含まれる窒素量の算出方法が改訂された。従って、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

## f) 今後の改善計画及び課題

排出係数や投入した窒素の揮発率などについて、我が国独自の数値が設定出来るよう、検討している。

## 5.5.2.2. 窒素溶脱・流出 (3.D.b.2.)

## a) 排出源カテゴリーの説明

本カテゴリーでは、農用地の土壌からの窒素溶脱・流出に伴う N<sub>2</sub>O 排出の算定を行う。



b) 方法論

■ 算定方法

N<sub>2</sub>O 排出量は、2006 年 IPCC ガイドラインのデシジョンツリー(Vol. 4, Page 11.20, Fig11.3)に従い、デフォルトの排出係数に、溶脱・流出した窒素量を乗じて算定を行なった。

$$E = EF \times A \times 44/28$$

- E : 窒素溶脱・流出に伴う N<sub>2</sub>O 排出量 [kg-N<sub>2</sub>O]
- EF : 窒素の溶脱及び流出に伴う排出係数 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-N]
- A : 無機質肥料、有機質肥料などから溶脱・流出した窒素量 [kg-N]

■ 排出係数

0.0075 [kg-N<sub>2</sub>O-N/kg-N] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

活動量は下記の式で示したように、無機質肥料、有機質肥料、放牧家畜のふん尿、作物残さ、炭素消失による無機化からそれぞれ溶脱・流出する窒素量で構成されている。上述の 3.D.a.1～3.D.a.5.でそれぞれ算定した窒素量に、2006 年 IPCC ガイドラインに示されたデフォルトの溶脱・流出割合(0.30 [kg-N/kg-N])を乗じて算定した。

$$A = (N_{FERT} + N_{ON} + N_{PRP} + N_{CR} + N_{SOM}) \times Frac_{LEACH}$$

- A : 無機質窒素肥料、有機質肥料などから流出した窒素量 [kg-N]
- N<sub>FERT</sub> : 農用地に施用された無機質窒素肥料に含まれる窒素量 [kg-N]
- N<sub>ON</sub> : 農用地に施用された有機質肥料由来肥料中の窒素量 [kg-N]
- N<sub>PRP</sub> : 放牧家畜の排せつ物に含まれる窒素量 [kg-N]
- N<sub>CR</sub> : 作物残さのすき込みによる窒素投入量 [kg-N]
- N<sub>SOM</sub> : 鉦質土壌の炭素消失時に無機化された窒素量 [kg-N]
- Frac<sub>LEACH</sub> : それぞれの活動で溶脱・流出する窒素割合 [kg-N/kg-N]  
(=0.30) (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値(Vol.4 Table11.3))

表 5-69 無機質肥料、有機質肥料などから溶脱・流出した窒素量 [t (NH<sub>3</sub>-N+NO<sub>x</sub>-N)]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
無機質肥料由来 (N <sub>FERT</sub> ×Frac <sub>LEACH</sub> )	183,500	158,181	146,153	141,291	104,991	122,819	116,106	118,979	122,918	118,333	111,649	112,411	112,411	112,411
有機質肥料由来 (N <sub>ON</sub> ×Frac <sub>LEACH</sub> )	158,058	152,583	145,101	129,069	124,185	129,534	129,087	126,235	126,441	128,024	136,782	136,141	139,694	139,690
放牧家畜由来 (N <sub>PRP</sub> ×Frac <sub>LEACH</sub> )	3,896	3,851	3,580	3,349	3,322	3,213	3,216	3,152	3,117	2,999	3,083	3,071	3,120	3,170
作物残さのすきこみ由来 (N <sub>CR</sub> ×Frac <sub>LEACH</sub> )	45,299	44,780	47,719	43,955	38,834	37,750	37,521	38,290	38,276	37,328	36,916	35,332	35,157	34,147
無機化された窒素由来 (N <sub>SOM</sub> ×Frac <sub>LEACH</sub> )	71,071	69,161	67,136	65,482	64,499	64,332	63,814	63,644	63,455	63,219	62,910	62,531	62,083	61,644
合計 (溶脱流出した窒素量) (A)	461,824	428,556	409,689	383,144	335,831	357,648	349,744	350,299	354,206	349,903	351,340	349,486	352,464	351,063

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値 (-115%～+287%) を用いた。活動量の不確実性は、上記「大気沈降」同様に 9%を採用した。その結果、排出量の不確実性は-115%～+287%と評価された。



### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

#### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

#### e) 再計算

2015年度以降の化学肥料（硝化抑制剤含まない）統計値と、2016年度以降の硝化抑制剤入り化学肥料の統計値が更新された。また、肉用牛と豚の排せつ物に含まれる窒素量の算出方法が改訂された。従って、全年度の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

#### f) 今後の改善計画及び課題

排出係数や窒素の溶脱・流出割合などについて、我が国独自の数値が設定出来るよう、検討している。

## 5.6. サバンナを計画的に焼くこと (3.E.)

当該排出区分では、2006年 IPCC ガイドラインにおいて「亜熱帯における草地の管理のために…」と記されているが、我が国では該当する活動が存在しないため、「NO」として報告する。

## 5.7. 野外で農作物の残留物を焼くこと (3.F.)

### a) 排出源カテゴリーの説明

野外における作物残渣の不完全な燃焼により、 $\text{CH}_4$ 、 $\text{N}_2\text{O}$  が大気中に放出される。本カテゴリーでは、これらの  $\text{CH}_4$ 、 $\text{N}_2\text{O}$  排出に関する算定、報告を行なう。

2018年度におけるこのカテゴリーからの温室効果ガス排出量は  $\text{CH}_4$  が 63kt- $\text{CO}_2$ 換算、 $\text{N}_2\text{O}$  が 20kt- $\text{CO}_2$ 換算であり、我が国の温室効果ガス総排出量(LULUCFを除く)のそれぞれ 0.005%、0.002%を占めている。また、1990年度の排出量と比較するとそれぞれ 50.1%、50.1%の減少となっている。

表 5-70 野外で農作物の残留物を焼くことによる CH<sub>4</sub>及び N<sub>2</sub>O 排出量 (3.F.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018			
CH <sub>4</sub>	3.F.1. 穀物	小麦	kt-CH <sub>4</sub>	0.38	0.22	0.27	0.31	0.26	0.24	0.22	0.21	0.20	0.19	0.18	0.18	0.18	0.16		
		大麦		0.15	0.09	0.08	0.08	0.07	0.07	0.06	0.06	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	
		とうもろこし		0.08	0.07	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.05	0.04	0.05	
		稲		1.96	2.05	1.38	1.03	0.71	0.70	0.70	0.66	0.75	0.68	0.56	0.57	0.47	0.47	0.47	
		その他穀物類		0.06	0.05	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.11	0.12	0.12	0.12	0.11	0.12	0.12	0.13	
	3.F.2. 豆類	大豆		0.47	0.22	0.40	0.43	0.47	0.45	0.44	0.42	0.42	0.43	0.46	0.49	0.49	0.49	0.47	
	その他豆類	0.35		0.27	0.22	0.19	0.16	0.16	0.16	0.15	0.16	0.16	0.14	0.12	0.12	0.12	0.12		
	3.F.3. 根菜類	ばれいしょ		0.23	0.20	0.18	0.17	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.15	0.15	0.15	0.15	0.15	0.15	
		てんさい		0.14	0.14	0.14	0.13	0.13	0.12	0.12	0.12	0.11	0.11	0.11	0.12	0.11	0.11		
		その他根菜類(野菜類除く)		0.20	0.17	0.15	0.13	0.13	0.12	0.12	0.12	0.12	0.12	0.11	0.11	0.11	0.11		
	3.F.4. さとうきび	0.04		0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03	0.03		
	3.F.5. 野菜類	0.95		0.87	0.81	0.74	0.72	0.72	0.71	0.71	0.70	0.69	0.69	0.69	0.68	0.68	0.68		
	その他	0.08		0.06	0.05	0.04	0.04	0.03	0.03	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02		
	合計	kt-CH <sub>4</sub>		5.1	4.4	3.8	3.4	3.0	2.9	2.9	2.8	2.9	2.8	2.7	2.7	2.6	2.5		
		kt-CO <sub>2</sub> 換算		127	111	96	86	76	74	73	71	72	70	67	67	64	63		
	N <sub>2</sub> O	3.F.1. 穀物		小麦	kt-N <sub>2</sub> O	0.010	0.006	0.007	0.008	0.007	0.006	0.006	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.005	0.004
				大麦		0.004	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.002	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001
とうもろこし			0.002	0.002		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001		
稲			0.051	0.053		0.036	0.027	0.018	0.018	0.018	0.017	0.019	0.018	0.015	0.015	0.012	0.012		
その他穀物類			0.002	0.001		0.002	0.002	0.002	0.002	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003		
3.F.2. 豆類		大豆	0.012	0.006		0.010	0.011	0.012	0.012	0.011	0.011	0.011	0.011	0.012	0.013	0.013	0.012		
その他豆類		0.009	0.007	0.006		0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.003	0.003	0.003		
3.F.3. 根菜類		ばれいしょ	0.006	0.005		0.005	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004	0.004		
		てんさい	0.004	0.004		0.004	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003		
		その他根菜類(野菜類除く)	0.005	0.004		0.004	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003	0.003		
3.F.4. さとうきび		0.001	0.001	0.001		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001			
3.F.5. 野菜類		0.025	0.023	0.021		0.019	0.019	0.019	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018	0.018			
その他		0.002	0.002	0.001		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001			
合計		kt-N <sub>2</sub> O	0.13	0.12		0.10	0.09	0.08	0.08	0.08	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07	0.07		
		kt-CO <sub>2</sub> 換算	39	34		30	26	23	23	22	22	22	22	21	21	20	20		
全ガス合計		kt-CO <sub>2</sub> 換算	166	145		126	112	99	96	95	93	94	92	88	88	84	83		

b) 方法論

■ 算定方法

CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O の排出については、2006 年 IPCC ガイドラインに示された方法を用いて算定した。

$$E = A \times M_B \times C_f \times G_{ef} \times 10^{-3}$$

E : 農作物残渣の野焼きによる温室効果ガス排出量 [t-CH<sub>4</sub> or t-N<sub>2</sub>O]

A : 野焼き対象の面積 [ha]

M<sub>B</sub> : 単位面積当たり燃焼重量[t/ha]

C<sub>f</sub> : 燃焼係数

G<sub>ef</sub> : 排出係数 [g-CH<sub>4</sub>/kg or g-N<sub>2</sub>O/kg]

■ 排出係数

CH<sub>4</sub>: 2.7 [g-CH<sub>4</sub>/kg (乾物)] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

N<sub>2</sub>O: 0.07 [g-N<sub>2</sub>O/kg (乾物)] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

■ 活動量

算定に使用したパラメータは表 5-71 に記載している。残渣の焼却割合と燃焼係数は、作物残渣のすき込みと共通のものを使用している。稲については、焼却処理される稲わら及びもみ殻量のデータ(表 5-72) が得られるため、単位面積当たり燃焼重量(M<sub>B</sub>) は乗じないこととする。なお、麦類の野焼きされる割合については、作物残渣(3.D.a.4.) の表 5-63 で示したものをを用いている。

表 5-71 残さの焼却割合、単位当たり燃焼重量×燃焼係数 ( $M_B \times C_f$ )、稲の燃焼係数

作物	残渣の焼却割合	$M_B \times C_f$	燃焼係数( $C_f$ )
稲	—	—	0.80
豆類	12% <sup>1)</sup>	10 <sup>3)</sup>	—
野菜類、てんさい、とうもろこし、 いも類、そば、なたね、い、葉たばこ	7% <sup>2)</sup>	10 <sup>3)</sup>	—
さとうきび	7% <sup>2)</sup>	6.5	—
麦類	表 5-63 参照	4 <sup>4)</sup>	—

(出典) 残さの焼却割合：「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業」

$M_B \times C_f$ ：2006年 IPCC ガイドライン

(注)

1): 豆類の値、2): 野菜の値、3): とうもろこしの値、4): 小麦の値

稲の野焼きされる作物残渣量は、都道府県において把握しているデータより算出した稲わら・もみがらのうち焼却処理される量のデータを使用した(表 5-72)。その他の作物については「作物統計」および「野菜生産出荷統計」に掲載されている面積データから推計した。

表 5-72 焼却処理される稲わら及びもみがら量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
稲わら	438.2	536.9	429.1	276.6	163.5	149.3	187.0	149.4	183.4	161.7	144.2	152.8	129.3	129.3
もみがら	581.3	528.3	291.3	260.3	206.0	212.9	179.2	195.6	206.6	193.9	147.5	142.6	114.2	114.2
計	1,019.5	1,065.2	720.4	536.9	369.4	362.2	366.2	345.0	390.0	355.6	291.7	295.4	243.5	243.5

(出典) 都道府県において把握しているデータより算出

### c) 不確実性と時系列の一貫性

#### ■ 不確実性

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインに示されている各パラメータの不確実性から合成して算出した値(CH<sub>4</sub>: 296%、N<sub>2</sub>O: 300%)を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差(1%)で代替した。その結果、CH<sub>4</sub>、N<sub>2</sub>O 排出量の不確実性はそれぞれ、296%、300%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

### e) 再計算

焼却処理される稲わら及びもみがら量が更新されたため 2017 年度の排出量が更新された。再計算の影響の程度については 10 章参照。

### f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

5.8. 石灰施用 (3.G.)

a) カテゴリーの説明

炭酸カルシウム (CaCO<sub>3</sub>) 肥料やドロマイト (CaMg(CO<sub>3</sub>)<sub>2</sub>) 肥料の土壌への施用により、土壌水中で炭酸水素イオン (HCO<sub>3</sub><sup>-</sup>) が遊離され、さらに CO<sub>2</sub> となり大気中に放出される。本カテゴリーではそれらの農地土壌への石灰施用に伴う CO<sub>2</sub> 排出量を取り扱う。2018 年度における当該カテゴリーからの CO<sub>2</sub> 排出量は 294kt-CO<sub>2</sub> であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.02% を占めている。1990 年度比 46.7% の減少となっている。

表 5-73 石灰施用に伴う CO<sub>2</sub> 排出量 (3.G.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO <sub>2</sub>	3.G.-炭酸カルシウム	kt-CO <sub>2</sub>	550	303	332	231	270	242	246	369	379	362	258	252	293	293
	3.G.-ドロマイト		0.3	0.5	0.5	0.6	0.6	1.0	1.1	0.6	1.1	1.0	0.8	0.8	0.9	0.9
	合計	kt-CO <sub>2</sub>	550	304	333	231	270	243	247	370	380	363	259	253	294	294

b) 方法論

■ 算定方法

2006 年 IPCC ガイドライン (Vol.4, 11.27, Figure11.4) のデシジョンツリーに従い、Tier 1 法を用いて算定方法を行った。

$$E = (M_{Limestone} \times EF_{Limestone} + M_{Dolomite} \times EF_{Dolomite}) \times 44/12$$

- E* : 農地土壌への石灰施用に伴う CO<sub>2</sub> 排出量 [t-CO<sub>2</sub>/yr]
- M<sub>Limestone</sub>* : 炭酸カルシウムの施用量 [t/yr]
- EF<sub>Limestone</sub>* : 炭酸カルシウムの排出係数 [t-C/t]
- M<sub>Dolomite</sub>* : ドロマイトの施用量 [t/yr]
- EF<sub>Dolomite</sub>* : ドロマイトの排出係数 [t-C/t]

■ 排出係数

- 炭酸カルシウム (CaCO<sub>3</sub>) : 0.12 [t-C/t] (2006 年 IPCC ガイドラインデフォルト値)
- ドロマイト (CaMg(CO<sub>3</sub>)<sub>2</sub>) : 0.13 [t-C/t] (2006 年 IPCC ガイドライン デフォルト値)

■ 活動量

○ 炭酸カルシウムおよびドロマイト施用量

「ポケット肥料要覧」に示される肥料の種類別生産量及び輸入量を積算して求めた。なお専門家判断に基づき、同統計に示される肥料のうち「炭酸カルシウム肥料」の全量、「貝化石肥料」、「粗砕石灰石」、「貝殻肥料」の 70% を炭酸カルシウム、また「炭酸苦土肥料」の全量及び「混合苦土肥料」の 74% をドロマイトと想定した。

表 5-74 炭酸カルシウムとドロマイトの施用量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
炭酸カルシウム施用量	1,250	689	755	524	613	550	558	839	860	822	586	573	665	665
ドロマイト施用量	0.7	1.1	1.1	1.4	1.2	2.0	2.4	1.3	2.2	2.0	1.7	1.7	2.0	2.0

(出典) 「ポケット肥料要覧」のデータより算出

c) 不確実性と時系列の一貫性

■ 不確実性評価

排出係数の不確実性は、2006 年 IPCC ガイドラインに示されている 50% を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差 (1%) で代替した。その結果、排出量の不確実性は 50% と評価された。

### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

#### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

#### e) 再計算

2015年以降の炭酸カルシウムとドロマイトの施用量の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

#### f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

## 5.9. 尿素施用 (3.H.)

### a) カテゴリーの説明

尿素 ((NH<sub>3</sub>)<sub>2</sub>CO) の施肥により、土壌水中で炭酸水素イオン (HCO<sub>3</sub><sup>-</sup>) が遊離され、さらに CO<sub>2</sub> となり大気中に放出される。本カテゴリーでは、この CO<sub>2</sub> 排出に関する算定、報告を行う。

なお、国内生産された尿素に関しては、工業プロセス部門で CO<sub>2</sub> 排出量を使用段階まで一括して取り扱い計上しているため、輸入された尿素の使用に伴う CO<sub>2</sub> 排出量の算定を行う。

2018年度における当該カテゴリーからの CO<sub>2</sub> 排出量は 193 kt-CO<sub>2</sub> であり、我が国の温室効果ガス総排出量 (LULUCF を除く) の 0.02% を占めている。また、1990年度の排出量と比較すると 229% の増加となっている。

表 5-75 尿素施用に伴う CO<sub>2</sub> 排出量 (3.H.)

ガス	区分	単位	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
CO <sub>2</sub>	3.H. 尿素肥料	kt-CO <sub>2</sub>	59	56	110	179	120	160	168	150	198	189	201	193	193	193

### b) 方法論

#### ■ 算定方法

2006年 IPCC ガイドライン (Vol.4, 11.33, Figure11.5) のデシジョンツリーに従い、Tier 1 法を用いて算定方法を行った。

$$E = (M \times EF) \times 44/12$$

*E* : 農地土壌への尿素肥料に伴う CO<sub>2</sub> 排出量 [t-CO<sub>2</sub>/yr]

*M* : 尿素の施用量 (輸入分) [t/yr]

*EF* : 尿素肥料の排出係数 [t-C/t]

#### ■ 排出係数

0.20 t-C/t (2006年 IPCC ガイドラインデフォルト値)

#### ■ 活動量

「ポケット肥料要覧」に示されている「尿素肥料需要量」から「尿素国内生産量のうち肥料用」を差し引いて算出した尿素肥料輸入量を用いた。

表 5-76 尿素肥料輸入量 [kt]

項目	1990	1995	2000	2005	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
尿素肥料輸入量	80	76	149	244	164	218	229	205	270	258	274	263	263	263

(出典)「ポケット肥料要覧」のデータより算出

### c) 不確実性と時系列の一貫性

#### ■ 不確実性評価

排出係数の不確実性は、2006年 IPCC ガイドラインに示されている 50%を用いた。活動量の不確実性は、「耕地及び作付面積統計」に記載されている水田面積の標準誤差（1%）で代替した。その結果、排出量の不確実性は 50%と評価された。

#### ■ 時系列の一貫性

排出量は時系列的に一貫した算定方法、データソースを用いて算定されている。

### d) QA/QC と検証

2006年 IPCC ガイドラインに従った方法で、一般的なインベントリ QC 手続きを実施している。一般的なインベントリ QC には、排出量の算定に用いている活動量、排出係数等パラメータのチェック、及び出典文献の保存が含まれる。QA/QC 活動については、1章に詳述している。

### e) 再計算

2015年以降の尿素の統計値が改訂されたので、2015年以降の排出量が再計算された。再計算の影響の程度については10章参照。

### f) 今後の改善計画及び課題

特になし。

## 5.10. その他の炭素を含む肥料 (3.I.)

当該排出区分に該当する活動が存在しないため、「NO」として報告する。

## 5.11. その他 (3.J.)

その他として考えられる排出源がないため、「NO」として報告する。



## 参考文献

1. IPCC「国家温室効果ガスインベントリのための2006年IPCCガイドライン」(2006)
2. IPCC“*IPCC 1995 Report: Agricultural Options for Mitigation of Greenhouse Gas Emissions*”, 747-771, 1995.
3. International Rice Research Institute (IRRI), “*World Rice STATISTICS 1993-94*”
4. 環境庁「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第1部(平成12年9月)」(2000)
5. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果 第3部(平成14年8月)」(2002)
6. 環境省「温室効果ガス排出量算定に関する検討結果(平成18年2月)」(2006)
7. 環境省環境再生・資源循環局「廃棄物の広域移動対策検討調査及び廃棄物等循環利用量実態調査報告書(廃棄物等循環利用量実態調査編)」
8. 環境省環境再生・資源循環局「日本の廃棄物処理」
9. 気象庁「日本気候表」
10. 農林水産省生産局畜産部畜産企画課「家畜排せつ物処理状況調査結果」(2009)
11. 農林水産省「平成23年度農林水産分野における地球環境対策推進手法の開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2012)
12. 農林水産省「平成24年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2013)
13. 農林水産省「平成25年度農林水産分野における地球環境対策推進手法開発事業のうち農林水産業由来温室効果ガス排出量精緻化検討・調査事業 報告書」(2014)
14. 農林水産省「土壌環境基礎調査 基準点調査(一般調査) 中間とりまとめデータ集」(1990)
15. 農林水産省「わが国の農地の現況 第4次土地利用基盤整備基本調査」(2006)
16. 農林水産省「鶏の改良増殖目標」(2015)
17. 農林水産省「農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業 報告書」(2014)
18. 農林水産省「農地土壌炭素貯留等基礎調査事業 報告書」(2018)
19. 農林水産省「作物統計」
20. 農林水産省「畜産統計」
21. 農林水産省「小動物及び実験動物等の飼養状況」
22. 農林水産省「耕地及び作付面積統計」
23. 農林水産省「畜産物生産費統計」
24. 農林水産省「畜産物流通統計」
25. 農林水産省「牛乳乳製品統計」
26. 農林水産省「家畜の飼養に係る衛生管理の状況等」
27. 農林水産省「飼料月報」
28. 農林水産省「野菜生産出荷統計」
29. 農林水産省生産局畜産部畜産振興課「馬関係資料」
30. 平成20年度環境バイオマス総合対策推進事業のうち農林水産分野における地球温暖化対策調査事業報告書(全国調査事業) 事業課題名 我が国の気候条件等を踏まえた家畜排せつ物管理に伴う温室効果ガス排出量算定方法の検討
31. 北海道農政部「北海道施肥ガイド2010」(2010)
32. 沖縄県「家畜・家きん等の飼養状況調査結果」
33. (財)農林統計協会「ポケット肥料要覧」
34. 農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本飼養標準」(社)中央畜産会
35. 農業・食品産業技術総合研究機構 編「日本標準飼料成分表」(社)中央畜産会
36. (社)中央畜産会「家畜改良関係資料」

37. (社) 家畜改良事業団「乳用牛群能力検定成績」
38. (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 第四集」(1999)
39. (社) 畜産技術協会「畜産における温室効果ガスの発生制御 総集編」(2002)
40. (社) 畜産技術協会「ブロイラー飼養実態アンケート調査」(2008)
41. (社) 日本下水道協会 資料
42. 日本たばこ産業株式会社 資料
43. 温暖化対策土壌機能調査協議会「土壌由来温室効果ガス・土壌炭素調査事業 報告書」
44. Akiyama, H., Yagi, K., and Yan, X., “Direct  $N_2O$  emissions and estimate of  $N_2O$  emission factors from Japanese agricultural soils”, In program and Abstracts of the International Workshop on Monsoon Asia Agricultural Greenhouse Gas Emissions, March 7-9, 2006, Tsukuba, Japan, 27 (2006 a)
45. Akiyama, H., Yan X. and Yagi, K., “Estimations of emission factors for fertilizer-induced direct  $N_2O$  emissions from agricultural soils in Japan: Summary of available data”, Soil Science and Plant Nutrition, 52, 774-787 (2006 b)
46. Akiyama, H., Yan X. and Yagi, K., “Evaluation of effectiveness of enhanced-efficiency fertilizers as mitigation options for  $N_2O$  and  $NO$  emissions from agricultural soils: meta-analysis”, Global Change Biology, 16(6), 1837-1846 (2010)
47. 長命洋佑、寺田文典、広岡博之「乳牛と肉牛における窒素排せつ量の予測と比較」畜産学会報、77 (4) , 485-494 (2006)
48. 伊達昇「便覧 有機質肥料と微生物資材」、農山漁村文化協会、pp. 116-117、(1988)
49. 麓 多門、柳原哲司、齋藤 隆、八木一行「農地からの温室効果ガス発生量の推定 -プロセスモデルによるアプローチ-」、土壌の物理性 114、49-52、(2010)
50. 波多野隆介「草地飼料畑の管理実態調査事業」平成 28 年度日本中央競馬会畜産振興事業の報告書 (2017)
51. Hayano, M., Fumoto, T., Yagi, K. and Shirato, Y., “National-scale estimation of methane emission from paddy fields in Japan: Database construction and upscaling using a process-based biogeochemistry model” Soil Science Plant Nutrition, 59(5), 812-823 (2013)
52. 寶示戸雅之、池口厚男、神山和則、島田和宏、荻野暁史、三島慎一郎、賀来康一「わが国農耕地における窒素負荷の都道府県別評価と改善シナリオ」日本土壌肥料学雑誌、74 (4) , 467-474 (2003)
53. 保科次雄、香西修治、本荘吉男「土壌中におけるチャ有機物の分解と茶樹による窒素の再吸収」、茶業研究報告 55 号、30-36 (1982)
54. 石橋誠、橋口純也、古閑護博「畜産における温室効果ガス排出削減技術の開発 (第 2 報)」畜産環境保全に関する試験研究 平成 15 年度畜産研究所試験成績書、熊本県農業研究センター畜産研究所 (2003)
55. Katayanagi, N., Fumoto, T., Hayano, M., Takata, Y., Kuwagata, T., Shirato, Y., Sawano, S., Kajiura, M., Sudo, S., Ishigooka, Y. and Yagi, K., “Development of a method for estimating total  $CH_4$  emission from rice paddies in Japan using the DNDC-Rice model”, Science of the Total Environment, 547, 429-440 (2016)
56. Katayanagi, N., Fumoto, T., Hayano, M., Shirato, Y., Takata, Y., Leon, A. and Yagi, K., “Estimation of total  $CH_4$  emission from Japanese rice paddies using a new estimation method based on the DNDC-Rice simulation model”, Science of the Total Environment, 601-602, 346-355 (2017)
57. 木下忠孝、辻正樹「てん茶園の窒素収支」、茶業研究報告 100 号、52-54 (2005)
58. Kume, S., Nonaka, K., Oshita, T. and Kozakai, T., “Evaluation of drinking water intake, feed water intake and total water intake in dry and lactating cows fed silages”, Livestock Science, 128(1-3), 46-51 (2010)

59. 松本成夫「地域における窒素フローの推定方法の確立とこれによる環境負荷の評価」、農業環境技術研究所報告 18 号、81-152 (2000)
60. Minamikawa, K., Fumoto, T., Itoh, M., Hayano, M., Sudo, S. and Yagi, K., “*Potential of prolonged midseason drainage for reducing methane emission from rice paddies in Japan: a long-term simulation using the DNDC-Rice model*”, *Biology and Fertility of Soils*, 50(6), 879-889 (2014)
61. Mori, A. and Hojito, M., “*Methane and nitrous oxide emissions due to excreta returns from grazing cattle in Nasu, Japan*”, *Grassland Science*, 61(2), 109-120 (2015)
62. 丹羽太左衛門「養豚ハンドブック」養賢堂
63. 野中邦彦「茶園における窒素環境負荷とその低減のための施肥技術」、茶業研究報告 100 号、29-41 (2005)
64. 永田修、鮫島良次「石狩川泥炭地の土地利用と温室効果ガス—湿原、水田、転換畑の比較—」、新しい研究成果：北海道地域、115-121 (2006)
65. 永田修、杉戸智子、小林創平、鮫島良次「小麦残渣および肥料が施与された慣行耕起・省耕起・不耕起栽培体系における亜酸化窒素の発生」、*Journal of Agricultural Meteorology*, 65(2), 151-159. (2009)
66. 小川和夫、竹内豊、片山雅弘「北海道の耕草地におけるバイオマス生産量及び作物による無機成分吸収量」北海道農業試験場研究報告、149、57-91 (1988)
67. Ogino, A., Murakami, H., Yamashita, T., Furuya, M., Kawahara, H., Ohkubo, T. and Osada, T., “*Estimation of nutrient excretion factors of broiler and layer chickens in Japan*”, *Animal Science Journal* 88(4), 659-668 (2016)
68. 太田充、岩橋光育、森田明雄「一番茶後の更新茶園における整せん枝有機物の分解と窒素の消長」茶業研究報告 84 号別冊、130-131 (1996)
69. 大谷文博、甘利雅弘、田鎖真澄、久米新一「泌乳牛の尿量は窒素およびカリウム摂取量と乳量から推定できる」畜産草地研究所成果情報 (2010)
70. Osada, T., Kuroda, K. and Yonaga, M., “*Determination of nitrous oxide, methane, and ammonia emissions from a swine waste composting process*”, *Journal of Material Cycles and Waste Management*, 2(1), 51-56 (2000)
71. Osada, T., “*Nitrous Oxide Emission from Purification of Liquid Portion of Swine Wastewater*”, *Greenhouse Gas Control Technologies - 6 International Conference, Volume I*, J. Gale and Y. Kaya (Eds.), 1299-1304 (2003)
72. Osada, T., Fukumoto, Y., Tamura, T., Shiraihi, M. and Ishibashi, M., “*Greenhouse gas generation from livestock waste composting*”, *Proceedings of the Fourth International Symposium on Non-CO<sub>2</sub> Greenhouse Gases (NCGG-4), Science, Control, Policy and Implementation*, Millpress, Rotterdam, 105-111 (2005)
73. 尾和尚人「我が国の農作物の栄養収支」(「平成 8 年度関東東海農業環境調和型農業生産における土壌管理技術に関する第 6 回研究会「養分の効率的利用技術の新たな動向」) (1996)
74. 斎藤守「肥育豚及び妊娠豚におけるメタンの排泄量」日本畜産学会報 59 (9)、773-778 (1988)
75. 柴田正貴、寺田文典、栗原光規、西田武弘、岩崎和雄「反芻家畜におけるメタン発生量の推定」、日本畜産学会報、64 (8) , 790-796 (1993)
76. 白石 誠、長田 隆、水木 剛、高取 健治「牛舎排水浄化処理施設から発生する温室効果ガス」日本畜産学会報、88 (4)、479-490 (2017)
77. 橘尚明、池田敏久、池田勝彦「茶樹における樹齢の進行および多肥条件下での窒素吸収特性」、日本作物学会紀事 65 (1)、8-15 (1996)
78. 高田裕介、中井信、小原洋「1992 年の農耕地分布に基づくデジタル農耕地土壌図の作成」、日本土壌肥科学雑誌、第 80 巻第 5 号 502-505 (2009)

79. 土屋いづみ、悦永秀雄、堂岸宏、坂本卓馬、石田三佳、長谷川三喜、長田隆「鶏糞乾燥処理施設における温室効果ガス発生量の測定」 日本畜産学会報、85 (1)、61-69 (2014)
80. 築城幹典、原田靖生「家畜の排泄物量推定プログラム」、システム農学 (J、JASS)、13 (1)、17-23 (1997)
81. 鶴田治雄「温室効果ガス削減農法モデルの構築 – 亜酸化窒素について –」「平成 12 年度温室効果ガス排出量削減定量化法調査報告書」、(財) 農業技術協会、p.42 (2001)
82. Yagasaki, Y., and Shirato, Y., “Assessment on the rates and potentials of soil organic carbon sequestration in agricultural lands in Japan using a process-based model and spatially explicit land-use change inventories – Part 1: Historical trend and validation based on nation-wide soil monitoring” Biogeosciences, 11(16), 4429–4442 (2014)